

(財)大阪府文化財センター調査報告書 第159集

寝屋川市

寝屋南遺跡・奥山遺跡

一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター

寝屋川市

寝屋南遺跡・奥山遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



奥山1号墳石室全景



奥山1号墳出土遺物

序 文

財団法人大阪府文化財センターでは、国土交通省・西日本高速道路株式会社の委託を受けて北河内を北東から南西に縦断する第二京阪道路の予定地の発掘調査を順次実施しており、これまでに数多くの成果をあげてまいりました。本書に掲載した寝屋南遺跡及び奥山遺跡も、この第二京阪道路建設事業の一環として調査を行なったものです。

両遺跡は寝屋川市の市街地東方に広がる小高い丘陵上に位置しており、その周辺には国指定史跡の高宮廃寺跡や石宝殿古墳、太秦高塚古墳に代表される太秦古墳群など、北河内を代表する数多くの遺跡が点在しております。

調査の結果、寝屋南遺跡では7世紀中葉に営まれた集落跡を、また奥山遺跡では6世紀後半に築かれた横穴式石室を埋葬施設とする円墳を確認することができました。寝屋川市内の横穴式石室は、寝屋古墳に次いでこれが2例目であり、また本格的な発掘調査が実施されたものとしては最初の古墳となります。石室は後世に大きく破壊されていましたが、床面は良好に残っており、土器のほかに、玉類などの装身具、弓矢・鉾などの武器、金銅装の馬具など豪華な遺物が数多く発見されました。中でも注目されるのは、11点に及ぶ耳飾りであり、これによって一つの古墳の中に、少なくとも6体が埋葬されていたことが明らかとなりました。

このように、調査では北河内地域の6・7世紀という時代を考える上で欠くことのできない数多くの成果を上げることができました。これらの成果を収めた本書が、多くの方々に活用されとともに地域の歴史の解明に寄与することができれば幸いです。

最後に、本調査にあたってご指導とご協力を賜った国土交通省・西日本高速道路株式会社・大阪府教育委員会をはじめとする関係諸機関、並びに地元関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターの事業につきましてのより一層のご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

2007年3月

財団法人 大阪府文化財センター
理事長 水野正好

例 言

1. 本書は、大阪府寝屋川市寝屋地先に所在する寝屋南遺跡および奥山遺跡の発掘調査報告書である。
なお、奥山遺跡は平成14年度に実施した寝屋南遺跡西地区確認調査で新規発見された遺跡である。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、両遺跡共に、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受け、西日本高速道路株式会社（当時：日本道路公団）関西支社 枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人 大阪府文化財センターが実施した。契約名、実施期間等は以下のとおりである。

【寝屋南遺跡】

受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）寝屋南遺跡発掘調査

調査名：寝屋南遺跡03-1

受託契約期間：平成15年4月1日～平成15年10月31日

現地調査期間：平成15年5月13日～平成15年10月24日

【奥山遺跡】

受託契約名：第二京阪道路（大阪北道路）奥山遺跡発掘調査

調査名：奥山遺跡03-1

受託契約期間：平成15年8月1日～平成16年3月31日

現地調査期間：平成15年8月12日～平成16年2月27日

なお、平成18年度には本書刊行のための最終編集を行った。

3. 調査は両遺跡ともに以下の体制で実施した。

調査部長 玉井 功、調整課長 赤木克視、調整係長 森屋直樹、技師 山元 建

京阪支所長 渡邊昌宏、主査 上野貞子〔写真〕、調査第三係長 岡戸哲紀、技師 伊藤 武

専門調査員 小西絵美

なお、本書の最終編集段階での体制は、調査部長 赤木克視、調整課長 田中和弘

調整第一係長 岡戸哲紀、調整第二係長 山上 弘、技師 後川恵太郎、京阪調査事務所長 山本 彰

調査第二係長 金光正裕、技師 伊藤 武、専門調査員 市田英介である。

4. 奥山1号墳出土の金属製品のX線撮影および保存処理は、中部調査事務所主査山口誠治が行った。
5. 発掘調査および報告書の作成にあたって、寝屋川市教育委員会、寝屋川公園管理事務所、地元寝屋自治会、大阪府教育委員会文化財保護課をはじめ、以下の方々にご指導・ご協力いただいた。記して感謝の意を表したい。（順不同、敬称略）

安部みき子（大阪市立大学）、一瀬和夫・宮崎泰史（大阪府教育委員会）、井本伸廣（京都教育大学）

植野浩三（奈良大学）、小倉徹也（財団法人 大阪市文化財協会）、塩山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会）、富山直人（神戸市立博物館）、堀田啓一・宮原晋一（奈良県立橿原考古学研究所）

吉澤則男（羽曳野市教育委員会）、和田晴吾（立命館大学）

6. 本書の執筆・編集は伊藤が行い、第4章第7節の「両頭金具について」は小西が担当した。
7. 本調査に関わる遺物・写真・実測図等は財団法人 大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 遺構図および断面図に示した標高は、東京湾平均海水位（T.P.）からのプラス値である。単位は全てmである。
2. 発掘調査での使用測地系は世界測地形（測地成果2000）である。遺構図に記載した座標値はすべてm単位である。
3. 本書で用いた北はいずれも国土座標軸第Ⅵ系の座標北を示す。ちなみに奥山遺跡では座標北は磁北より東へ7° 03′、真北より西へ約0° 12′振れている。
4. 現地調査および整理作業は、平成15年度に改訂された財団法人 大阪府文化財センター 2003『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】に準拠して行った。
5. 土層断面図で使用した土色は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は、遺跡ごとに遺構の種類や調査区にかかわらず1から通して付し、複数の遺構の集合体である掘立柱建物や竪穴住居などについては、それとは別に遺構番号を付した。
例：「1 溝」・「2 土坑」、「掘立柱建物 1」・「竪穴住居 1」
ただし、奥山遺跡に関しては、上記のような遺構番号の付し方が適切でなかったため、それに準じていない。
例：「周濠」、「墳丘」、「石室掘方」
本書中の遺構番号は、基本的に現地調査段階での遺構番号をそのまま記載している。
7. 遺物実測図の縮尺は、金属製品・石製品 2/3、土器 1/3 を基本としたが、適宜遺物に即して異なる縮尺としており、必ずしもこの限りではない。各々の縮尺率については、スケールに明示しているのでそちらを参照されたい。また土器の実測図のうち、土師器は断面を白抜き、須恵器は黒塗りで表現した。
8. 挿図中の遺物番号は写真図版中の遺物番号と対応するよう、遺跡ごとに1から付した。
9. 遺構図における断面位置は図面上に「L」形によってその位置を示した。縮尺は各図のスケールを参照されたい。
10. 遺物写真のうち、俯瞰撮影を行ったものなど、縮尺率が判明するもののみ図版中に縮尺率を記した。
11. 引用文献、参考文献等は各章の末尾に記した。

寢屋南遺跡・奥山遺跡

目 次

巻頭図版

序文

例言・凡例

第1章	調査に至る経緯と方法	1
第1節	調査に至る経緯と経過	1
第2節	調査の方法	4
第2章	遺跡の位置と環境	8
第3章	寢屋南遺跡の調査成果	13
第1節	基本層序	13
第2節	遺構	17
第3節	遺物	28
第4章	奥山遺跡の調査成果	31
第1節	調査の経緯	31
第2節	古墳の立地と環境	32
第3節	墳丘と外部施設	37
第4節	埋葬施設	39
第5節	遺物の出土状況	43
第6節	遺物	49
第7節	遺構・遺物の検討	68
1.	石室の石材	68
2.	両頭金具について	71
第5章	まとめ	75
第1節	寢屋南遺跡	75
第2節	奥山遺跡	76

巻頭図版目次

巻頭図版1 奥山1号墳石室全景

表1 出土遺物一覧表……………49

挿 図 目 次

図1	調査位置および周辺遺跡分布図……………	1
図2	調査区内の地区割り方法……………	4
図3	寝屋南遺跡トレンチ配置図……………	5
図4	寝屋南遺跡地区割り図……………	6
図5	奥山遺跡地区割り図……………	7
図6	基本層序柱状図……………	14
図7	寝屋南遺跡検出遺構全体図……………	15・16
図8	掘立柱建物1・3・5平面・断面図……………	18
図9	掘立柱建物2・4 および柱穴平面・断面図……………	19
図10	竪穴住居1平面・断面図……………	20
図11	竪穴住居2・堀1・64溝 平面・断面図……………	21
図12	竪穴住居2出土石鏃……………	21
図13	41溝平面・断面図……………	22
図14	土坑平面・断面図……………	23
図15	1落ち込み断面図……………	24
図16	西斜面北・南トレンチ、 東斜面裾トレンチ断面図……………	26
図17	東斜面1～4トレンチ断面図……………	27
図18	掘立柱建物2・4出土土器実測図……………	28
図19	竪穴住居1・2出土土器実測図……………	29
図20	西斜面北トレンチ、 東斜面裾トレンチ出土土器実測図……………	30
図21	奥山1号墳周辺の遺跡分布図……………	31
図22	奥山1号墳調査前墳丘測量図……………	33
図23	奥山遺跡全体図……………	34
図24	奥山1号墳墳丘平面図……………	35

巻頭図版2 奥山1号墳出土遺物

図25	奥山1号墳墳丘断面図……………	36
図26	周濠・排水溝断面図……………	37
図27	焼土坑平面・断面図……………	38
図28	棺台平面・断面図……………	40
図29	奥山1号墳横穴式石室 平面・立面図……………	41・42
図30	土器出土状況図……………	44
図31	金属製品出土状況図……………	45
図32	墓道床面下土器出土状況図……………	47
図33	周濠内土器出土状況……………	48
図34	玉類実測図……………	50
図35	耳環実測図……………	51
図36	武器類実測図……………	53
図37	鉄鏃実測図……………	54
図38	工具類・馬具類実測図……………	55
図39	爪形金具用途復原図……………	56
図40	石室出土土器実測図……………	58
図41	石室出土土器実測図……………	59
図42	周濠出土土器実測図……………	61
図43	周濠出土土器実測図……………	62
図44	周濠出土土器実測図……………	63
図45	周濠・排水溝・その他出土土器実測図……………	64
図46	石器実測図……………	65
図47	石室の岩石種……………	69
図48	両頭金具の各部名称……………	71
図49	大阪府内出土の両頭金具……………	73
図50	棺の位置復原図……………	77
図51	両頭金具装着方法復原図……………	78
表2	耳環計測表……………	52

表 目 次

表 3 鉄鍬計測表	54
表 4 土器計測表	66・67

写 真 目 次

写真 1 調査地上空より大阪平野を望む	2	写真 9 奥山 1 号墳遠景	32
写真 2 現地公開風景	3	写真 10 寝屋川公園内に集められた石材	33
写真 3 太秦高塚古墳	9	写真 11 石室掘方全景	40
写真 4 明和小学校前の巨石群	9	写真 12 土器出土状況	47
写真 5 寝屋古墳	9	写真 13 遺物 X 線写真	51
写真 6 寝屋古墳石室	9	写真 14 耳環拡大写真	52
写真 7 石宝殿古墳	10	写真 15 各岩石の実体顕微鏡写真	70
写真 8 雷神石	10		

写 真 図 版 目 次

写真図版 1 寝屋南遺跡 遺構

1. 丘陵上平坦部トレンチ北半全景（北から）
2. 丘陵上平坦部トレンチ南半全景（東から）

写真図版 2 寝屋南遺跡 遺構

1. 丘陵上平坦部トレンチ拡張区全景（北東から）
2. 西斜面北トレンチ全景（南西から）
3. 西斜面北トレンチ全景（南東から）
4. 西斜面南トレンチ全景（北東から）
5. 東斜面裾トレンチ全景（南から）

写真図版 3 寝屋南遺跡 遺構

1. 東斜面 1～4 トレンチ全景（南から）
2. 東斜面 1 トレンチ全景（南から）
3. 東斜面 2 トレンチ全景（南から）
4. 東斜面 3 トレンチ全景（南から）
5. 東斜面 4 トレンチ全景（南から）

写真図版 4 寝屋南遺跡 遺構

1. 竪穴住居 2（奥は竪穴住居 1）
2. 竪穴住居 2 床面焼土
3. 竪穴住居 2 竈部
4. 竪穴住居 2 西壁溝土器出土状況
5. 竪穴住居 2 東壁溝土器出土状況

写真図版 5 寝屋南遺跡 遺構

1. 竪穴住居 1
2. 塀 1
3. 41溝
4. 1 落ち込み
5. 4 土坑
6. 36土坑
7. 42土坑
8. 掘立柱建物 3

写真図版6 寝屋南遺跡 遺構

1. 掘立柱建物4
2. 掘立柱建物2
3. 18ピット土器出土状況
4. 19ピット土器出土状況
5. 掘立柱建物1
6. 掘立柱建物5
7. 45ピット土器出土状況
8. 47ピット土器出土状況

写真図版7 寝屋南遺跡 土器

写真図版8 寝屋南遺跡 土器

写真図版9 奥山遺跡 遺構

1. 調査前状況（西から）
2. 奥山1号墳全景（南東から）

写真図版10 奥山遺跡 遺構

1. 奥山1号墳全景（西から）
2. 排水溝
3. 周濠断面（北側）
4. 周濠断面（南西側）（奥は西側断面）

写真図版11 奥山遺跡 遺構

1. 奥山1号墳石室全景（西から）
2. 玄室右側壁
3. 羨道右側壁
4. 玄室左側壁
5. 羨道左側壁

写真図版12 奥山遺跡 遺構

1. 玄室全景（西から）
2. 閉塞石最下段の石列

写真図版13 奥山遺跡 遺構

1. 周濠内遺物出土状況（開口部付近）
2. 周濠内遺物出土状況（北側）
3. 玄室床面遺物出土状況
4. 羨道床面遺物出土状況
5. 玄室床面遺物出土状況

写真図版14 奥山遺跡 遺構

1. 玄室内人骨及び遺物出土状況
2. 耳環15・16・17出土状況
3. 耳環14・18と管玉出土状況
4. 耳環12・13出土状況
5. 耳環8～11出土状況

写真図版15 奥山遺跡 遺構

1. 焼土坑検出状況
2. 石室石材破碎状況
3. 抜き取り穴への側壁横転状況
4. 側壁石材に残る楔痕跡
5. 側壁石材に残る楔痕跡

写真図版16 奥山遺跡 装身具・武器

写真図版17 奥山遺跡 武器・工具

写真図版18 奥山遺跡 武器・馬具

写真図版19 奥山遺跡 土器

写真図版20 奥山遺跡 土器

写真図版21 奥山遺跡 土器

写真図版22 奥山遺跡 土器

写真図版23 奥山遺跡 土器

写真図版24 奥山遺跡 土器・石器

第1章 調査に至る経緯と方法

第1節 調査に至る経緯と経過

寝屋南遺跡、奥山遺跡はともに大阪府寝屋川市寝屋地先に所在する。両遺跡は生駒山地の西側につらなる枚方丘陵上に立地し、たち川を挟んで遺跡の北東側には寝屋東遺跡、打上川を挟んで西側には太秦遺跡（太秦古墳群）など、周辺には数多くの遺跡が分布する（図1・写真1）。この地に第二京阪道路および一般国道1号バイパス（大阪北道路）の建設が計画されたため、当センターは平成13年6月から同年10月まで（寝屋南遺跡他確認調査¹⁾）と、平成14年11月から平成15年3月まで（寝屋南遺跡西地区確認調査²⁾）の2度にわたり、寝屋南遺跡内の一画から、その南方の打上地域までについての遺跡の確認調査を実施した。その結果、寝屋南遺跡として括られている箇所においては、平成13年度の調査で、尾根裾部の炭化物や焼土を含む層から6世紀代の溶着した須恵器や埴輪片が発見され、周辺に須恵器や埴輪を焼成した窯跡が存在する可能性が指摘された。さらに平成14年度の調査では、尾根頂部から掘立柱建物の柱穴が検出され、尾根上には古代の集落跡が広がっていることが判明した。また寝屋南遺跡の南方の奥山地区においては、平成14年度の調査で円墳の一部と周濠から6世紀末の須恵器が発見され、周辺にも古墳が点在している可能性が指摘された。この奥山地区の古墳については、これまでまったく知ら

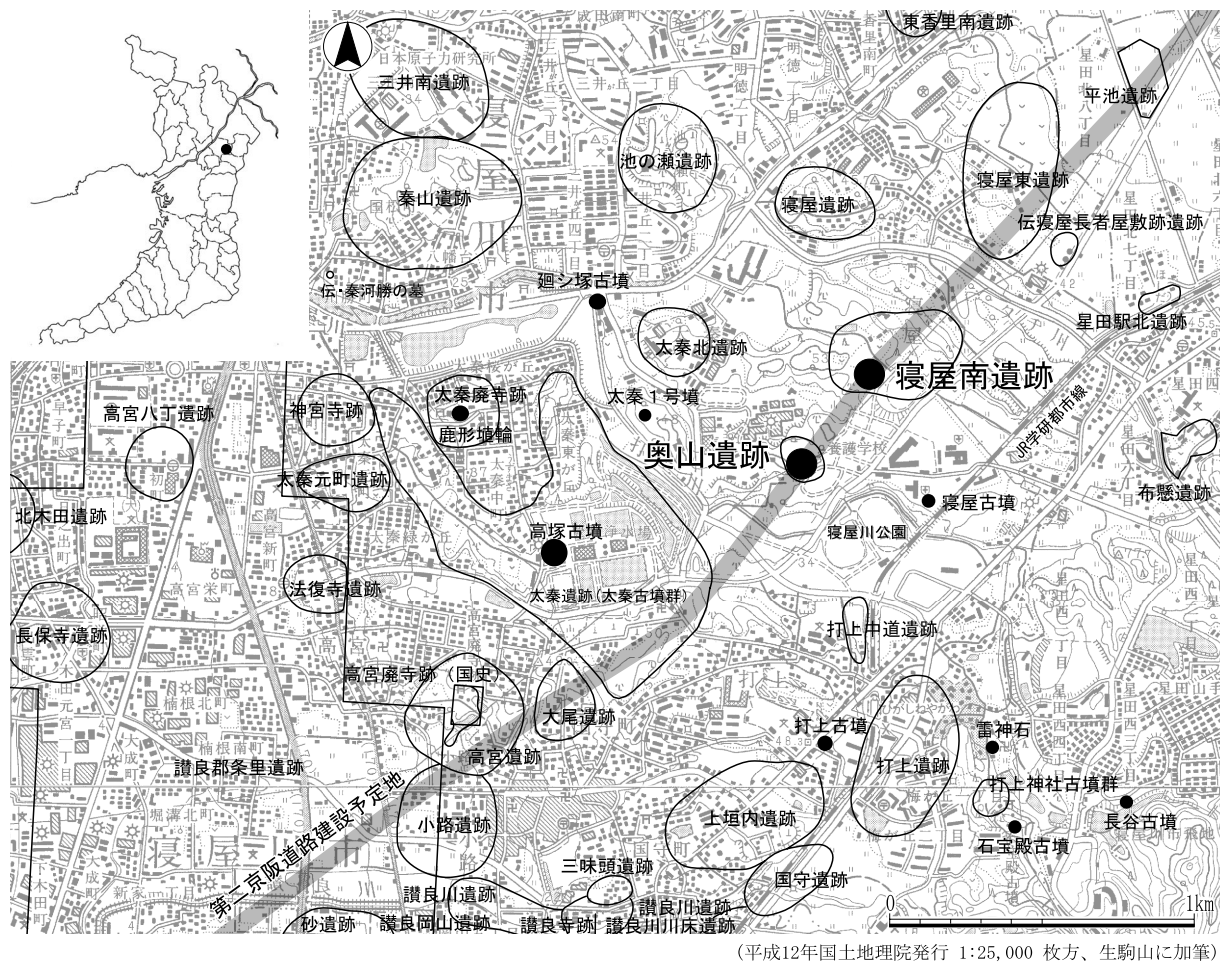


図1 調査位置および周辺遺跡分布図



写真1 調査地上空より大阪平野を望む（中央の調査地が寝屋南遺跡、奥山遺跡はそのすぐ奥）

れていなかった新規発見の遺跡であったため、ただちに文化財保護法に基づく遺跡発見通知が提出され、遺跡名を「奥山遺跡」、発見された古墳を「奥山1号墳」と命名し、以後周知されることとなった。

以上のように、道路建設予定地内が遺跡であると確認されたため、国土交通省 近畿地方整備局 浪速国道事務所の委託を受けた当センターが、西日本高速道路株式会社（当時：日本道路公団）関西支社 枚方工事事務所の協力、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、寝屋南遺跡については平成15年5月13日から平成15年10月24日まで、奥山遺跡については平成15年8月12日から平成16年2月27日までの期間で、本格的な発掘調査を行うこととなった。調査面積は、寝屋南遺跡が5,830㎡、奥山遺跡が2,630㎡である。

なお奥山遺跡については、寝屋川市域では横穴式石室の初めての発掘調査ということもあり、調査期間中の平成16年1月31日には遺跡を公開し、地元の方々への説明会を開催した³⁾。寒中であつたにもかかわらず、472名もの見学者があつた（写真2）。

また、調査終了後の平成17年11月19日から23日までの5日間にわたって、寝屋川市立市民会館において「北河内発掘！ 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査展と講演会」と題した遺物の展示会も行っている⁴⁾。

このほか、平成17年3月12日には、大阪歴史博物館で開催された第50回大阪府埋蔵文化財研究会において「奥山1号墳の調査」報告と遺物の展示を行い⁵⁾、同年3月26日には「横穴式石室から見た世界」と題された寝屋川市・寝屋川市教育委員会主催の歴史シンポジウムでも「奥山1号墳の発掘調査成果」を発表している⁶⁾。



写真2 現地公開風景

遺跡の発掘調査状況や現地公開等の様子は、当センターにおいて随時ビデオ撮影し、視聴が可能となっている。広く活用されることを希望する。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.2 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』(財)大阪府文化財センター調査報告書第93集
- 2) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.9 『讃良郡条里遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、倉治遺跡、津田城遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第101集
- 3) 財団法人 大阪府文化財センター 2004.1 『奥山遺跡(奥山1号墳)現地公開資料』
- 4) 財団法人 大阪府文化財センター 2005.11 『北河内発掘! 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』
- 5) 伊藤 武 2005.3 「奥山1号墳の調査」『大阪府埋蔵文化財研究会(第50回)資料』財団法人 大阪府文化財センター
- 6) 伊藤 武 2005.3 「奥山1号墳の発掘調査成果」『歴史シンポジウム資料 横穴式石室から見た世界 -北河内の古墳時代後期を考える-』寝屋川市・寝屋川市教育委員会

第2節 調査の方法

寝屋南遺跡・奥山遺跡ともに、尾根筋と谷筋とからなる起伏の激しい地形を呈し、調査前はその大半が竹林となっていた。現地調査にあたっては、まず竹・樹木等の伐開から始め、表土層、近年の盛土、あるいは近・現代の耕土層を重機にて掘削し、その後人力による遺物包含層の掘削、遺構面の精査によって遺構を検出した。

遺物の取り上げ、遺構図面の作成、写真撮影、および整理・登録等の作業にあたっては、平成14年度までは基本的に(財)大阪文化財センターが定めた『遺跡調査基本マニュアル』¹⁾に則り作業を行ってきたが、コンピュータやデジタルカメラ等の普及、さらには使用測地形が日本測地系から世界測地形に変更となったことなどをうけ、平成15年度に上記マニュアルが大きく改訂された。本書で報告する両遺跡については平成15年度の調査であったため、この新マニュアルである『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】²⁾に準拠し、上記の作業を行った。

調査区については、寝屋南遺跡では丘陵上の平坦部から丘陵斜面および斜面裾部にかけての調査地であるため、地形、調査工程・工法等を考慮し、8地区に分割して設定した。現地では「丘陵上平坦部トレンチ」や「西斜面北トレンチ」などと呼び、作成した図面等にもそのように記入した。本来ならば、新マニュアルに従い、1～8区(トレンチ)と調査区番号を振らねばならないが、本書では現地調査の際に呼称した調査区名のまま報告する。それぞれの調査区名は図3に示したとおりである。なお、奥山遺跡については一つの調査区として調査したため、特に調査区名はつけていない。

地区割りについては、国土座標軸(第Ⅵ座標系)を基準とし、Ⅰ～Ⅵの大小6段階の区画を設定した。これは大阪府内全域に共通する地区割りである(図2)。

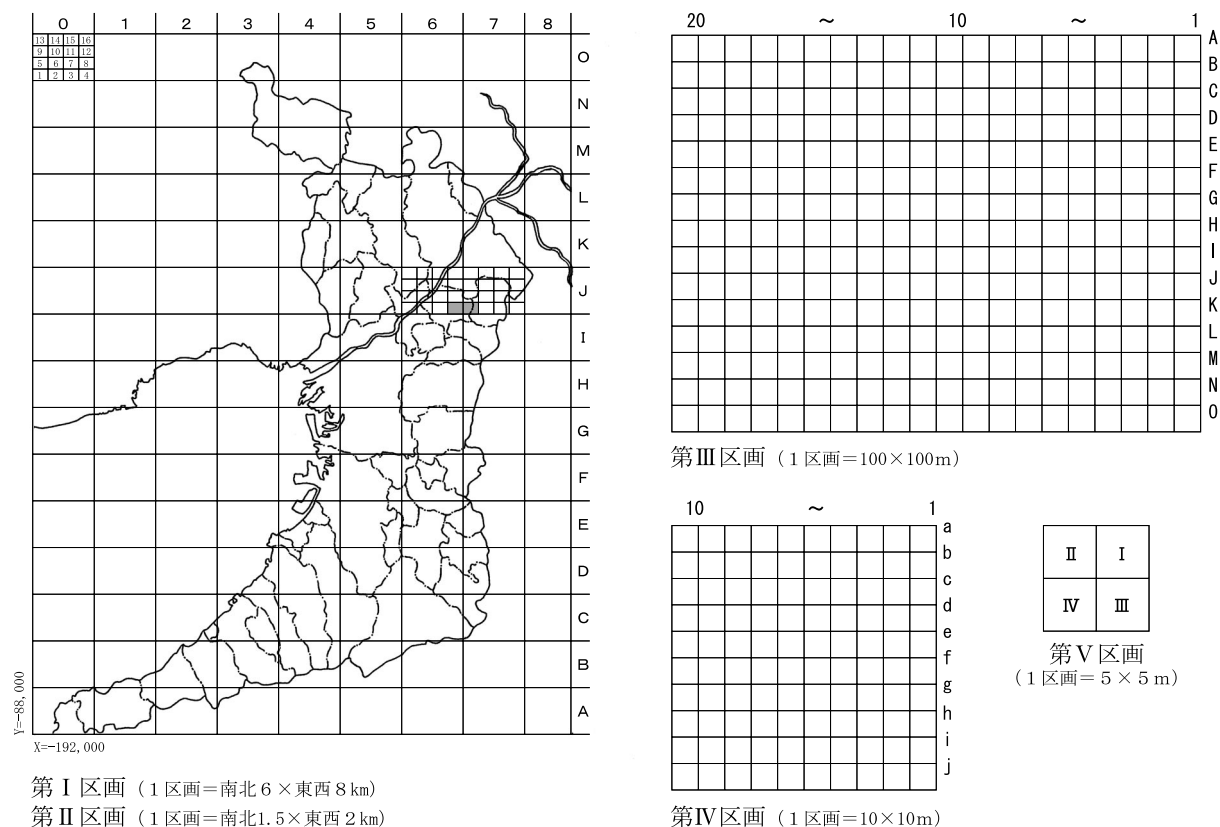


図2 調査区内の地区割り方法

第Ⅰ区画は大阪府の南西端 $X = -192,000\text{m}$ ・ $Y = -88,000\text{m}$ を起点に、府域を南北15 (A~O)、東西9 (0~8) 区画に分割したもので、一区画は南北6 km、東西8 kmとなる。第Ⅱ区画は第Ⅰ区画を東西、南北各4分割の、計16区画 (1~16) に分けたもので、一区画は縦1.5km、横2.0kmとなる。第Ⅲ区画は第Ⅱ区画を東西20 (1~20) 分割、南北15 (A~O) 分割する一辺100mの区画である。第Ⅳ区画は第Ⅲ区画をさらに東西、南北ともに10 (東西1~10、南北a~j) 分割した一辺10mの区画である。第Ⅴ区画は第Ⅳ区画をさらに「田」の字状に4 (Ⅰ~Ⅳ) 分割したもので、一辺5 mの区画である。Ⅵ区画は遺構・遺物が密に確認された場合に使用するが、今回の調査では使用しなかったため割愛する。

上記の方法で区画した場合、寝屋南遺跡の第Ⅰ・Ⅱ区画はJ 7 (第Ⅰ区画) - 1 (第Ⅱ区画)、奥山遺跡ではJ 7 - 1とJ 6 - 4となる (図4・5)。遺物の取り上げ作業には、この地区割りをを用いた。寝屋南遺跡や奥山遺跡の丘陵斜面部など、遺物の出土量が少ない箇所については、基本的に第Ⅳ区画の10m区画で行ったが、奥山遺跡内でも奥山1号墳など遺物の出土量が多い箇所については、第Ⅴ区画である5 m区画に切り替えて遺物の取り上げ作業を行った。また石室内の遺物などその出土位置が重要なものについては、一つ一つの出土位置を記録し取り上げた。遺物取り上げ用ラベルへの記入は、煩雑となるため第Ⅰ・Ⅱ区画は省略し、それ以後の第Ⅲ区画から第Ⅴ区画のみを記入した。

方位は座標北を使用し、水準はすべて東京湾平均海水位 (T.P.) を用いた。

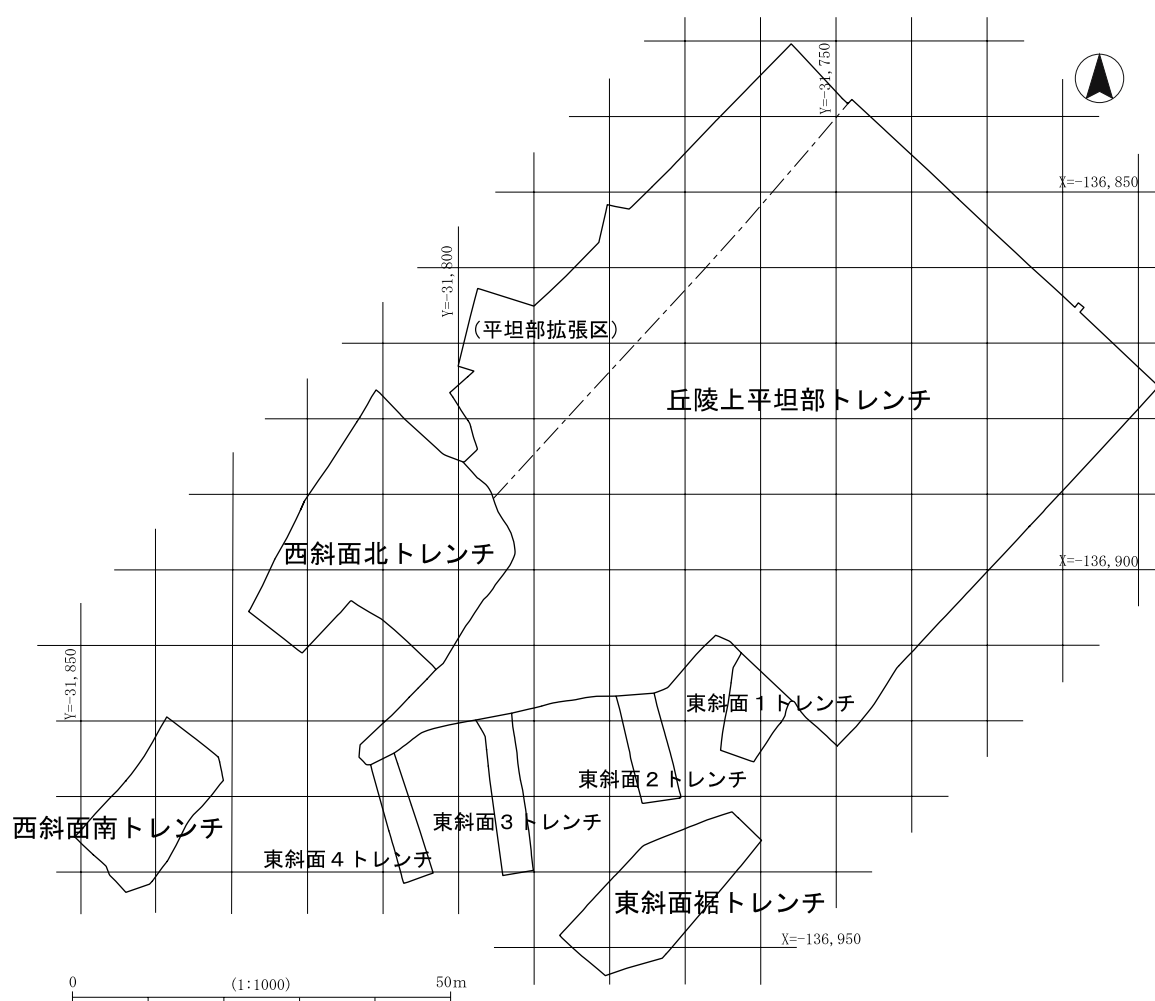


図3 寝屋南遺跡トレンチ配置図

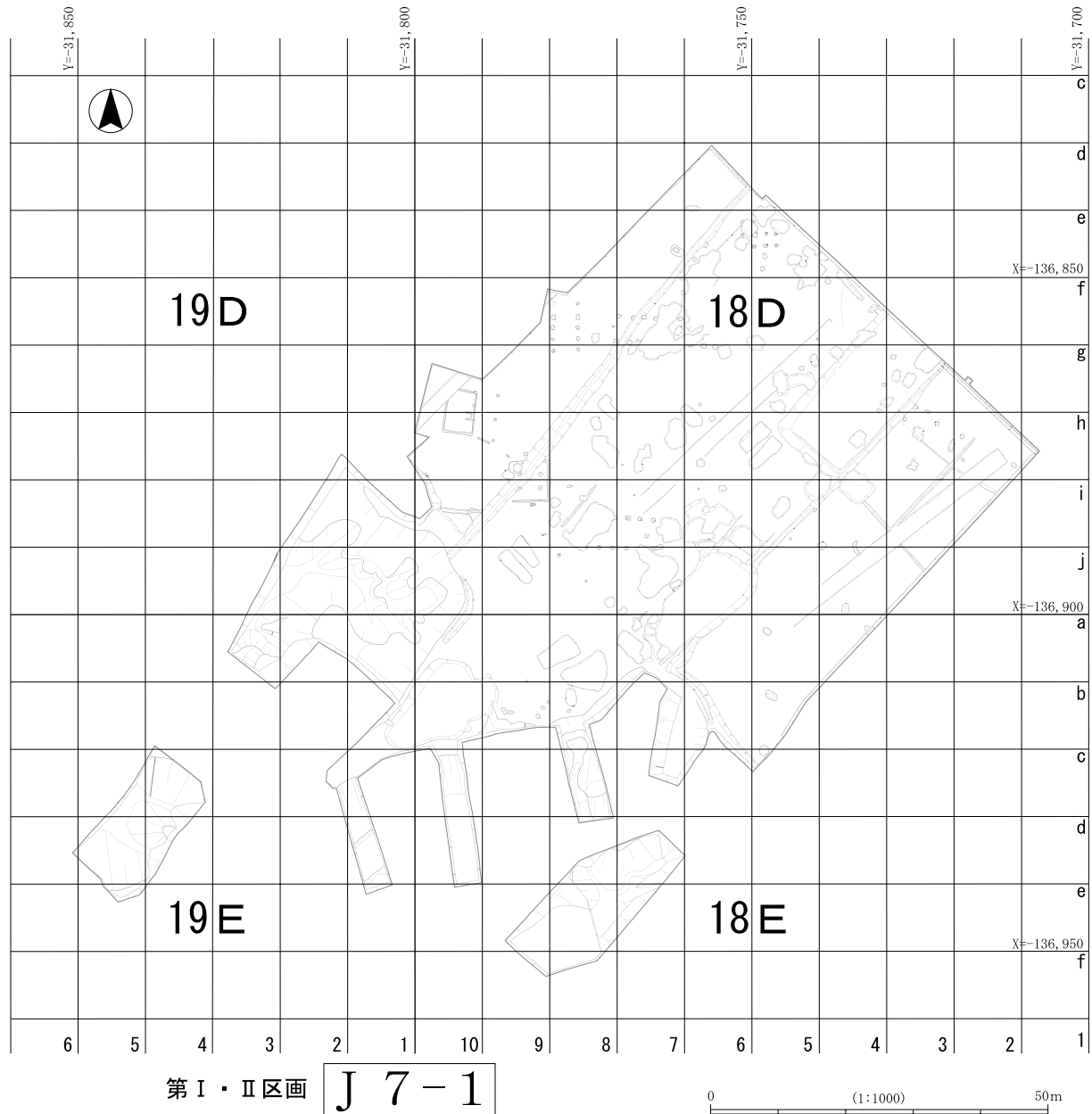


図4 寝屋南遺跡地区割り図

遺構全体の平面測量は、ヘリコプターによる写真測量を行い、1/50の平面図とそれを縮小編集した1/100の遺構全体図を作成した。その他、遺物出土状況等各遺構の詳細図面、堆積状況を示す土層断面図等については、必要に応じ、随時1/20、1/10の図面を作成した。

調査においては、遺構番号は遺構の種類、調査区等にかかわらず1から通して付した。「1溝」、「2土坑」、「3ピット」という具合である。ただし、複数の遺構の集合体である掘立柱建物や竪穴住居などについては、「掘立柱建物1」、「掘立柱建物2」、「竪穴住居1」のように別途遺構番号を付した。なお、奥山遺跡、特に奥山1号墳については、古墳という特異な遺構であり、上のような遺構番号の付し方が適切でなかったため、それに準じていない。たとえば「1周濠」ではなく、単に「周濠」としている。

整理作業の段階で行なう遺物への注記は、寝屋南遺跡については「ネヤミナミ03-1-□」、奥山遺跡は「オクヤマ03-1-□」(□は登録番号)とした。

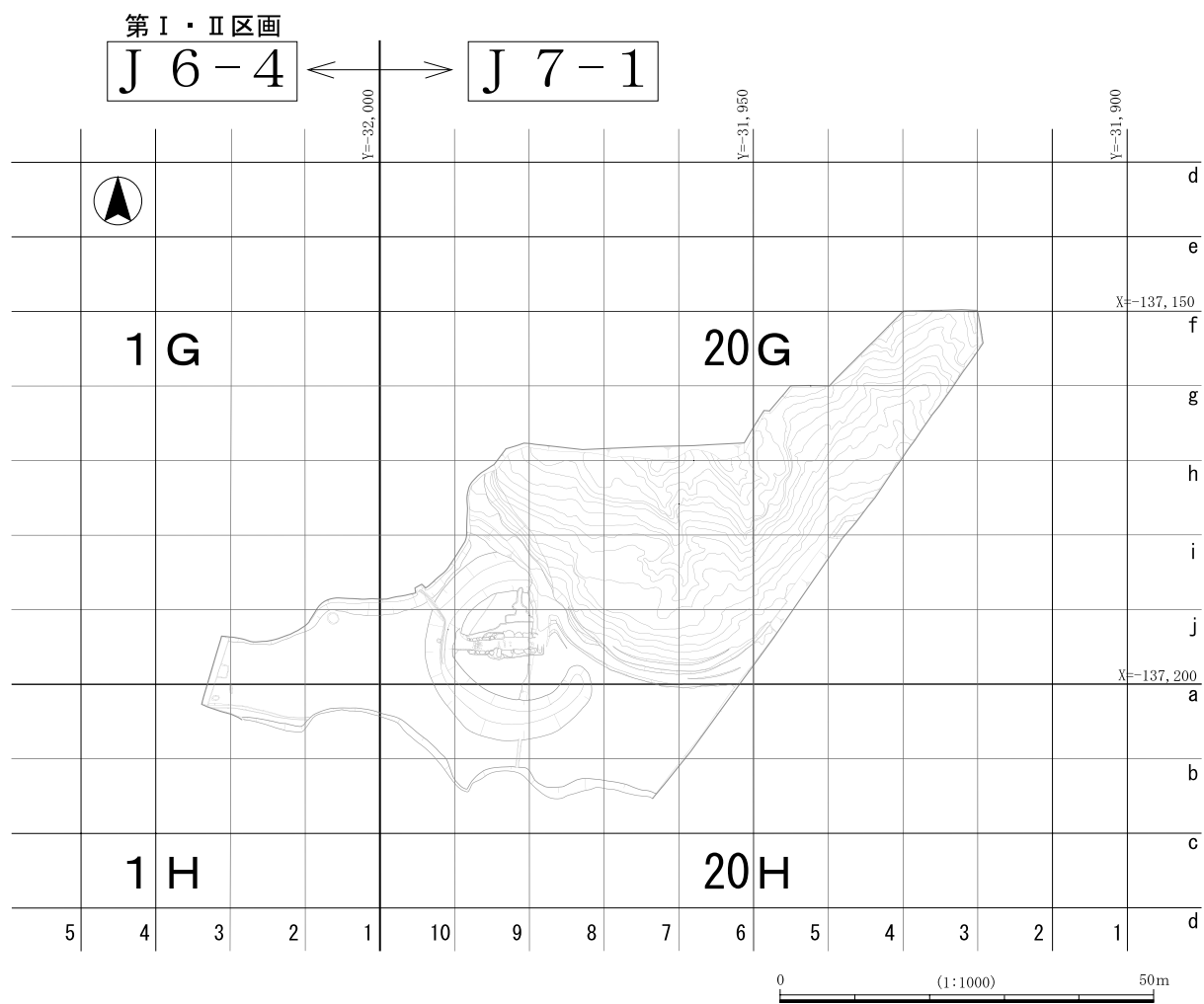


図5 奥山遺跡地区割り図

註

- 1) 財団法人 大阪文化財センター 1988 『遺跡調査基本マニュアル』
- 2) 財団法人 大阪府文化財センター 2003 『遺跡調査基本マニュアル』【暫定版】

第2章 遺跡の位置と環境

寝屋南遺跡・奥山遺跡は、大阪府北東部の北河内と呼ばれている地域の、寝屋川市寝屋地先に所在する。両遺跡間はわずか200m程しか離れておらず、ともにJR学研都市線のすぐ西側の、東寝屋川駅と星田駅との中間に整備された府営寝屋川公園の西側に位置する。北側に寝屋南遺跡、南側に奥山遺跡という位置関係にある。また遺跡の西側一帯には、古代讃良郡幡多郷に属した「太秦」や「秦」といった地名が残っており、渡来系氏族である秦氏との関連が指摘されている地域でもある。遺跡は市街地の東方に連なる枚方丘陵と呼ばれる丘陵上に立地するが、この付近は尾根筋と谷筋とが複雑に入り組んだ起伏に富んだ地形を呈している。今回の調査地は両遺跡ともにその狭い尾根筋上にある。周辺には多くの遺跡が分布しており、近接する遺跡としては、たち川を挟んで寝屋南遺跡の北側の丘陵上には寝屋東遺跡が、打上川を挟んで奥山遺跡の西側の丘陵上には太秦遺跡（太秦古墳群）が広がっている。

以下では、特に寝屋南遺跡・奥山遺跡に関連すると思われる遺跡を簡単に紹介する。

1. 古墳時代

太秦遺跡（太秦古墳群）

打上川を挟んで奥山遺跡の対岸の丘陵上一帯に広がる遺跡である。弥生時代中期の高地性集落としてひろく知られており、平成15年度に実施された発掘調査によっても大規模な集落跡が確認されている。また古墳時代中期から後期の古墳群が重複し、太秦古墳群としても知られている。しかし古墳群は残念ながら豊野浄水場や宅地開発などによってそのほとんどが消滅し、廻シ塚古墳のように近年までその存在が認められていたものもあるが、現在では墳形をとどめる古墳は太秦高塚古墳のみとなっている。周辺にはモロ塚、小金塚、あるいはハカノ山などのように、古墳の存在を示すと思われる字名が残っており、須恵器・土師器のほか、鹿形埴輪・甲冑形埴輪・方格規矩文鏡・獣帯六鈴鏡・三環鈴・子持勾玉・金環・鉄刀・鉄鏃など多くの遺物も採集されている。なお、太秦中町地区では古墳の周濠の一部が検出され、円筒埴輪のほか、水鳥形埴輪・鶏形埴輪などの形象埴輪が出土している。また当センターが平成13年度以降に実施した数次にわたる発掘調査では、5世紀前葉から後葉に築かれたムラの有力構成員、あるいは有力家長層を葬ったと考えられる群集墳が発見されている。これまでに方墳を主体とする25基の古墳が確認されており、そのうちの2基からは埴輪も見つかっている。このほか、6世紀後半に築かれたマウンドをもたない土壙墓も5基確認されている。

太秦高塚古墳〔寝屋川市指定史跡〕（写真3）

太秦古墳群の中で唯一墳形をとどめる古墳である。かつては後期古墳であろうと考えられていたが、整備のため、寝屋川市教育委員会が行った平成13年の調査によって、5世紀後半の古墳であることが判明した。造り出しを有する直径約37m、高さ7mの円墳で、周囲には幅約7.5m、深さ2mの濠がめぐる。二段築成で、一段目のテラスには円筒埴輪が、造り出し部には人物・水鳥・鶏・家・盾・衣蓋などの形象埴輪が樹立していたことが確認された。墳頂部には完存ではないが主体部が認められ、短甲・鎧・鉄鏃・鉄斧等が出土した。横穴式石室ではなく、木棺直葬であったと推定されている。現在、復原整備され見学可能となっている。

打上古墳（写真4）

打上地域周辺には、かつて高塚・堀塚・呉塚・唐塚・中塚などと呼ばれた古墳が数多く存在していた

ことが『河内名所図会』や『日本輿地通志』に記されている。しかしそのほとんどは後の開発により削平され、今は残っていない。打上高塚町の私立明和小学校校門前の路傍に、現在小さな稲荷社と地蔵の祠が祀られており、その周囲には花崗岩の巨石が多数集められている。それらが付近に存在していた古墳の石室石材であろうと考えられている。

寝屋古墳〔大阪府指定史跡〕(写真5・6)

奥山1号墳と同じ丘陵上の、東へ約400mの地点に位置する。丘陵の南斜面に立地しており、すぐ南側には打上川が流れている。府営寝屋川公園内にあり、いつでも見学可能である。墳丘は直径22m、高さ5m(大阪府の調査報告書・遺跡前の説明板では直径30m、高さ3mと復原)の円墳で、墳丘背面からは幅約3mの周濠が確認されている。主体部は北河内地域最大の規模を誇る横穴式石室で、花崗岩の巨石が用いられている。石室は南に開口するが、玄室の一部や羨道の天井石、側壁などは失われ、玄室内には土砂が堆積している。現状では玄室長5.5m、幅2.5mを測る。平成4年度の調査では、現存する天井石の端から6mの地点で羨道、あるいは墓道の一部と考えられる落ち込みが検出されており、本来の石室全長は10m程度あったと推定されている。なお、そのときの調査で6世紀後半の須恵器片が1点出土している。葺石や埴輪は確認されていない。

太秦1号墳

奥山1号墳と同じ丘陵上の、西へ約500mの地点に位置する。東西12.5m、南北11.5m、高さ1.5mの円墳と推定されているが、発掘調査が行われていないため、古墳の正確な規模や内部主体、副葬品などについては不明である。

石宝殿古墳〔国指定史跡〕(写真7)

JR学研都市線の東方、高良神社境内の標高約100mの丘陵南斜面に位置する。『河内名所図会』にも紹介されている終末期古墳で、昭和48年に国の史跡にも指定されている。南向きの横口式石槨を内部主体とする古墳であるが、現在封土はまったくない。従来から石槨の後方を区画すると考えられていた石列が、石槨の背後



写真3 太秦高塚古墳

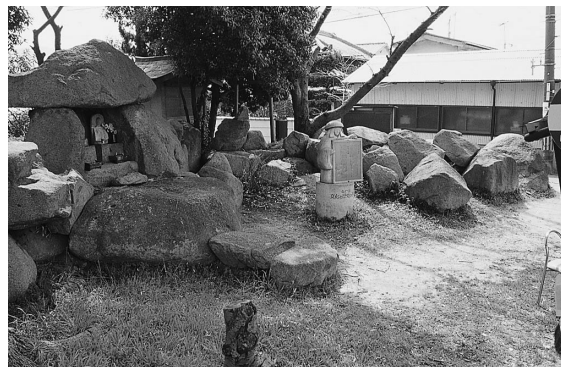


写真4 明和小学校前の巨石群



写真5 寝屋古墳

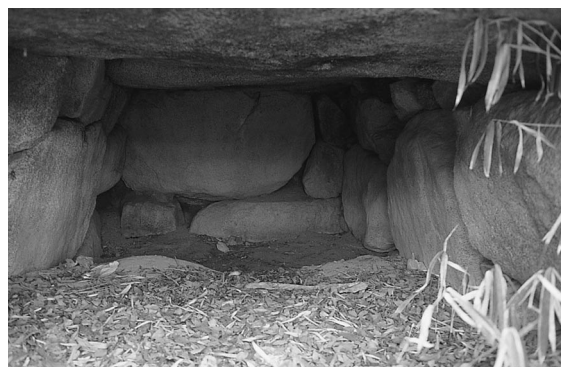


写真6 寝屋古墳石室

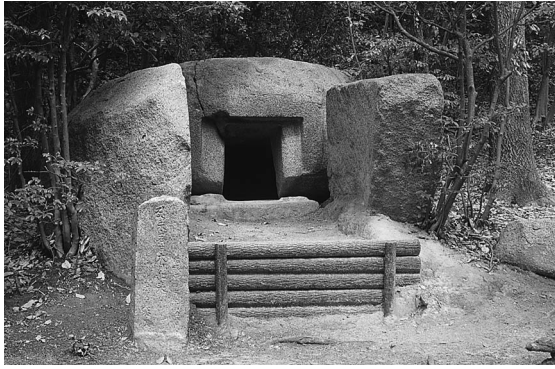


写真7 石宝殿古墳



写真8 雷神石

に3石知られていたが、昭和63年に実施された調査では、このほかに新たに1石が確認され、従前から知られていた石列との角度が135度になることから、八角形墳になる可能性が示された。またその石列と石槨との間から石敷きも見つかっている。横口式石槨は花崗岩製の底石の上に、同じく花崗岩の巨石を削り抜いたものをのせて横口を設け、その前方に羨道を付している。石槨の内法は、長さ1.8m、幅0.98m、高さ0.67mを測る。また横口部の左側上下には、片開きの扉が付いていたことを示す円形の柄孔が穿たれている。

雷神石〔寝屋川市指定有形文化財〕(写真8)

石宝殿古墳に向かう途中に建つ明光寺の入り口脇に、「雷神石」と呼ばれる石碑がある。兵庫県高砂市付近に産する流紋岩質凝灰岩(通称竜山石)製で、高さ1.33m、幅0.74m、厚さ0.41mを測る。この石材は古墳時代には石棺材として多く利用されていることから、この碑も石棺の身を転用したものではないかと考えられている。現存はしないが、前記のとおり周辺には打上古墳や打上神社古墳群があったとされている。それら

の古墳のひとつに納められていた石棺であろうか。

高宮八丁遺跡

奥山遺跡や太秦遺跡が立地する丘陵の西側平地部に位置する。奥山遺跡からは2km強の距離にある。弥生時代前・中期の遺跡として知られているが、古墳時代後期の遺構・遺物も発見されている。遺構には河川や溝、土坑等があり、須恵器の蓋杯・壺・提瓶、土師器の椀・壺・甕など、奥山1号墳とほぼ同時期の遺物が出土している。

長保寺遺跡

高宮八丁遺跡のすぐ南側に位置する。古墳時代前期から後期の集落が確認されている。掘立柱建物・河川・溝・土坑などのほか、土壙墓や船材・扉材を転用した井戸などが見つかり、古墳時代のほぼ全時期にわたる土器や木製品などが数多く出土している。その中には渡来系の遺物も含まれており、渡来系氏族のムラではないかと注目されている。

高宮八丁遺跡とあわせ、奥山1号墳の被葬者を考える上で非常に重要な遺跡であると考えている。

2. 古代

寝屋東遺跡

たち川を挟んで寝屋南遺跡の対岸、現在の寝屋の集落付近に位置する。平成14年度から始まった本格的な調査によって、谷筋と谷筋とによって挟まれた狭い丘陵上から、7世紀前半から8世紀前半の掘立柱建物が15棟以上見つかった。

太秦遺跡

前記のとおり、弥生時代の高地性集落、古墳時代の群集墳として知られているが、古代の集落も確認

されている。7世紀から8世紀にかけての掘立柱建物10棟、竪穴住居5棟のほか、井戸や区画溝が見つかっている。

大尾遺跡

谷筋をひとつ隔てて太秦遺跡の西側に隣接する遺跡で、この遺跡の西側には国指定史跡である高宮廃寺跡がある。尾根上で弥生時代中期の方形周溝墓群が発見されており、太秦遺跡で生活していた人々の墓域と考えられている。これらの周溝墓と重複して、7世紀後半から8世紀後半にかけての掘立柱建物が30棟以上確認されている。

高宮遺跡

高宮廃寺跡のすぐ南側に位置する。平成13年度以降に実施された発掘調査によって、古墳時代の遺構のほか、7世紀から8世紀にかけて建物群が見つかっている。古代の遺構としては、大型の総柱掘立柱建物5棟を含む掘立柱建物が20棟以上確認されている。大型総柱掘立柱建物のなかには柱穴の掘形が一辺1.5m以上の非常に大きなものもあり、東西に整然と配置されている。また道路状の遺構も検出されている。

太秦遺跡・大尾遺跡・高宮遺跡で検出した掘立柱建物群は、国指定史跡である高宮廃寺跡が建てられていた時期とほぼ重なるものであることから、いずれも高宮廃寺跡に関連する建物群であったと考えられている。

太秦廃寺跡

奥山遺跡に西、約1.2kmの北にひらけた丘陵上に位置する。渡来系氏族である秦氏が居住していたと考えられている地域の中にあり、現在は太秦の氏神である熱田神社が鎮座している。境内から瓦や礎石が発見されることが古くから知られており、『広隆寺末寺院別記』に記されている「河内秦寺」と推定されている。しかし本格的な発掘調査が行われていないため伽藍配置等の詳細は不明である。出土した瓦の中には奈良時代後半から平安時代前半の、中心に十文字を配した重圏文軒丸瓦がある。

高宮廃寺跡〔国指定史跡〕

太秦廃寺跡の南、直線距離にしてほぼ1kmの丘陵上に位置する。現在は延喜式内社大杜御祖神社おおもりみおやが祀られており、境内には礎石や塔心礎が散在する。昭和55年に国の史跡に指定された。昭和28年以降に実施された調査によって、南門、中門が南北に続き、中門からは回廊がのびる。東塔、金堂が回廊内に配され、講堂は回廊外の北側に位置するという主要伽藍の配置がほぼ明らかとなった。ただし、大杜御祖神社殿部分が未調査であるため、そこが西塔跡になるのか、西金堂跡になるのかは明らかとなっていない。前者とした場合は双塔式の薬師寺式伽藍配置となるが、後者の場合は川原寺式伽藍配置となる。出土する瓦の中には素弁八葉蓮華文軒丸瓦や複弁八葉蓮華文軒丸瓦などがあり、7世紀後半の白鳳期に創建された寺院であることがわかっている。

当センターが発掘調査を行った遺跡については、寝屋東遺跡や太秦遺跡（太秦古墳群）・大尾遺跡・高宮遺跡など既にいくつかの報告書が刊行されている。また、本章では触れなかった寝屋川市讃良郡条里遺跡などについても、発掘調査終了後に順次報告書を刊行している。各遺跡の詳細についてはそれらの報告書を参照されたい。また、2005年に『北河内発掘！』と題して開催した、第二京阪道路内遺跡の遺物展示会の際に作成した展示会図録に、各遺跡の内容がコンパクトにまとめられている。あわせて参照されることを希望する。

参考文献・引用文献・参考資料

- ・寝屋川市役所 1966『寝屋川市誌』
- ・寝屋川市教育委員会 1979『寝屋川市の文化財』第I集
- ・寝屋川市教育委員会 1990『石宝殿古墳』寝屋川市文化財資料14
- ・寝屋川市教育委員会 1997『平成7年度歴史シンポジウム・講演会記録集 石宝殿古墳の謎に迫る -なぜ古墳がつくられなくなったのか-』
- ・寝屋川市・寝屋川市史編纂委員会 1998『寝屋川市史』第1巻 考古資料編I
- ・寝屋川市・寝屋川市教育委員会 2005『歴史シンポジウム資料 横穴式石室から見た世界 -北河内の古墳時代後期を考える-』
- ・雷神石前の説明板
- ・太秦高塚古墳前の説明板
- ・寝屋古墳前の説明板
- ・大阪府教育委員会 1994『平成4、5年度有形文化財・無形文化財等 総合調査報告書』
- ・四条畷市立歴史民俗資料館 2002『第17回特別展 みどりの風と古墳 -忍岡古墳 石室覆屋再建を記念して-』
- ・保育社 1983『日本の古代遺跡11 大阪中部』

当センターが発行した周辺遺跡の調査報告書および図録

- ・財団法人 大阪府文化財センター 2003.2『大尾遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第92集
- ・同 2003.6『讃良郡条里遺跡(その2)』(財)大阪府文化財センター報告書第98集
- ・同 2003.6『太秦古墳群』(財)大阪府文化財センター調査報告書第99集
- ・同 2004.2『讃良郡条里遺跡(その1)』(財)大阪府文化財センター報告書第109集
- ・同 2004.3『高宮遺跡(その2)』(財)大阪府文化財センター調査報告書第112集
- ・同 2004.3『小路遺跡(その3)』(財)大阪府文化財センター報告書第113集
- ・同 2004.3『讃良郡条里遺跡(その3)』(財)大阪府文化財センター報告書第114集
- ・同 2004.3『高宮遺跡-遺構編-』(財)大阪府文化財センター調査報告書第115集
- ・同 2004.12『小路遺跡(その2)』(財)大阪府文化財センター報告書第122集
- ・同 2004.12『寝屋東遺跡I』(財)大阪府文化財センター調査報告書第123集
- ・同 2005.2『大尾遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書第125集
- ・同 2005.2『太秦遺跡・太秦古墳群I』(財)大阪府文化財センター調査報告書第126集
- ・同 2005.3『寝屋東遺跡II』(財)大阪府文化財センター調査報告書第130集
- ・同 2005.3『太秦遺跡・太秦古墳群 大尾遺跡 高宮遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第131集
- ・同 2006.2『讃良郡条里遺跡IV』(財)大阪府文化財センター調査報告書第138集
- ・同 2006.3『小路遺跡III』(財)大阪府文化財センター調査報告書第142集
- ・同 2006.3『太秦遺跡・太秦古墳群II』(財)大阪府文化財センター調査報告書第143集
- ・同 2006.3『太秦遺跡・太秦古墳群III』(財)大阪府文化財センター調査報告書第141集
- ・財団法人 大阪府文化財センター 2005『北河内発掘! 緑立つ道に歴史わきたつ 第二京阪道路内遺跡の発掘調査記録』

第3章 寝屋南遺跡の調査成果

第1節 基本層序

調査地は、寝屋川公園最北部の野球グラウンド西側に位置する。東西方向にのびる大きな尾根筋の頂部にひろがる平坦部から尾根の南斜面、および斜面裾部にかけての調査区を設定した。尾根の頂部と斜面裾の調査区とでは、高低差約22mを測る。尾根上の平坦部については、近年まで耕作地や資材置き場として利用されていたが、遺構面までが非常に浅いため、造成による削平や攪乱が多い。斜面および斜面裾部は、調査に入るまでは鬱蒼とした竹林であり、ほぼ原地形をとどめているものと思われる。

丘陵上平坦部

東西方向にのびる大きな尾根筋の頂部に設定した調査区である。南の斜面に向かって、南西方向にのびる馬の背状の非常に細い尾根が一筋あり、その途中までをこの調査区に含めたため、不整形な調査区となっている。

平坦部のうち、東側の約3分の1は耕作地造成によって削平され、一段低くなっている。おそらく本来の地形も、西側が高く、東に向かって緩やかに下がっていたものと思われる。調査前の地盤高は、丘陵上平坦部のもっとも高い箇所では標高約48.6m、東端のもっとも低い箇所では約46.8mである。この一段低くなった東側の大部分では、約20cmの耕作土を除去した面が、直ちに地山となるが、南方（第6図中の4）には耕作土と地山との間に灰黄色の砂質シルトが約20cm堆積する。

平坦部の中央部から西端にかけての層序も基本的に東部と同じで、約20～30cmの表土層を除去すると、ほとんどの場所が直ちに地山面となるが、中央部の北方（図6中の5）には表土と地山との間に灰黄褐色砂質シルトが約5cm、西端部（図6中の13）には灰黄褐色粘質シルトが約15cm堆積している。

地山は花崗岩の風化土が下方全体にあり、その上に地力で「アカツチ」と呼んでいる明赤褐色の粘質シルト、さらにその上に、部分的ににぶい黄色の粘質シルトがのるといった状況である。この状況は次章で報告する奥山遺跡でも基本的に同じである。にぶい黄色粘質シルトは、主に調査区の南半部に広がっており、厚い箇所では約40cmの厚さを測る。

遺構はすべて地山上面で検出した。竪穴住居は、明らかににぶい黄色粘質シルトの上面から掘り込んでいた。

丘陵斜面部

南西方向にのびる馬の背状の尾根筋を境に東側を東斜面、西側を西斜面として調査を行った。尾根の両斜面ともに、基本的には表土層掘削後の面が、直ちに花崗岩風化土の地山となる（図17）。斜面の一部には表土層が削られ、既に地山が露出している箇所もあった。

斜面裾部

斜面裾部には、表土層の下に丘陵斜面の侵食によって流出した土砂が厚く堆積する（図16）。砂礫や砂質シルトが主である。東斜面裾トレンチなどは、現状では堆積した土砂によってある程度平坦になっているが、本来は底まで確認できないほどの深い谷筋であったことが確認された。その谷の中層からは、近世以降の染付けの皿や碗が出土している。

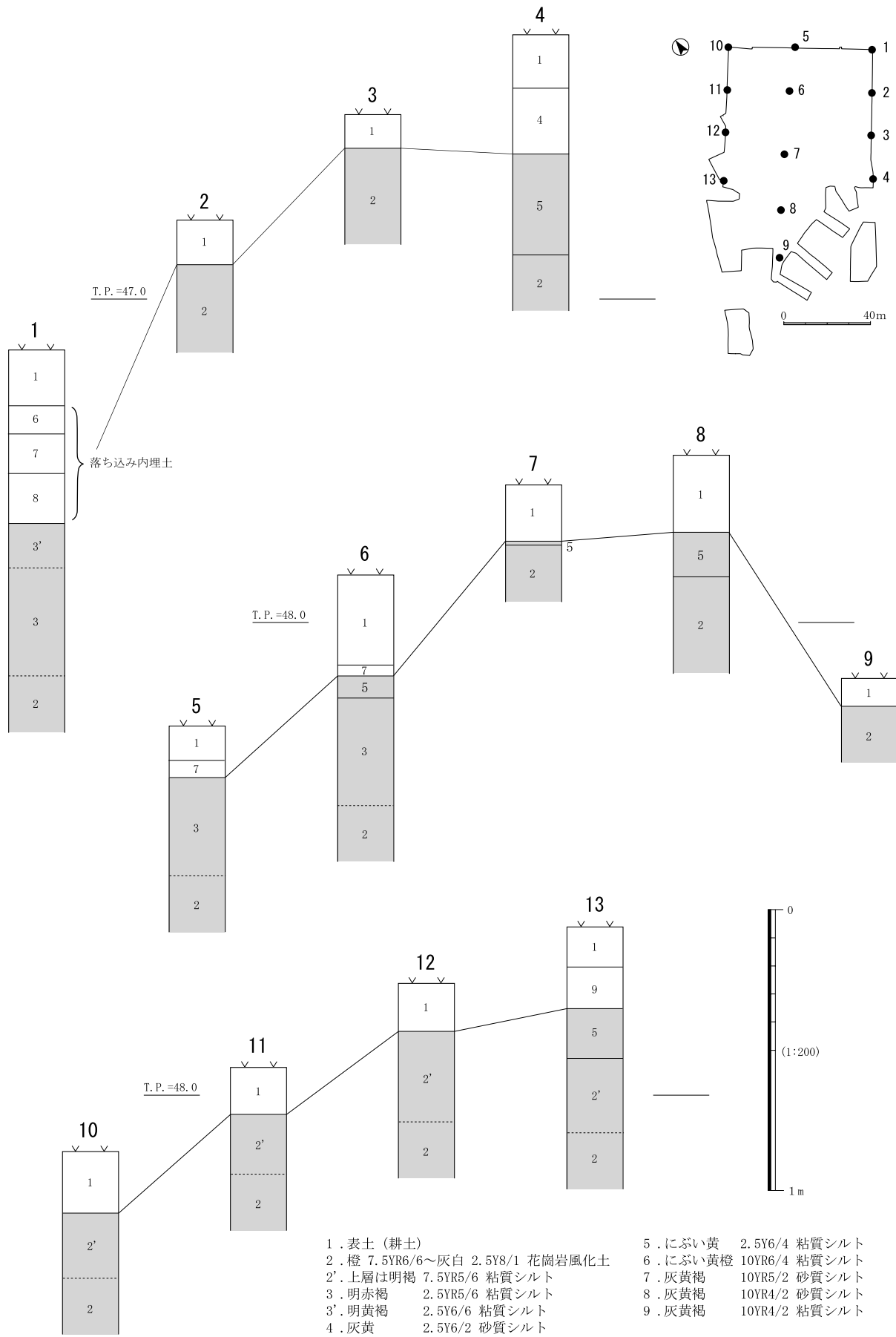


図 6 基本層序柱状図

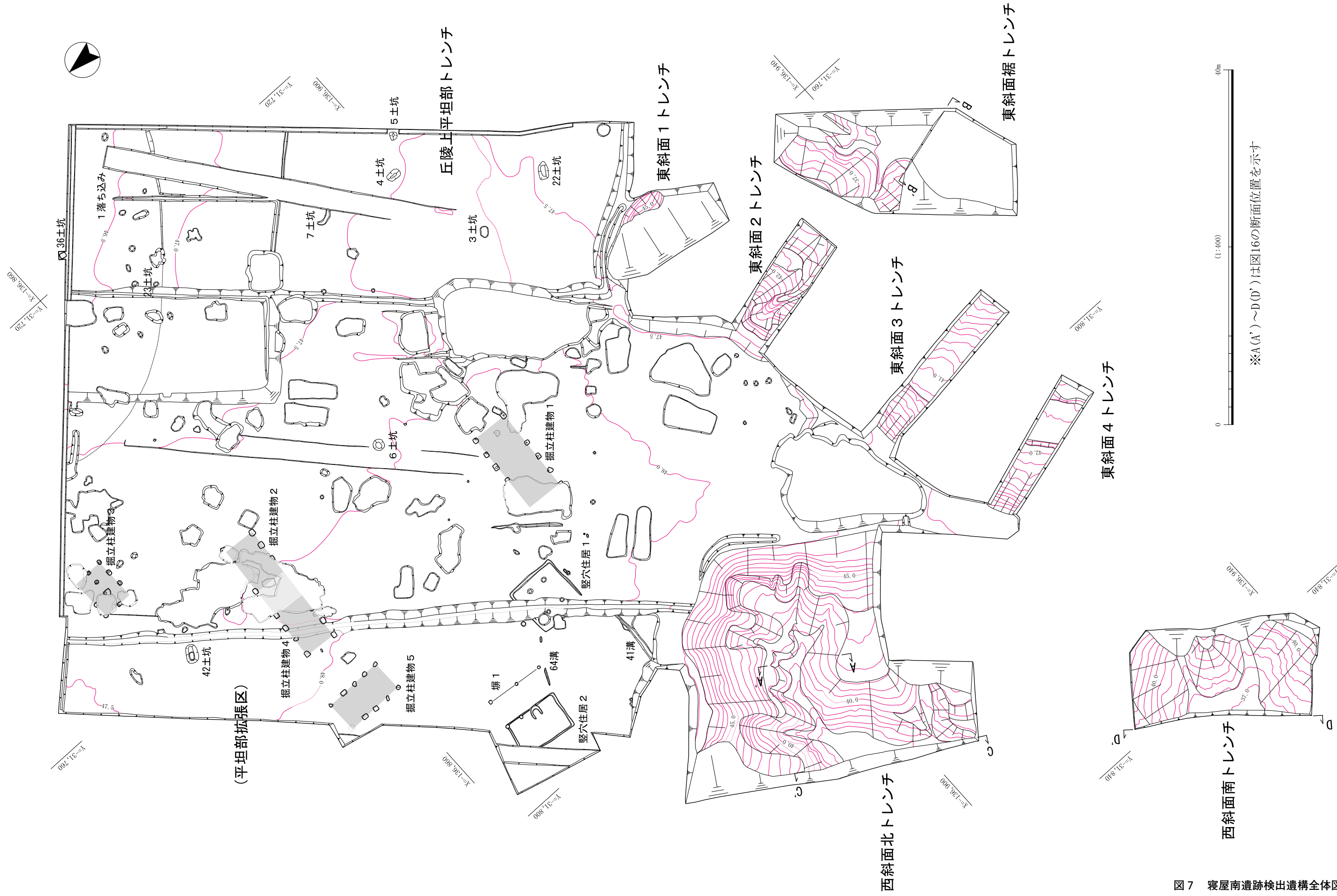


図7 竪穴住居遺跡検出遺構全体図

第2節 遺構

1. 丘陵上平坦部トレンチ（図7～11・13～15）

平成14年度の調査で、掘立柱建物の柱穴が検出され、尾根上の平坦部には古代の集落跡が広がっていることが判明していた。今回の調査によって、地山の上面で、掘立柱建物5棟（掘立柱建物1～5）、竪穴住居2棟（竪穴住居1・2）、堀跡1条（堀1）のほか、溝（41・64溝）、土坑（6・42土坑ほか）、落ち込み（1落ち込み）等を検出した（図7）。

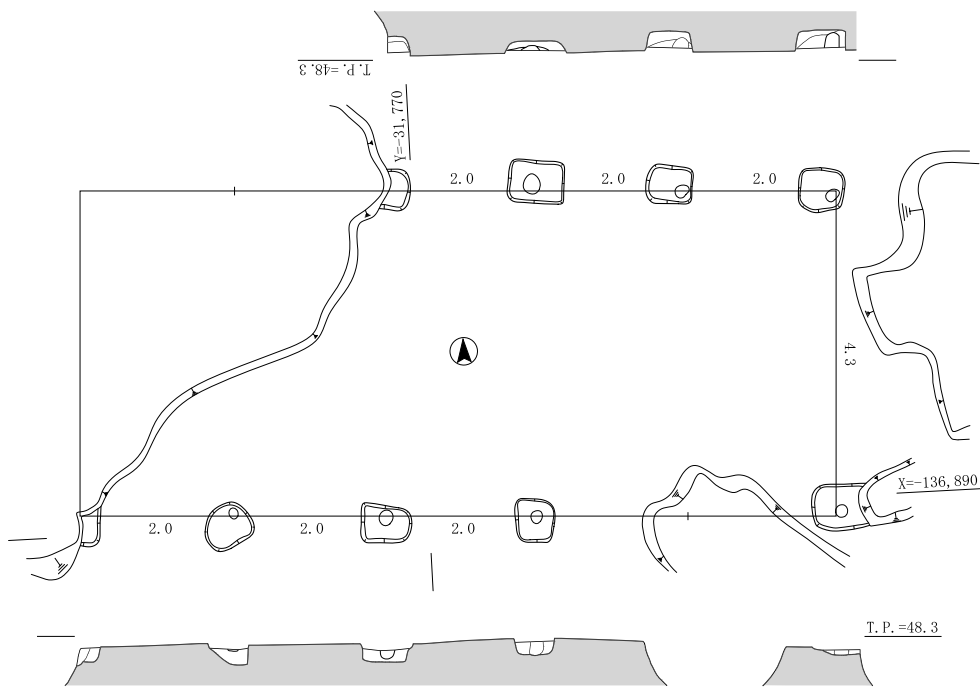
掘立柱建物1（図8） 調査区のほぼ中央に位置する。平成14年度の確認調査で柱穴を検出していた掘立柱建物である。確認調査の段階では桁行4間以上の東西棟になるだろうと推定していたが、本調査によって桁行5間の東西棟であることが判明した。妻柱については、西側は近年の攪乱上に位置するため確認できないが、東側は攪乱外に位置しているにもかかわらず検出できなかった。妻柱が検出されない掘立柱建物は、近隣の寝屋東遺跡や大尾遺跡でも見つかっている。大尾遺跡では、両妻柱のみ規模を小さくする掘立柱建物も同時に検出されていることから、大尾遺跡の報告では、妻柱が検出できない掘立柱建物の妻柱は「他の柱穴よりも小規模であったために、後世の削平によって失われた」のだと考えた。しかし同様の類例がこれだけ周辺の遺跡から見つかってきている以上、その考えを改める必要がある。後世の削平によって失われた妻柱もあるかもしれないが、妻柱を立てない構造の掘立柱建物というものも、この地域にはごく一般的に存在していたと考えた方がよいだろう。つまりこの掘立柱建物1は、梁間1間、桁行5間の建物であったということになる。それぞれの柱間は、梁間が4.3m、桁行が2.0m等間である。主軸は座標東から南に3度ほど振れる。柱穴は隅丸長方形で、大きなものでは80×65cm程度のものもある。直径20cm強の柱痕跡が明瞭に検出できた。

掘立柱建物2（図9） 掘立柱建物1の北側に位置する。掘立柱建物1とは26m隔てる。桁行3間の東西棟であると考えているが、この西側に並ぶ建物4との関係によっては、桁行8間となる可能性もある。これについては掘立柱建物4の項で詳述する。掘立柱建物1と同様に、本来妻柱が検出される位置が攪乱にあたっていないにもかかわらず、妻柱は検出できない。したがってこれも梁間1間の建物ということになる。柱間は梁間が3.8m、桁行は1.85m等間で、主軸は掘立柱建物1と同じく、座標東から南に3度ほど振れる。

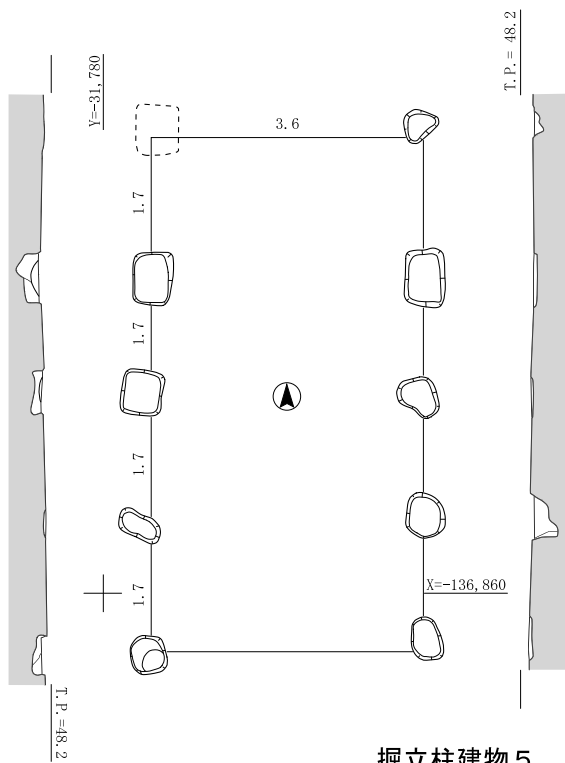
南東隅の柱穴（19ピット）からは須恵器壺片が、その西側の柱穴（18ピット）と北西隅の柱穴（21ピット）からは須恵器杯が出土した。いずれも7世紀中葉のものである。なお、19ピットから出土した壺片は、掘立柱建物4の北西隅の柱穴（47ピット）出土の須恵器壺片と接合し、同一個体になることが判明した。これは掘立柱建物2と4が同時期であることを示している。

掘立柱建物3（図8） 掘立柱建物2のさらに北側、調査区の北端部に位置する。検出した掘立柱建物の中で唯一の総柱立ちの建物跡である。梁間2間、桁行3間の東西棟で、主軸はほぼ東西の方位にのる。梁間の柱間は1.8m等間であるが、桁行の柱間は揃っていない。東から1間目と2間目が1.6m、3間目が1.9mとなる。柱穴はやや小さめの隅丸長方形で、直径20cm強の柱痕跡が明瞭に検出できた。

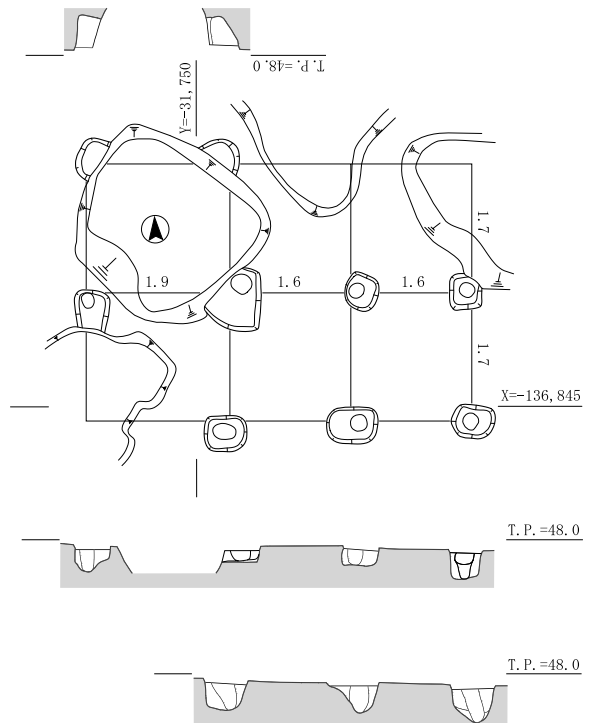
掘立柱建物4（図9） 掘立柱建物2の西側に位置する。掘立柱建物2と同じく梁間2間、桁行3間の東西棟と考えられるが、桁行の柱筋が掘立柱建物2の柱筋と完全に揃うことから、両者が一連の建物であった可能性も考えられる。桁行の柱間も建物2と同じく1.85m等間であり、掘立柱建物2とはちょうど柱間2間分の3.7mを隔てている。つまり掘立柱建物2と掘立柱建物4との間に柱穴が検出されれば、



掘立柱建物 1



掘立柱建物 5



掘立柱建物 3

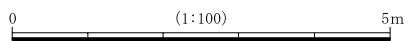
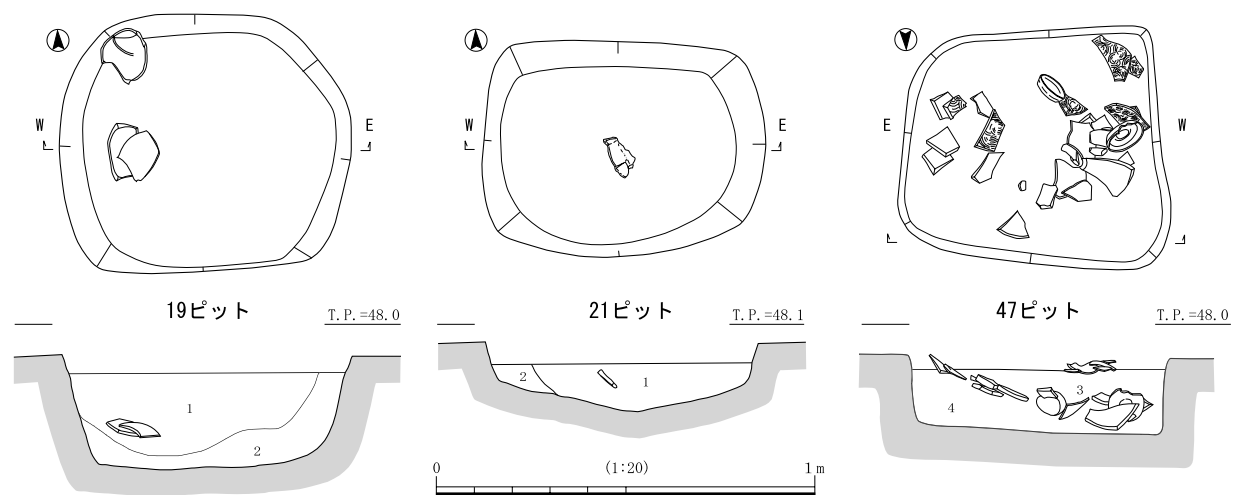
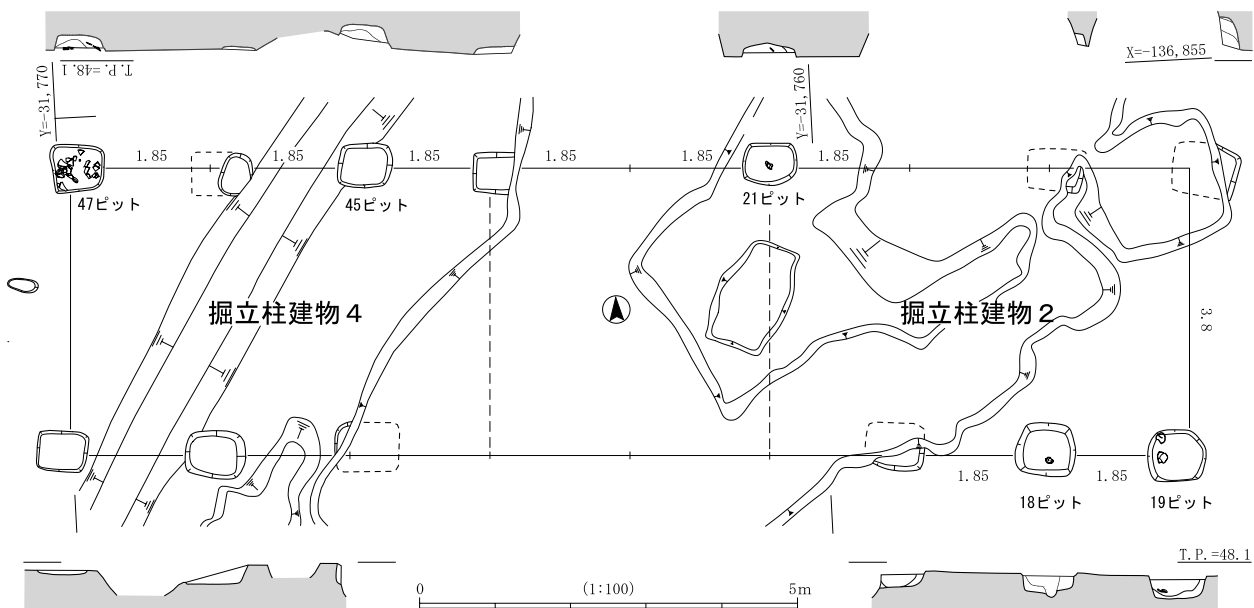


图 8 掘立柱建物 1・3・5 平面・断面图



- 1. にぶい黄 2.5Y6/3 粘質シルト
(黒褐 7.5YR3/1粘質シルト多く含む)
- 2. 黄褐 2.5Y5/3 粘質シルト
(明褐 7.5YR5/6地山ブロック土少量含む)
- 3. にぶい黄橙 10YR6/4 粘質シルト (炭多く含む)
- 4. にぶい黄 2.5Y6/3 粘質シルト
(明褐 7.5YR5/6 地山小ブロック土含む)

図9 掘立柱建物2・4および柱穴平面・断面図

桁行8間の東西棟ということになるが、残念ながら近年の攪乱のため確認はできない。これまでの建物跡と同様に妻柱の痕跡は検出できないが、西側の妻柱筋から外側に0.8m程外れた位置で、小規模なピットを検出した。建物に伴うピットであるかは不明であるが特記しておきたい。

北西隅の柱穴(47ピット)から須恵器が多数出土した。完形の杯2点のほか、壺・甕片などで、すべて7世紀中葉のものである。このうちの壺片が、掘立柱建物2の柱穴出土の破片と接合したことは前記のとおりである。

掘立柱建物5(図8) 掘立柱建物4の真西に位置する。検出した掘立柱建物の中で唯一の南北棟で、主軸はほぼ南北方位にのる。桁行は4間で、柱間は1.7m等間である。他の建物と同じく妻側の柱筋からは妻柱が検出できない。したがってこれも梁間1間の建物ということになる。梁間の柱間は3.6mを測る。柱穴は非常に浅く、若干の掘り下げによって底まで達するものがある。また北西隅の柱穴は完全に削平

されており、検出できなかった。

なお建物の配置をみると、掘立柱建物2・4の中軸線の延長が、この建物の桁行中央の柱穴上を通ることがわかる。掘立柱建物2・4とは建物の振れに微妙な違いがみられるものの、これは3棟が同時期に計画的に建てられたものであったことを示しているといえよう。

竪穴住居1 (図10) 掘立柱建物1の北西に位置する。掘立柱建物群と同様に、主軸が東西南北の方位にのる竪穴住居である。平面形は南北6.1m、東西6.3mの整った方形で、周囲には壁溝がめぐる。壁溝は広いところで幅約45cm、深さ約10cmを測る。支柱穴は4基で、東西の柱間は3.0m、東西の柱間は2.0mに配置されている。検出は容易であった。柱穴の直径は約50~60cm、深さは深いもので65cmとしっかりとしており、強固なつくりであったことがうかがえる。竈の痕跡は確認できない。

住居内には灰黄褐色粘質シルトが堆積しており、この中からは土師器の鏝付長胴甕と甑が出土した。このほか西北隅の柱穴(38ピット)埋土内からは、7世紀中葉の須恵器杯蓋が出土した。

竪穴住居2 (図11) 竪穴住居1の北西に位置する。平面形は南北6.7m、東西4.6mの南北に長い長方形で、長軸は座標北から東に6度ほど振れる。周囲には壁溝がめぐり、東壁際の中央やや南寄りには竈が付随する。壁溝は幅約20~40cm、深さ約10cm、竈は幅1.25m、奥行1.3mを測る。竈の遺存状態は悪く、壁の立ち上がりは殆ど残っていない。中央部は被熱によって赤褐色に変質しているが、支脚に使われた土器

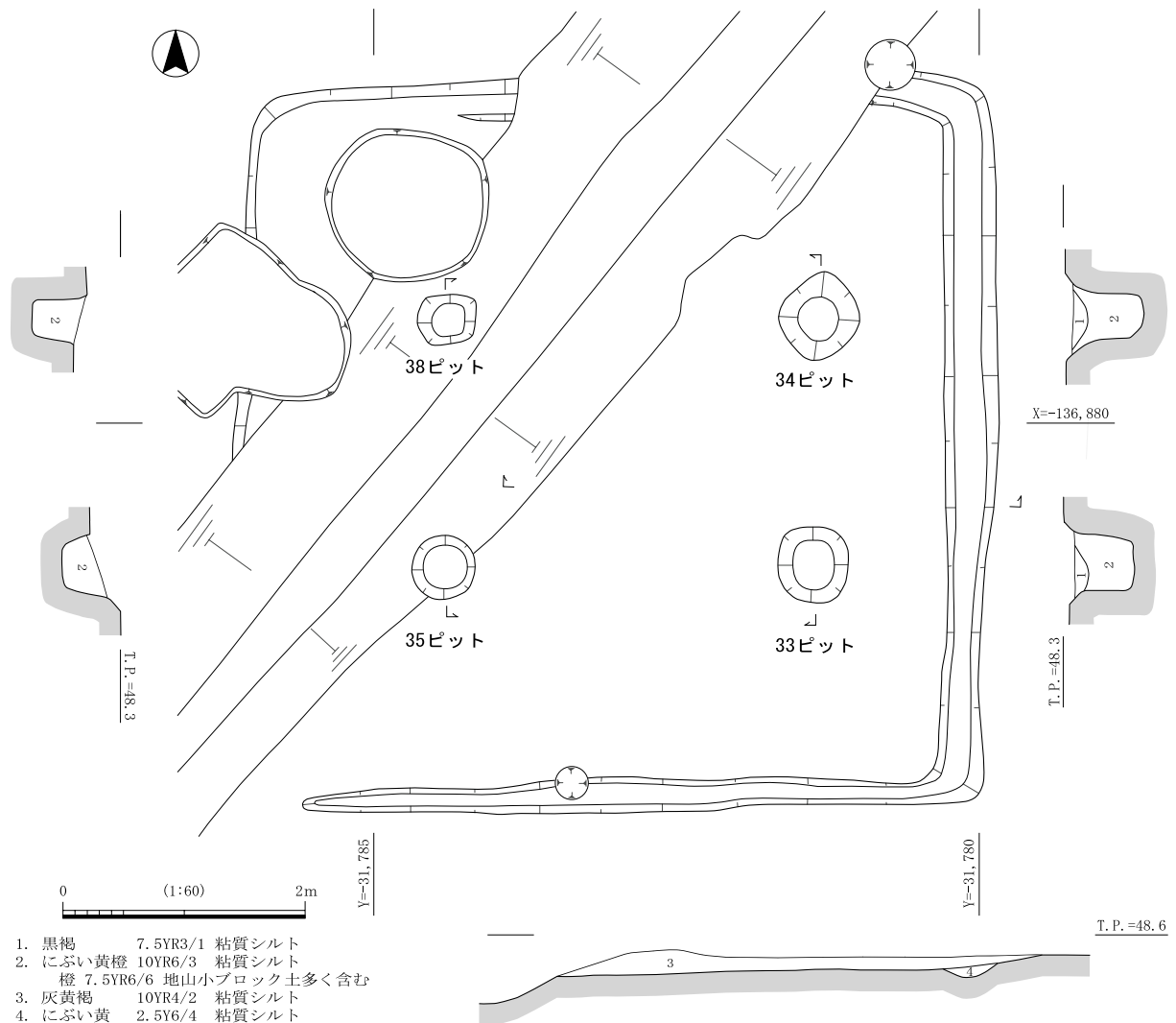


図10 竪穴住居1平面・断面図

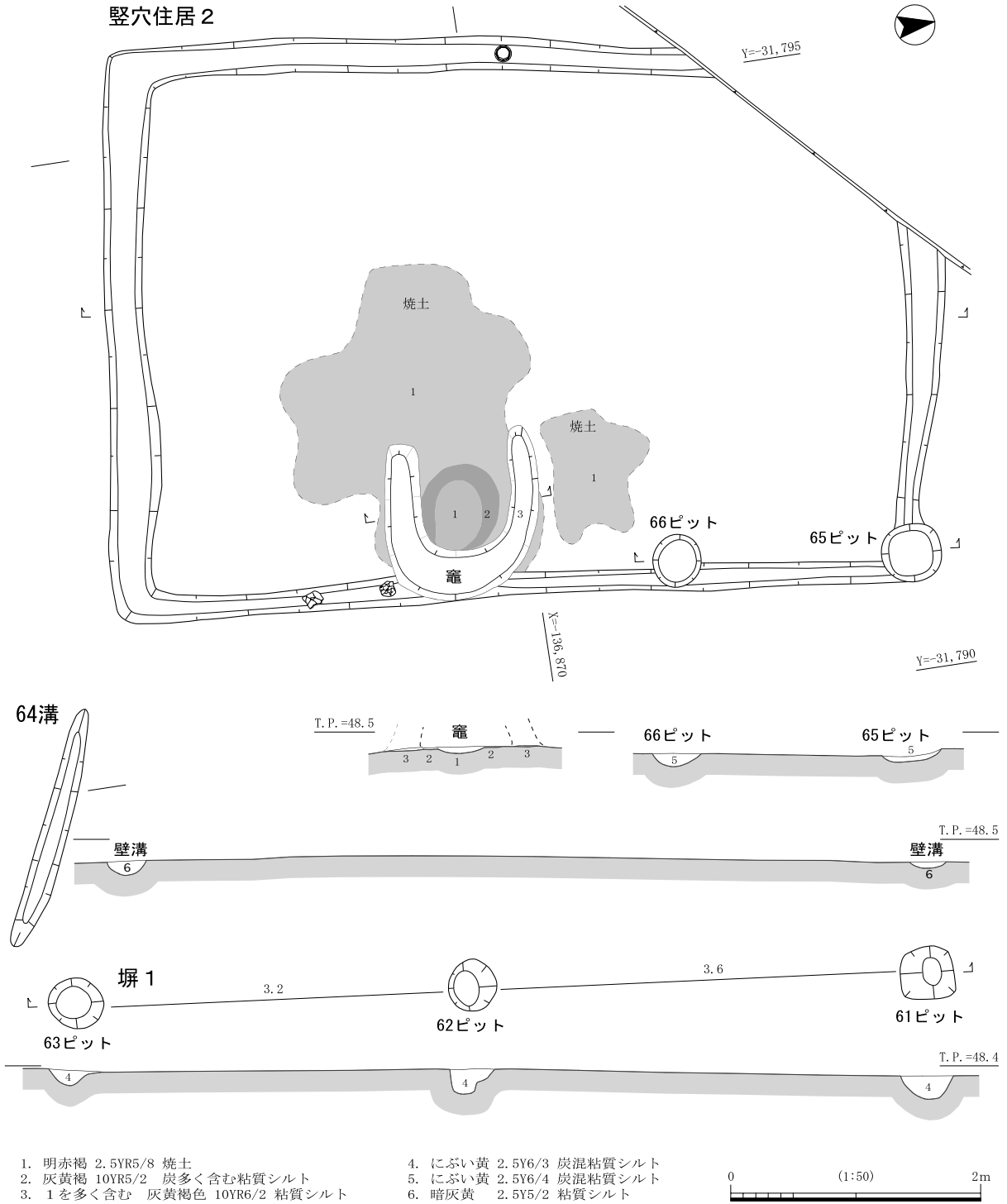


図11 竪穴住居2・堀1・64溝平面・断面図

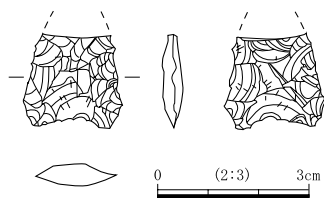


図12 竪穴住居2出土石鏃

などは残っていない。竈の周辺には竈から掻き出されたとされる焼土が広範囲に広がっている。このほか住居址の北東隅と、その南側に1.9m隔てた東壁際でピットを2基検出した。深さは10cm足らずで非常に浅い。これ以外、竪穴住居1のような明らかに支柱穴とわかる柱穴は検出できていない。上屋の構造を復原するまでには至っておらず、検出したピット2基がどのような役割を果たしていたのかも不明である。

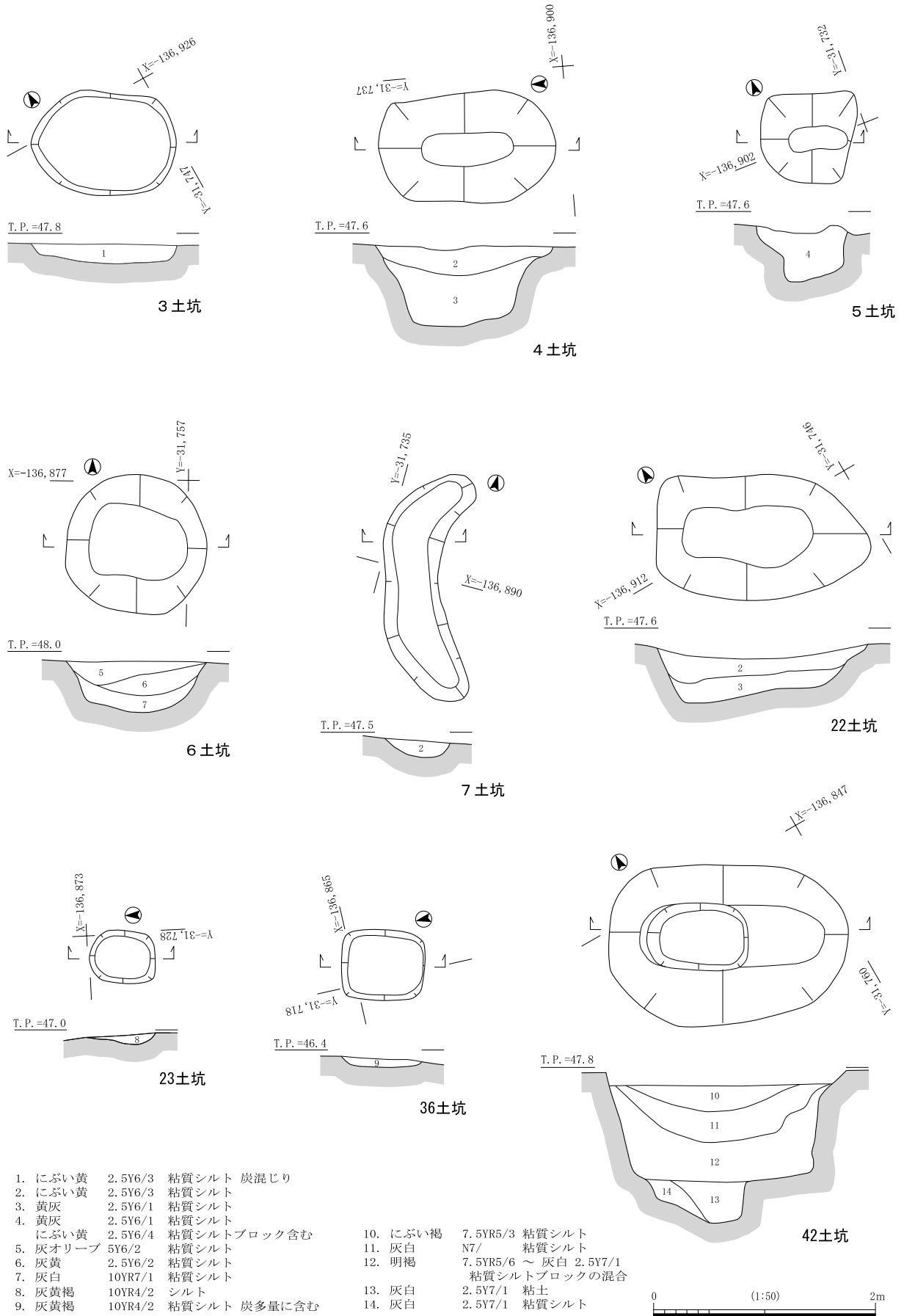


図14 土坑平面・断面図

うこともあり、調査の段階では、雨水が溜まる程度で湧水は認められなかった。おそらく水溜めとして使われていたものと考えられる。

これ以外の7基は、すべて調査区の東半部で検出した。

3土坑 掘立柱建物1の南東側にやや隔てて位置する。平面形は長径1.32m、短径0.95mの楕円形を呈し、深さは18cmを測る。埋土は炭混じりのにぶい黄色粘質シルトである。

4土坑 3土坑の東側に位置する。平面形は長径1.6m、短径1.0mの楕円形を呈し、深さは0.72mを測る。埋土は2層に分層できる。下層が黄灰色粘質シルトで、上層がにぶい黄色粘質シルトである。

5土坑 4土坑の東側、調査区壁際に位置する。平面形は一辺約0.8mの歪んだ隅丸方形を呈する。深さは0.53mで、埋土はにぶい黄色粘質シルトブロックを含む黄灰色粘質シルトである。

7土坑 4土坑の北側に位置する。平面形は幅約0.5mの溝状を呈し、長さは15cmを測る。埋土はにぶい黄色粘質シルトである。

22土坑 3土坑の南側に位置する。平面形は長径1.94m、短径1.13mの歪んだ楕円形を呈し、深さは0.5mを測る。埋土は4土坑と同じ2層で、下層が黄灰色粘質シルト、上層がにぶい黄色粘質シルトである。

23土坑 7土坑の北方にやや隔てて位置する。平面形は南北0.6m、東西0.47mのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。深さは9cmで、埋土は灰黄褐色シルトである。

36土坑 23土坑の東側、調査区北壁際に位置する。次に報告する1落ち込み内の堆積層を掘削した面で検出した。平面形は南北0.75m、東西0.64mの隅丸長方形を呈する。深さは7cmで、炭を多く含んだ灰黄褐色粘質シルトが堆積する。

1落ち込み (図15) 平坦部の北東隅で検出した。調査区内から東方向に向かう落ち込みで、その範囲は調査区内の300㎡強を占める。深さはもっとも深い箇所約40cmを測り、下層に灰黄褐色砂質土が2層と、上層ににぶい黄橙粘質土が堆積する。東側の一部は落ち込みの始まりが、15cm程の段差になっているが、西半部では不明瞭であり、人為的な遺構とは言い難い。おそらくこの落ち込みはもともとの自然地形であり、その埋土は耕作地を平坦に造成したときの盛土であると思われる。

2. 丘陵斜面トレンチ および 斜面裾トレンチ (図16・17)

平成13年度の確認調査で、尾根裾部の炭化物や焼土を含む層から、溶着した須恵器や埴輪片が発見され、周辺に須恵器や埴輪を焼成した窯跡が存在する可能性が指摘された。この成果に基づき、尾根の斜面から裾部にかけての調査区を設定し、調査を行った。確認調査で窯跡の存在が指摘されていたのは、細い尾根筋西側の「丘陵西斜面」とした箇所であり、そちら側はやや広めの調査区を設定した。細尾根の東側斜面についても、窯跡の存在が否定できなかったため、斜面と裾部に細めの調査区を設定し、窯跡の検出に努めた。

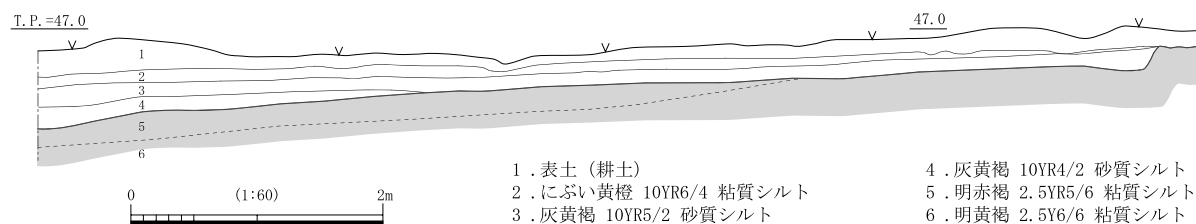


図15 1落ち込み断面図

丘陵西斜面には北側と南側に2箇所の調査区（西斜面北・南トレンチ）を設定した。

西斜面北トレンチ（図16）平成13年度の確認調査が実施された地点であり、集落跡が確認された平坦部のすぐ南側にあたる。機械掘削を行う前は、竹の切り株等があったために、辛うじて斜面を登ることができたが、機械掘削後はさらに勾配がきつくなり、完全に斜面の昇り降りが不可能となった。斜面部については機械掘削で表土層を除去した面が直ちに地山となり、自然の浸食によってできた小規模な流路が3条あることが判明した。この3条は斜面の裾部で合流し、さらに西側へとつづいている。裾部には、斜面から流出した土砂が厚く堆積する。現地盤から約1.8mの深さまで調査したが、底までは確認できていない。谷の堆積層は黄灰色や暗灰黄色の粗砂や細砂、あるいは砂質シルトであり、確認調査で確認された焼土層は平面的にも、また断面でも確認できなかった。炭を含む暗灰黄砂質土層は僅かながら検出できたが、非常に狭い範囲での堆積であり、全体に広がるものではない。また、窯跡を示す遺構は確認できなかった。

ただし、この斜面裾部からは確認調査同様に土器が出土している（写真図版8下）。わずかに土師器甕も含まれるが、多くは須恵器の甕や横瓶の体部片である。時期を特定できるものは少ないが、7世紀代のものがほとんどである。

西斜面南トレンチ（図16）北トレンチから南に約17m隔てて設定した約200㎡の調査区である。斜面部は竹林の表土層除去後の面が直ちに地山となるが、西端部には斜面から流出したにぶい黄色の細砂・礫が約1m堆積する。斜面では浸食によってできた小規模な流路を2条検出したが、このほか窯跡を示すような顕著な遺構は確認できなかった。また、遺物も全く出土しなかった。

丘陵の東斜面には4箇所の調査区（東斜面1～4トレンチ）と斜面裾の平坦部に1箇所の調査区（東斜面裾トレンチ）を設定した。

東斜面1～4トレンチ（図17）尾根の東斜面に設定した調査区である。このうちもっとも北側の東斜面1トレンチと、その南の東斜面2トレンチで、自然の浸食によってできた小規模な流路をそれぞれ1条ずつ検出したが、そのほか東斜面3・4トレンチでも窯跡を示すような顕著な遺構は確認できなかった。

東斜面1トレンチで検出した流路は、やや規模が大きく幅9m前後に復原できるが、調査区内では東肩部を検出したにとどまった。南方へとのび、東斜面裾トレンチへとつづく。

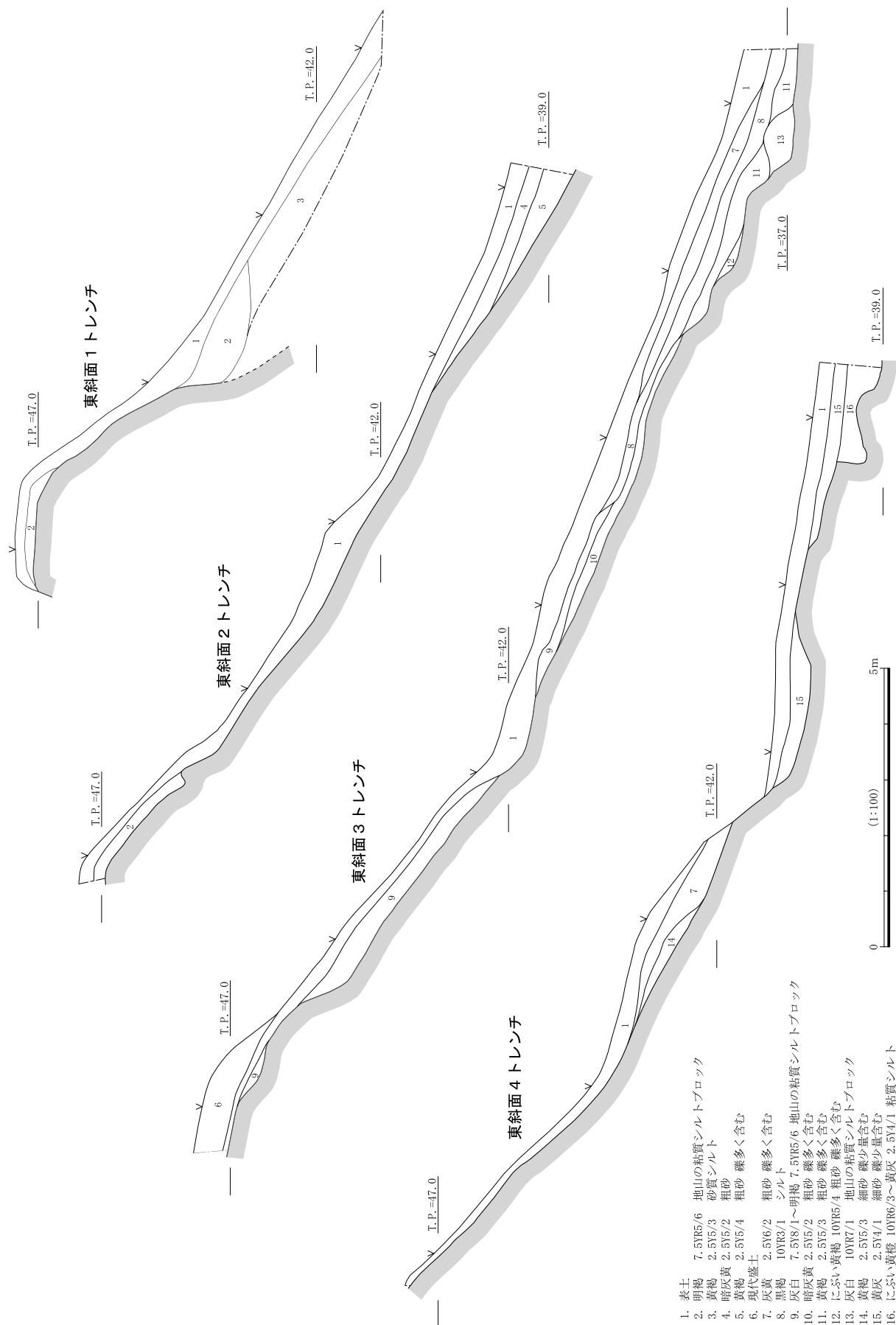
東斜面2トレンチで検出した流路は幅2～3m程度の小規模なもので、調査区内を蛇行しながら、これも東斜面裾トレンチへとつづく。

東斜面裾トレンチ（図16）東斜面1～3トレンチ下方の平坦部に位置する。東斜面1トレンチ側からの流路に、東斜面2トレンチからの流路、そして調査区の東側からの流路がこの調査区内で合流し、一つの大きな谷筋となる。深さは現地盤から2m以上あり、底までは確認できなかった。谷筋への堆積層は、礫を多く含む黄灰粗砂や褐灰砂質シルト、にぶい黄砂質シルトなどであり、西斜面北トレンチ同様に、焼土層や炭層は平面的にも、また断面でも全く確認できなかった。

当初は、谷底から西斜面北トレンチ同様の土器が出土するものと予想されたが、谷の中層で磁器が2点と、中世以降の瓦片1点が出土した以外、古代の遺物は全く出土しなかった。



図16 西斜面北・南トレンチ、東斜面北トレンチ断面図



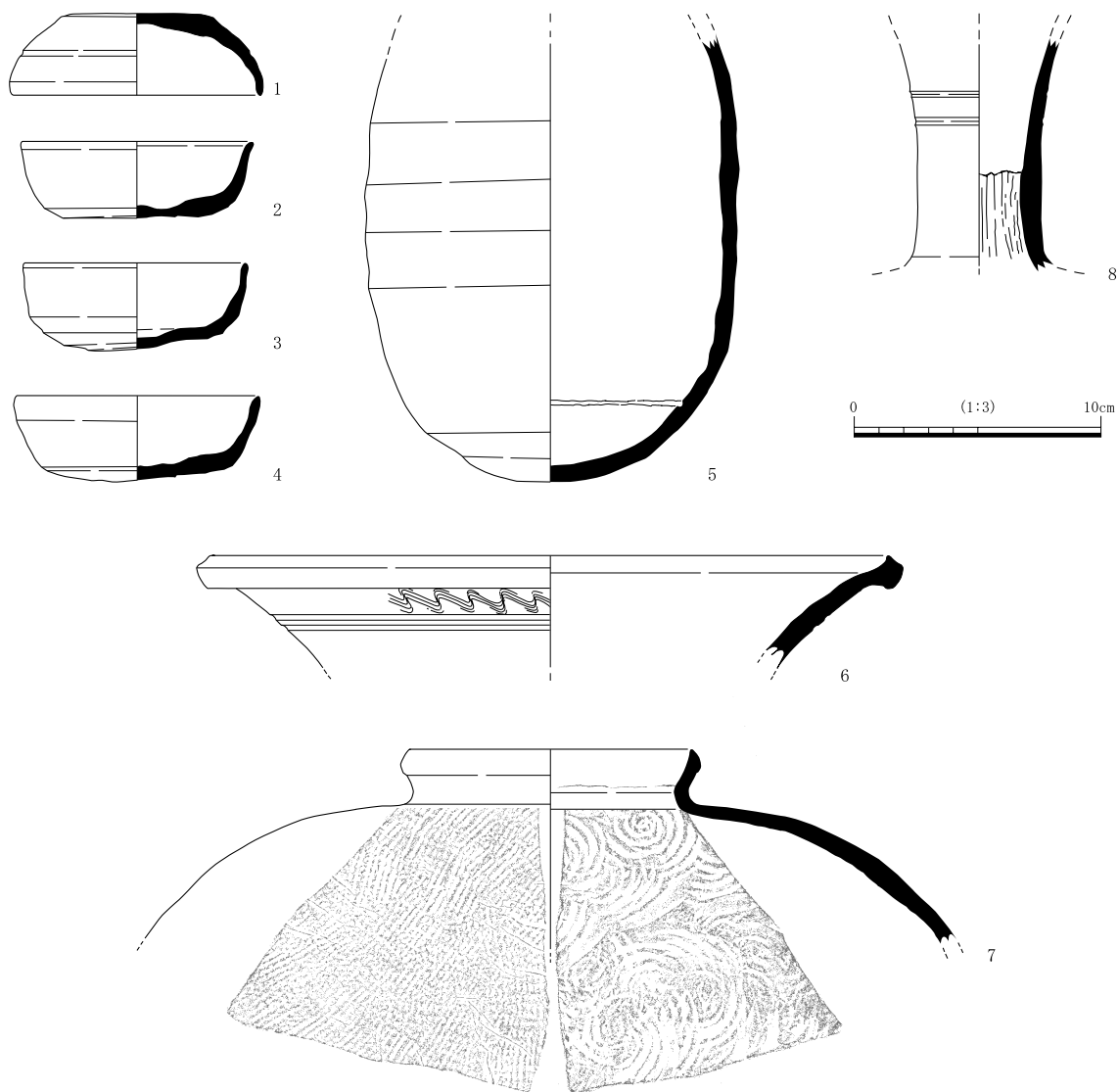
- 1. 表土
- 2. 7.5YR5/6 地山の粘質シルトブロック
- 3. 2.5Y5/3 砂質シルト
- 4. 暗灰黄 粗砂
- 5. 黄褐 粗砂 礫多く含む
- 6. 現代盛土
- 7. 灰黄 粗砂 礫多く含む
- 8. 10YR3/1 シルト
- 9. 灰白 7.5YR5/1~明褐 7.5YR5/6 地山の粘質シルトブロック
- 10. 暗灰黄 粗砂 礫多く含む
- 11. 黄褐 粗砂 礫多く含む
- 12. にぶい黄褐 10YR5/4 粗砂 礫多く含む
- 13. 灰白 10YR7/1 地山の粘質シルトブロック
- 14. 2.5Y5/3 細砂 礫少量含む
- 15. 黄灰 2.5Y4/1 細砂 礫少量含む
- 16. にぶい黄褐 10YR6/3~黄灰 2.5Y4/1 粘質シルト

図17 東斜面1～4 トレンチ断面図

第3節 遺物

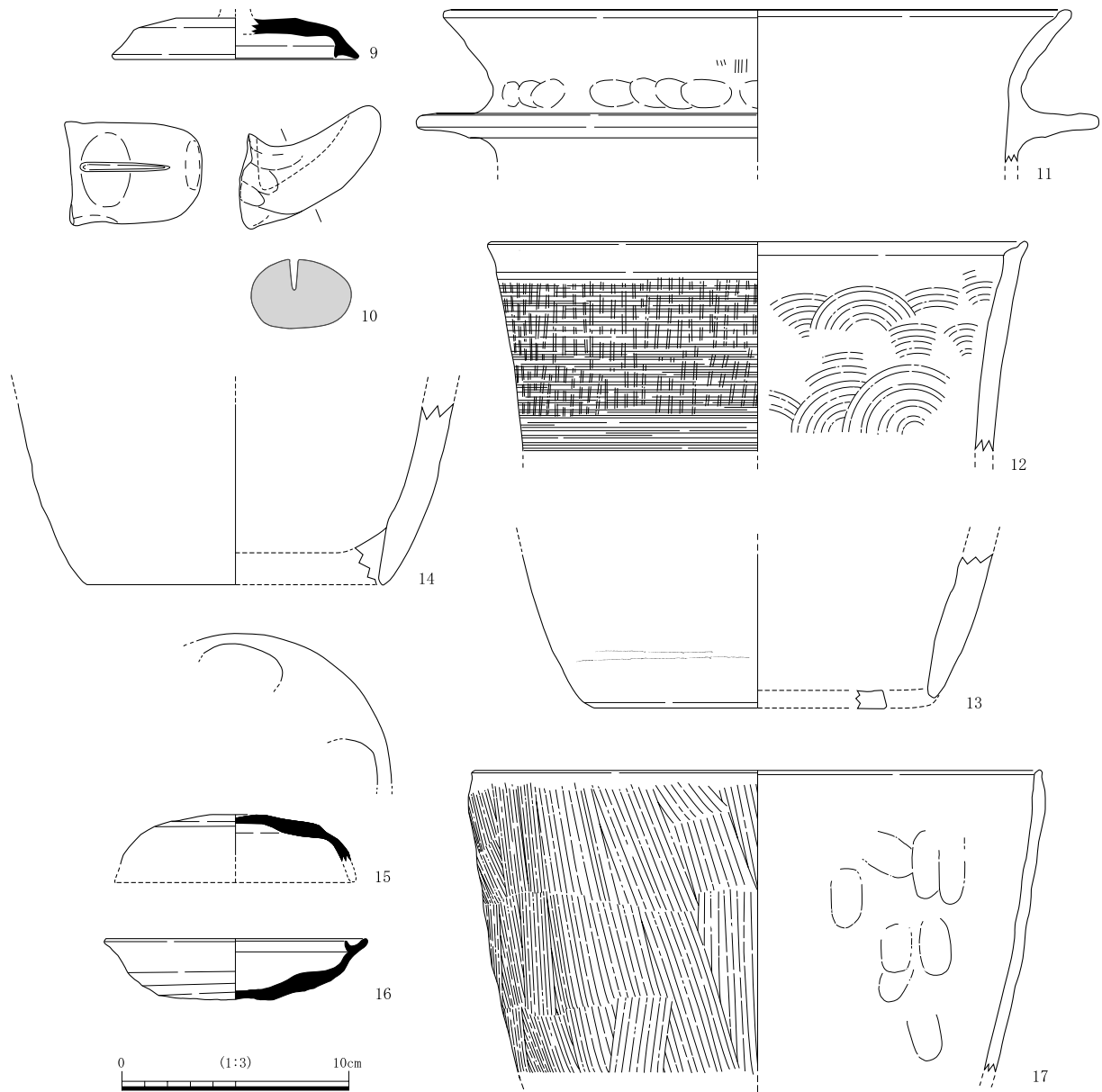
7世紀中葉の土師器、須恵器を中心に、60×40×15cmの遺物収納コンテナに3箱分の遺物が出土した。ひとつの遺跡から出土する遺物としては少ない方であるが、掘立柱建物の柱穴や竪穴住居の壁溝などから出土していることから、確実に遺構の時期をおさえることができる。

1・2・5はいずれも掘立柱建物2の柱穴から出土した。1は21ピット、2は18ピット、5は19ピットからである。1は口縁部が僅かに残る須恵器小片で、口径10.1cm、器高3.3cmを測る。外面肩部に凹線状の浅いくぼみが僅かに認められることから、杯蓋として復原した。焼成不良のため、軟質で灰褐色を呈する。2は須恵器杯身である。底部外面はヘラ切り後不調整で、内面見込み部にはヨコナデ後に仕上げのナデを一度だけ施している。口径9.3cm、器高3.1cmである。5は須恵器壺の体部である。出土した当初は横瓶になると考えていたが、横瓶の頸が付くと思われる箇所には一部欠損箇所があるものの、内・外面ともに頸を接合した痕跡がまったく認められない。したがって、長胴の壺として復原した。内面の当て具痕、外面のタタキ・カキ目等も認められない。体部最大径は15.1cmである。



1. 掘立柱建物2 (21ピット)、2. 同(18ピット)、5. 同(19ピット)、3・4・6・7. 掘立柱建物4 (47ピット)、8. 41溝

図18 掘立柱建物2・4出土土器実測図



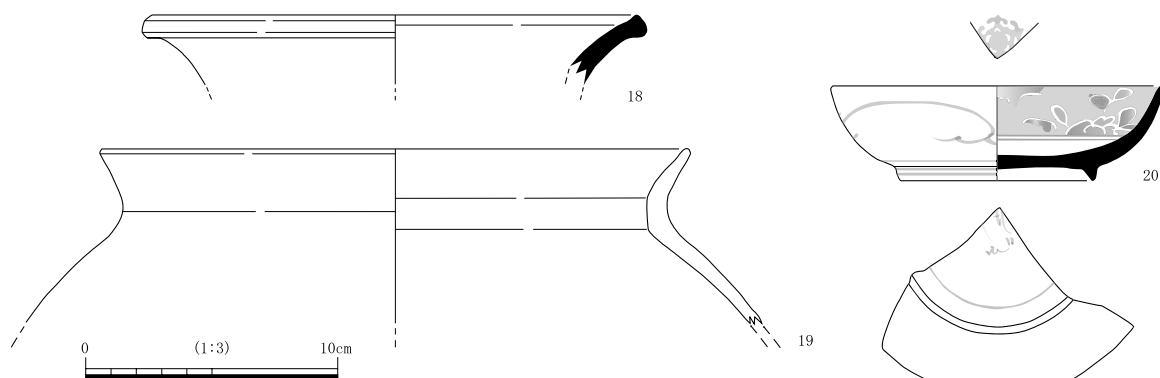
9. 竪穴住居 1 (38ピット)、10~14. 竪穴住居 1 (埋土)、15. 竪穴住居 2 (西壁溝)、16・17. 竪穴住居 2 (東壁溝)

図19 竪穴住居 1・2 出土土器実測図

3・4・6・7はすべて掘立柱建物4の柱穴(47ピット)から出土した。3・4は須恵器杯身で、ともに底部外面はヘラ切り後不調整で、内面見込み部には、ヨコナデ後に仕上げのナデを一度施している。3は口径8.9cm、器高3.6cm、4は口径9.8cm、器高3.6cmである。6は須恵器甕の口縁部である。外面には凹線が2条と、その上部に波状文がめぐる。口縁端部は上方につまみあげる。口径は27.4cmである。7は須恵器横瓶である。外面はタタキのままで、カキ目は施さない。口径は10.2cmである。

8は41溝から出土した須恵器長頸壺の頸部である。外面に2条の沈線がめぐる。以上の掘立柱建物や溝から出土した土器は、いずれも7世紀中葉に位置するものである。

9は竪穴住居1の柱穴(38ピット)から出土した。7世紀中葉の須恵器杯蓋で、天井部につまみが付いていた痕跡が僅かに確認できる。口径10.9cm、かえり部径8.8cmを測る。10~14は竪穴住居1の埋土から出土した。10は甌の把手である。やや扁平な牛角状を呈し、上面に切り込みを入れる。体部との接合方法は、挿入法ではなく、貼り付け法であったことが剥離面から判断できる。後述する12~14と同じく、



18・19. 西斜面北トレンチ谷下層、20. 東斜面裾トレンチ谷中層

図20 西斜面北トレンチ、東斜面裾トレンチ出土土器実測図

須恵器技法で成形された後、酸化焰にて焼成されたものであろうか。11は土師器の鏝付長胴甕で、口径は27.4cmである。12～14は甕である。これら12～14については、通常の土師器のように酸化焰で焼成されたため、橙褐色を呈しているが、成形には明らかに須恵器の技法が採用されている。12はその痕跡が顕著であり、内面には当て具痕が、外面にはタタキの後施されたカキ目が明瞭に残っている。口径は23.5cmである。いずれも7世紀中葉のものと考えているが、10や12などはやや古い段階に属するかもしれない。

15は竪穴住居2の西壁溝、16～17は竪穴住居2の東壁溝から出土した。15は須恵器杯蓋、16は須恵器杯身である。両者ともに焼成不良のため、軟質で灰褐色を呈する。特に16については表面や断面の色調、また焼成具合が前述した掘立柱建物2の柱穴出土の杯蓋1と酷似している。セット関係にあった可能性も考えられる。口径9.7cmで、受部の最大径は11.6cmを測る。17は土師器甕である。外面調整は縦方向のハケ目で、口径は24.8cmである。いずれも7世紀中葉のものと考えられる。特に16は、口縁部の立ち上がりが非常に短く、真横から見た場合には、完全に受部端上端のラインより下に隠れている。いわゆる杯Hと呼ばれるこのタイプの杯の最終段階を示す特徴であり、これにより7世紀中葉に位置するものと判断した。

18・19は西斜面北トレンチの谷下層から出土した。18は須恵器甕で、平成13年に実施した確認調査で出土していた甕片と接合した。口径は19.2cmである。19は土師器甕で、口径は23.0cmである。両者とも7世紀代のものであると思われる。このほか同じ谷の下層からは、写真図版8に掲載した須恵器甕や横瓶の体部片が数点出土している。しかし、確認調査で指摘されたような溶着したものはまったく見受けられない。これらの遺物は、おそらく尾根上の集落から転げ落ちたものであると考えられる。

20は東斜面裾トレンチの谷中層で出土した。染付の磁器皿である。同じ谷の中層からは、このほかに染付の磁器碗片1点と中世以降の瓦片が出土している。

以上出土遺物について報告したが、掘立柱建物からも竪穴住居からも7世紀中葉の土器が出土していることが明らかとなった。前項では、掘立柱建物や竪穴住居が整然と計画的に配置されていたことを明らかにしたが、これによって、出土遺物からも掘立柱建物と竪穴住居の両者が同時期に存在していたこと、またそれが7世紀中葉という一時期の事象であったことを明らかにすることができた。

註

1) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.2 『大尾遺跡』(財)大阪府文化財センター調査報告書第92集

第4章 奥山遺跡の調査成果

第1節 調査の経緯

奥山遺跡は、平成14年度の確認調査で古墳の一部を検出したことから、新規に周知された遺跡である。その古墳についても、遺跡名と同時に「奥山1号墳」と命名された。

本格的な現地調査には平成15年8月から着手したが、その際、同じ尾根上には1号墳以外にも古墳が点在している可能性があったため、新たな古墳の検出にも努めた。しかし調査の結果、調査区内には古墳は群集せず、奥山1号墳のみが単独で存在することが判明した。寝屋川市内での横穴式石室の確認は、寝屋古墳に次いでこれが2例目であり、本格的な発掘調査が実施されたものとしては初めての古墳となる。

古墳以外の遺構としては、古墳の周濠内から小規模な焼土坑が1基検出されたが、奥山遺跡内の遺構は実質的には奥山1号墳のみであることから、以下では奥山1号墳を主に報告することとする。

なお、調査に至る経緯および経過についての詳細は、第1章に記述している。

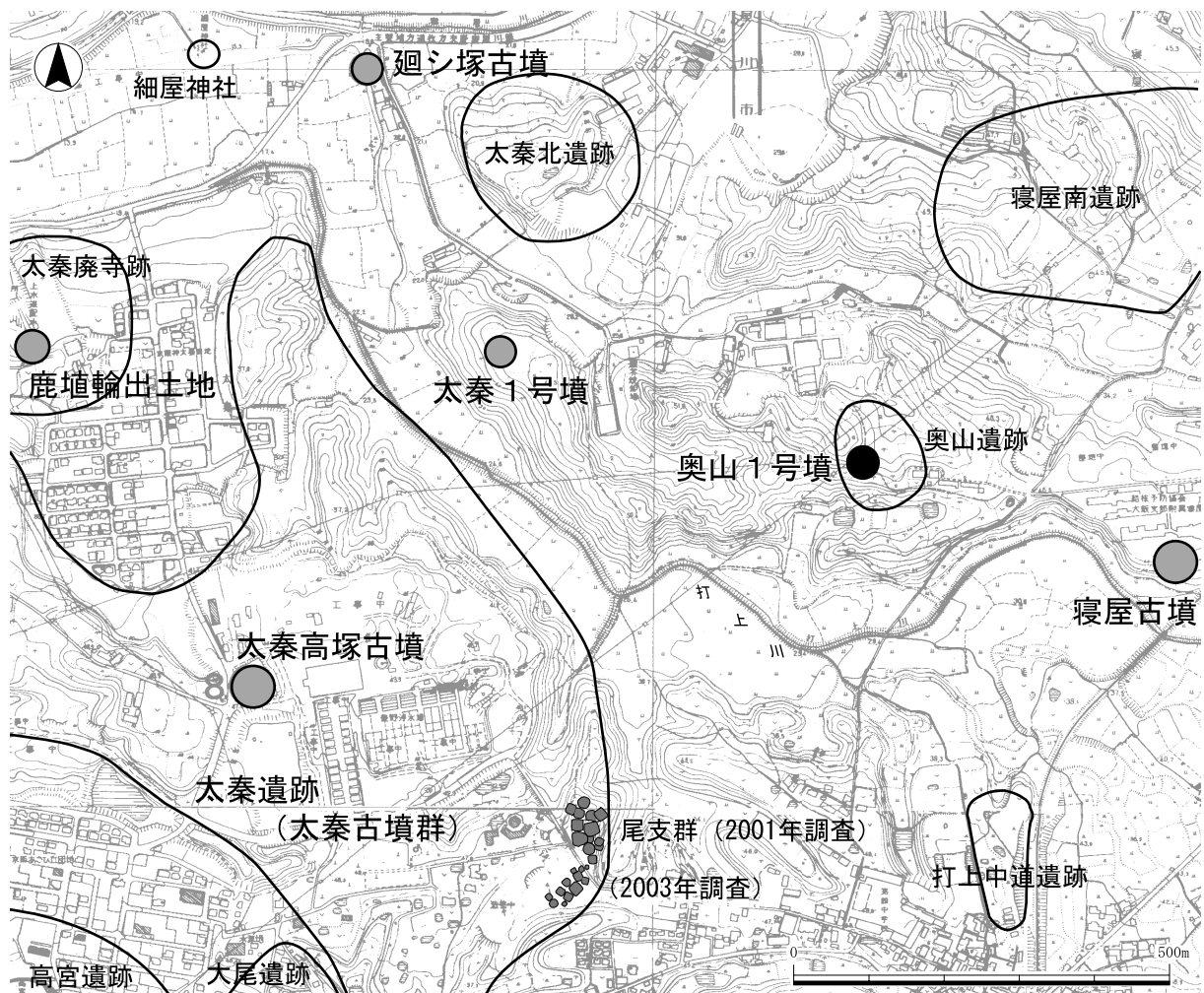


図21 奥山1号墳周辺の遺跡分布図

第2節 古墳の立地と環境

奥山1号墳は寝屋川市の東方に広がる枚方丘陵上に立地する。この枚方丘陵は、寝屋川の上流にあたる北谷川によって南北に大きく分断され、その南部はさらにタチ川や打上川によっていくつかの丘陵に分けられている。古墳は、このうちの打上川を南に見下ろす丘陵の、細い尾根筋上に立地している(図21、写真9)。寝屋川公園の造成により本来の地形が大きく改変されてはいるが、遺跡の南側は開け、対岸の丘陵上に広がる太秦遺跡を望むことができる。この尾根筋は東から西へと向かってのびており、頂部の平坦部は奥山遺跡付近がもっとも狭く、幅10~15m程度の馬の背状を呈している。その頂部の標高はちょうど50mで、南の打上川沿いの水田との比高差は約24mを測る。

この奥山1号墳が立地する同じ尾根上には、東へ400mほどの地点に、北河内地域最大規模の横穴式石室をもつ寝屋古墳が築かれている。寝屋古墳付近では尾根の幅が広く、頂部の平坦部も広がっており、また古墳が立地する南斜面も非常に緩やかな傾斜を成している。それに対し奥山1号墳が立地する箇所は、尾根が痩せ、古墳の北側と南側は急傾斜な斜面となっているが、その中でも、支尾根が分岐するもっとも幅が広がった箇所を選び、0.8mほどの僅かな高まりを有効に利用して奥山1号墳は築かれている(図23)。

また同じ尾根の西先端部には、本格的な調査は実施されていないが、太秦1号墳があるとされている。それまでの途中にも尾根頂部には何箇所か開けた場所があることが地図上で確認できることから、おそらくそういった場所には、奥山1号墳クラスの古墳が点々と築かれていたのだろうと推測できる。

奥山遺跡周辺は、調査前は鬱蒼とした竹林であり、斜面部はつい近年まで筍畑として利用されていた。このため、墳丘や石室は、その際の造成や尾根上を通る里道によって大きく削平を受けている。なお当古墳の石室石材と思われるものが、すぐ東側に接する寝屋川公園内の片隅にいくつか集められている。

周辺の各遺跡については、第2章で詳しく紹介しているので、本節では割愛する。



写真9 奥山1号墳遠景(丘陵頂部↓部に立地)

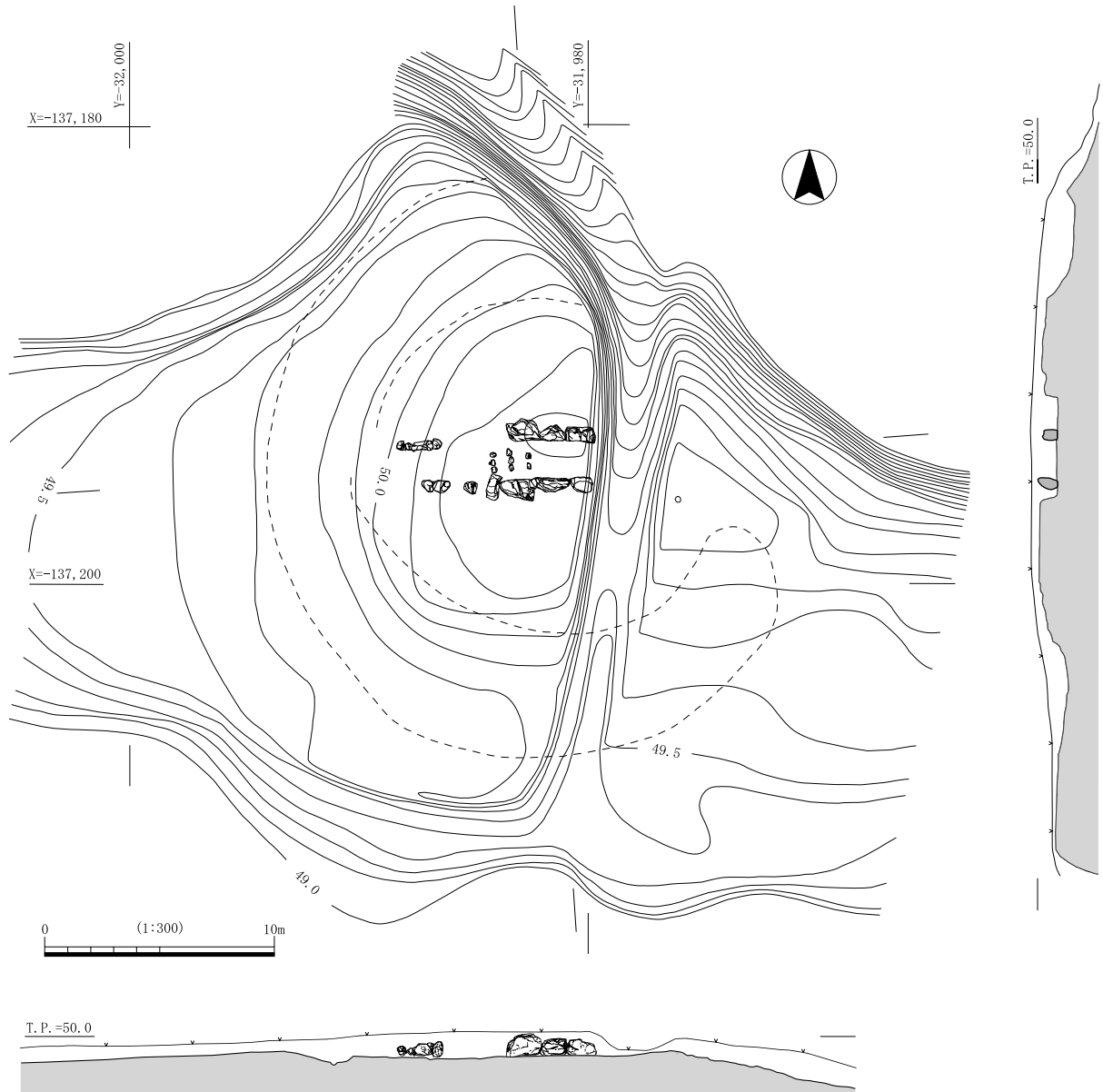


図22 奥山1号墳調査前墳丘測量図



写真10 寝屋川公園内に集められた石材

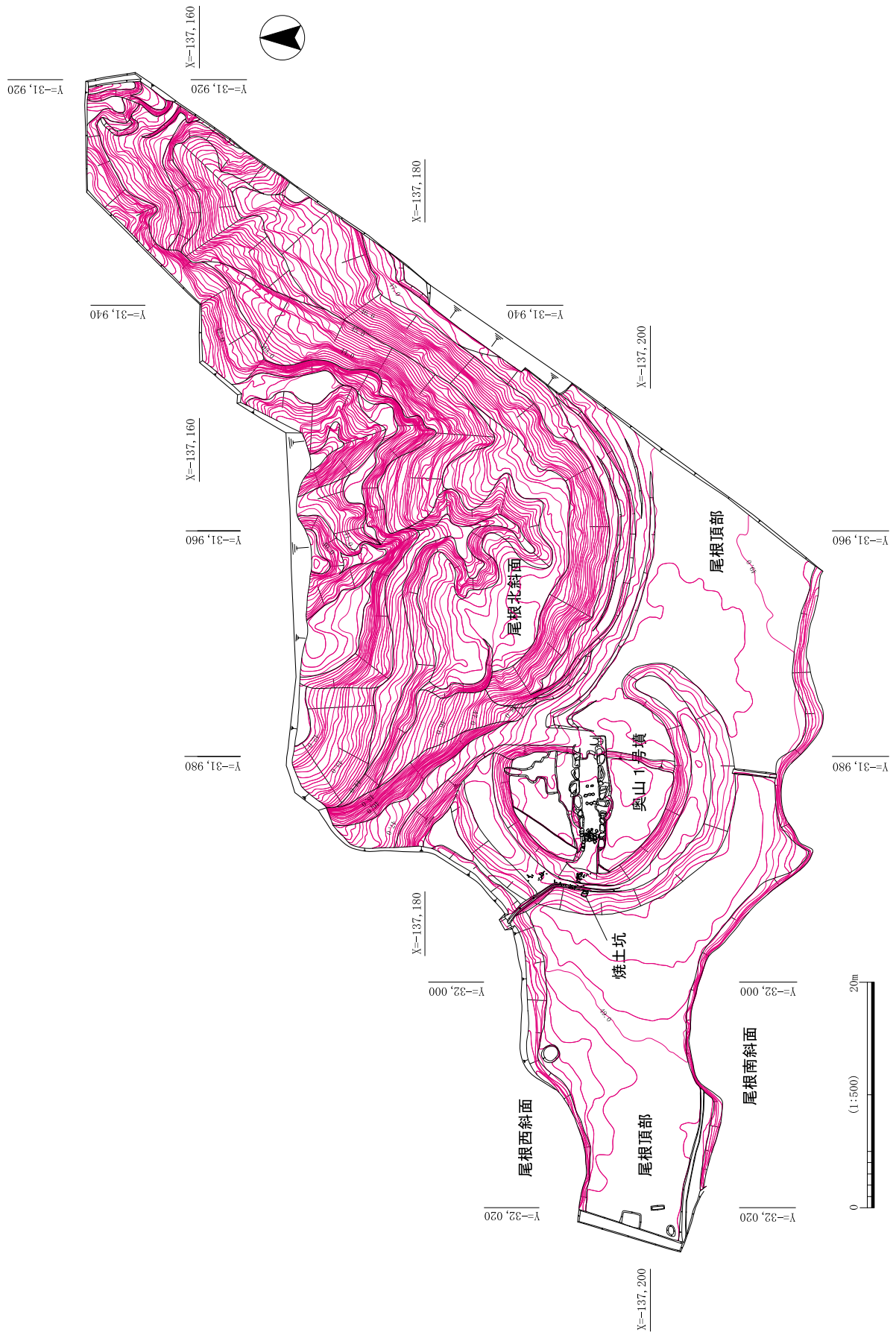


图23 奥山遺跡全体図

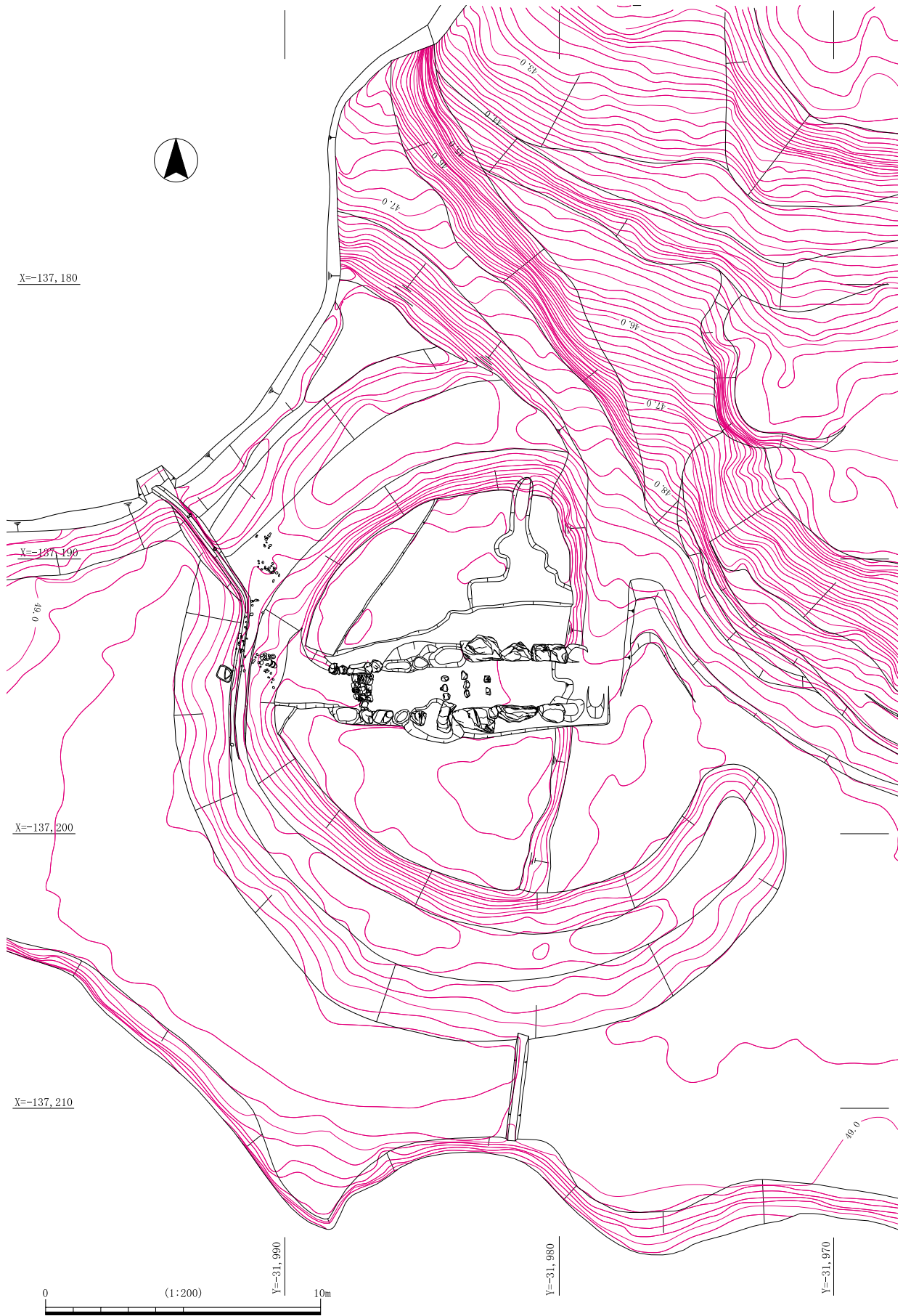
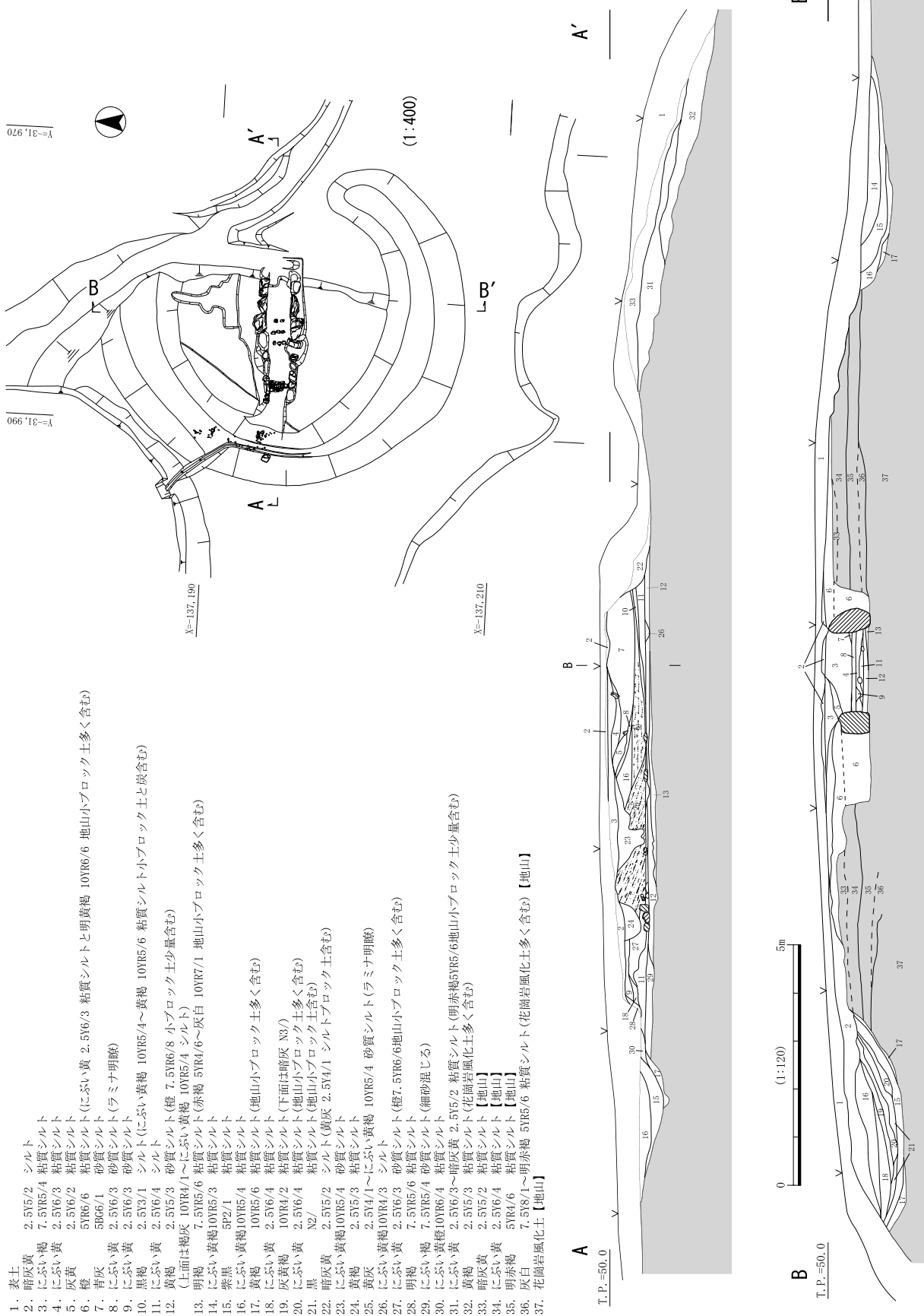


图24 奥山1号墳丘平面图



1. 表土
2. 暗灰黄シルト
3. 2.5Y5/2 粘質シルト
4. 7.5YR5/4 粘質シルト
5. 2.5Y6/3 粘質シルト
6. 2.5Y6/2 粘質シルト
7. 5YR6/6 粘質シルト (にぶい黄 2.5Y6/3 粘質シルトと明黄褐 10YR6/6 地山小ブロック土多く含む)
8. 5R66/1 砂質シルト
9. 2.5Y6/3 砂質シルト(ラミナ明瞭)
10. 2.5Y6/3 砂質シルト
11. 2.5Y6/4 粘質シルト
12. 2.5Y6/3 砂質シルト(層 7.5YR6/8 小ブロック土少量含む)
13. 2.5Y5/3 砂質シルト
14. 7.5YR5/6 粘質シルト(上面は褐灰 10YR4/1~にぶい黄褐 10YR5/4 シルト)
15. 2.5Y6/2 粘質シルト(赤褐 5YR4/6~灰白 10YR7/1 地山小ブロック土多く含む)
16. 2.5Y6/4 粘質シルト
17. 2.5Y6/4 粘質シルト(地山小ブロック土多く含む)
18. 2.5Y6/4 粘質シルト
19. 2.5Y6/4 粘質シルト(下面は暗灰 N3/)
20. 2.5Y6/4 粘質シルト(地山小ブロック土多く含む)
21. 2.5Y6/4 粘質シルト(地山小ブロック土含む)
22. 2.5Y4/1~にぶい黄褐 10YR5/4 シルト(黄灰 2.5Y4/1 シルトブロック土含む)
23. 2.5Y5/3 砂質シルト
24. 2.5Y5/3 砂質シルト
25. 2.5Y4/1~にぶい黄褐 10YR5/4 砂質シルト(ラミナ明瞭)
26. 2.5Y6/3 粘質シルト(層 7.5YR6/6 地山小ブロック土多く含む)
27. 7.5YR5/6 粘質シルト
28. 2.5Y6/3 砂質シルト(細砂混じる)
29. 7.5YR5/4 砂質シルト
30. 2.5Y6/3~暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト(明赤褐 5YR5/6 地山小ブロック土少量含む)
31. 2.5Y6/3~暗灰黄 2.5Y5/2 粘質シルト(明赤褐 5YR5/6 地山小ブロック土少量含む)
32. 2.5Y5/3 粘質シルト(花崗岩風化土多く含む)
33. 2.5Y5/2 粘質シルト【地山】
34. 2.5Y6/4 粘質シルト【地山】
35. 5YR4/6 粘質シルト【地山】
36. 7.5Y8/1~明赤褐 5YR5/6 粘質シルト(花崗岩風化土多く含む)【地山】
37. 花崗岩風化土【地山】

図25 奥山1号墳墳丘断面図

第3節 墳丘と外部施設

墳丘 古墳は瘦せた尾根筋の頂部に築かれた円墳である。墳丘の高まりについては、確認調査の段階では全体が鬱蒼とした竹林であったため、まったく気づかなかったが、本調査の段階では竹が伐採され、周辺地形全体を見渡せるようになったことから、なんとか確認することができた。ただし、これも古墳があることを事前に知っていたからであり、古墳の存在を認識していなかったならば、おそらく見落としてしまう程度の高まりであった（図22、写真図版9-1）。

平成14年度に実施した確認調査のトレンチは、墳丘の西端を辛うじてかすめており、その時点では直径15m前後の円墳、もしくは造り出しが付随する円墳になるだろうと予想された。筈畑の造成や、里道の設置によって墳丘の東側から北側にかけて大きく削られているが、本調査の結果、墳丘の周りに周濠をめぐらす円墳であることが確認された。なお、造り出し部になるかもしれないと考えられた箇所は、石室の開口部であったことが判明した。この結果、奥山1号墳の規模は、墳丘裾で直径約18m、周濠まで含めると直径約25mとなることが明らかとなった。埴輪や葺石は確認されていない。

古墳が築かれた尾根上の層序は、前節で報告した寝屋南遺跡と基本的に同じで、下層に花崗岩の風化土があり、その上に明赤褐色粘質シルト、にぶい黄色シルトが堆積する。にぶい黄色シルトの上面は暗灰黄色に変色しており、嘗ての地表面であったことをうかがわせた。地山の小ブロック土を多く含む橙色粘質シルトの盛土は、このにぶい黄色シルトの上に盛られているが、後世の開発によってほとんどが削平されている。もっとも厚いところでも15~20cm程度しか残っていない。なお周濠や石室の掘方は、このにぶい黄色粘質シルト上面から掘り込まれている。

墳丘の南西側には、墳丘の輪郭を一部修正した箇所が認められる。本来ならば、地山に円を描くように周濠をめぐらせば、円い墳丘の輪郭が確定するが、なぜかその箇所は、地山が本来の計画ラインより

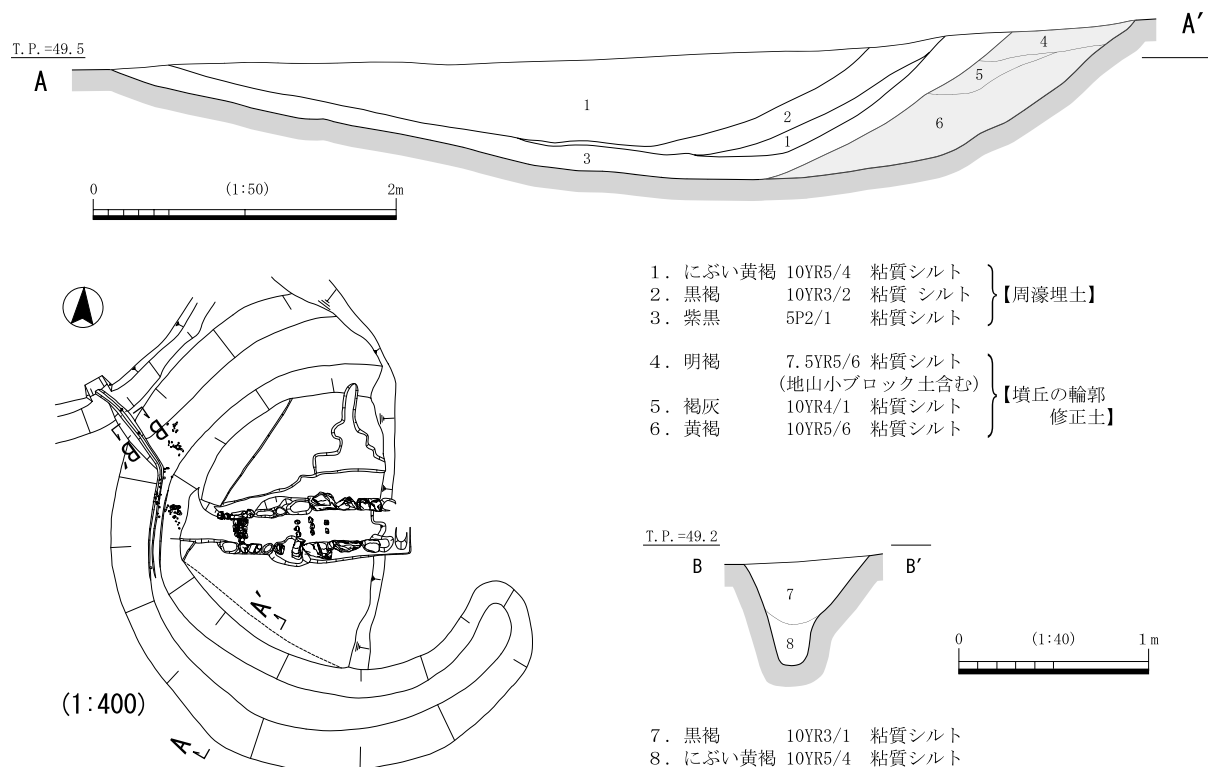


図26 周濠・排水溝断面図

も0.8mほど内側に入り込み、直線的となっている（図26の破線部A）。墳丘構築の際に誤って削りすぎたのか、あるいは構築途中で崩れたのか、理由は不明であるが、その部分には別の土をはり付けて輪郭の修正を行なっている。発掘調査の段階でも、誤ってこの土を取り除いてしまったところがあったが、断面観察によって墳形を修正した土であることが判明した。

周濠 里道や筥畑の造成によって北東側の一面が大きく削平されているが、そのほかの箇所では周濠は良好に残っていた。幅は墳丘の肩から計測して平均5mほどで、深さは周濠外側との差で、南側が約0.6m、北側が約0.5mを測る。底面の高さはほぼ水平で、標高48.4～48.6mである。周濠は墳丘の周りを全周せず、東側の一部が陸橋状に残る。ただしそれは石室が開口する側ではなく、奥壁側にあたっており、やや特異な形状といえる。周濠掘削後に埋めて築いたものではなく、当初から地山を掘り残したものである（図24）。

周濠内には、底全体にわたって紫黒色粘質シルトが平均15cmほど堆積するが、石室開口部付近はやや厚く30cm程度となる。これは周濠内の最初の堆積層が土壌化したものである。これより上層にはにぶい黄褐色シルト等が堆積する。紫黒色粘質シルトの下層、墳丘側には、部分的に地山ブロック土を含む黄褐色粘質土が見られるが、これは墳丘盛土が崩落したものと考えられる。周濠の西側、つまり石室開口部付近の紫黒色粘質シルトからは破砕した多量の土器が出土している。

排水溝 周濠の西側には尾根斜面に向かって排水溝が設けられている。周濠の排水を目的とするもので、石室開口部側の周濠底から「く」の字状に曲がって北西方向に向かってのびている。延長は約11.5mである。幅は周濠底では約0.3mであるが、周濠外側のもっとも広がっている箇所では約0.8mを測る。深さはもっとも深い箇所では約0.55mである。埋土は下層がにぶい黄褐色粘質シルト、上層が黒褐色粘質シルトで、下層からは土師器高坏や須恵器壺蓋などが出土している（図26）。

焼土坑 このほか石室開口部正面の周濠内から焼土坑を1基検出した（図27）。古墳に伴う遺構ではないがここで報告する。平面形は長辺0.57m、短辺0.5mの隅丸長方形を呈し、深さは10cmを測る。土坑内には人頭大の石が据えられている。これはもともと羨道の側壁、あるいは閉塞石に使われていたものと思われる。埋土は炭化物混じりの黒色シルトで、土坑の壁面は焼けて赤褐色に変色する。底面は被熱による変色は見られない。遺物が出土していないため、時期を特定することは難しいが、先に記した周濠の土壌化層上面で検出したことから、古墳築造より後世の遺構であるのは確実である。

古墳群に近接して、古代の焼土坑が検出される例がいくつも報告されているが、それらは火葬に伴う遺構ではないかとの指摘もある¹⁾。この焼土坑もそれらと特徴が酷似しており、同種の遺構であったと考えられるが、人骨等は出土していない。

註

- 1) 森本 徹 1991「火葬墓と火葬遺構－群集墳周辺にて確認される「焼土坑」の検討－」『大阪文化財研究』第2号、同 1992「火葬墓と火葬遺構2」『大阪文化財研究』第3号、で資料の集成と詳細な検討が行なわれている。

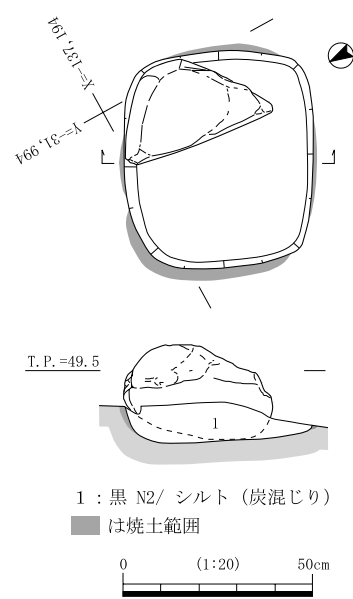


図27 焼土坑平面・断面図

第4節 埋葬施設

石室 埋葬施設は墳丘の中心に築かれた右片袖式の横穴式石室である（図29）。南側が開けた尾根上に立地しているにもかかわらず、石室は南には開口せず、真西に向かって開口することが特徴で、これによって、集落からの墓道が、古墳西側の尾根筋の頂部を通過して続いていたことが容易に推測できる。

石室の石材は後世の削平や攪乱によって大きく破壊、あるいは抜き取られ、大部分が失われている。奥壁や天井石もなく、側壁の基底部となる1段目が一部残っているにすぎないが、当古墳の石室に使用されていたものではないかと思われる花崗岩の石材が、すぐ東に接する府営寝屋川公園内にいくつか集められており、その中には天井石ではないかと思われるものも含まれている（写真10）。

奥壁は、里道によって完全に削平されているが、掘方のラインが明瞭に残っていたことと、その内側から花崗岩の粗い砂粒が表面に残る僅かな窪みを検出したことから、ほぼその位置を特定することができる。現状では玄室の大型石材が両壁に3石ずつ残っているが、本来は奥壁との間にさらに1石ずつ据えられていたものと考えられる。

袖部も、袖石が完全に抜きとられているが、その抜き取り痕跡からほぼ袖石の位置が特定できる。北側の側壁の奥から3番目までは、玄室内側のラインが直線で続くが、そのすぐ西側は、抜き取り穴がやや内側に入り込んだ状態で検出されており、そこが袖石の位置にあたと判断できる。また玄室と羨道の側壁内側を見通した場合に、南側の側壁は羨道から玄室までが一直線に通るが、北側の側壁は一直線には通らず、玄室側が一段広がっている。このことから、北側に袖のつく右片袖式の横穴式石室であったと判断できる。なお本書では、奥壁側から羨道方向を見て右側を右側壁、左側を左側壁と呼ぶこととする。

これらによって、玄室の規模は長さ約4.4m、幅は袖部寄りで1.8m、奥壁寄りで1.65m、羨道の規模は長さ約4.95m、幅は測点によって若干異なるが1.35～1.45mの、全長約9.35mの横穴式石室に復原できる。この場合、墳丘の中心がほぼ玄室の中心となり、典型的な後期古墳の特徴を示すこととなる。なお、羨門より外側には右側壁側で約1m、左側壁側で約2mの石積みの壁をもたない素掘りの墓道がのびている。

石室に使用された石材は、玄室は1×1.5mもある大型の花崗岩が主で、その隙間には破碎した斑れい岩が使われている。これに対し、羨道は大きなものでも0.5×0.8m程度の中型の斑れい岩が主に用いられている。個々の重さについては、全てを計測していないが、石材の移動の際に使用したクレーン車の表示によると、左側壁の奥から3番目の石材がもっとも重く2.0トン、右側壁の奥から3番目の石材がそれに次ぐ1.9トンであった。それぞれの岩石種については第7節でさらに詳しく報告する。

また玄室の右側壁と左側壁とでは石材の形にも若干の違いがみられる。右側壁には上面が平らな石材が据えられているのに対して、左側壁には上面が尖った石材が据えられている。この違いが2段目以降の積み方に影響を与えていたのかは不明であるが、左側壁は右側壁に比べて若干持ち送りの角度がきつく積まれていたという可能性も考えておきたい。

石室の掘方は、後世の攪乱によって一部乱れてはいるが、玄室部で幅4.5～4.7m、羨道部で幅2.6～3.1mを測る。深さは約0.7mで、玄室基底部の石材の頭が僅かに出る程度である。石室はこの掘方の南に偏った位置に組まれており、南壁、つまり左側壁は掘方の壁に接するように1段目を並べているのに対して、右側壁は掘方の壁から約1.5mも間隔をあけて据えられている。これは、石室の構築が左側壁から行なわれたことを端的に示している。



写真11 石室掘方全景

人々が入り出していたことがうかがえるが、その時期については遺物が出土していないため特定はできない。石室正面の周濠内に築かれた焼土坑との関連も考えておきたい。

石室の構築方法を確認するため、全ての石材を移動した後に、掘方底まで完全な調査を行なった。床面を外した段階で、石室構築に伴う排水施設等が検出されるのではと期待したが、そのような遺構は全く確認できなかった（写真11）。また、石材を据えるための掘り込み等の地山の加工痕跡も見られなかった。これにより、当古墳の石室は掘方を掘削した後、直ちに石材を配置していたことが明らかとなった。

また、左側壁の袖部対面にあたる箇所石材は、後世の攪乱によって動かされ、内側にはみ出すような状態で横転していたが、その表面には、石材を加工したときの楔の痕跡が数箇所ずつ残されていた（写真図版15-3～5）。同様の楔痕跡は、左側壁の奥から3番目の石材にも残っており、また、右側壁袖部付近の抜き取り穴の中には、破碎され細くなった花崗岩片が多数散乱しているものもあった（写真図版15-2）。このことから、古墳の石材を転用するために、後世に石室上で石材の加工が行なわれていたことがうかがえる。

棺台 玄門部の床面には、棺台と考えられる石材が設置されている（図28）。人頭大の石材8石を、約0.5～0.6mの間隔をあけて3列に配置したもので、玄室側から2石、3石、3石の順に並ぶ。長さ1.7m前後の棺をちょうど置くことができる規模である。各々の石材は平坦な面を上にして使い、その上面高がほぼ水平になるように据えられている。ただし、床面には石材を据える際の掘方がないことから、石を

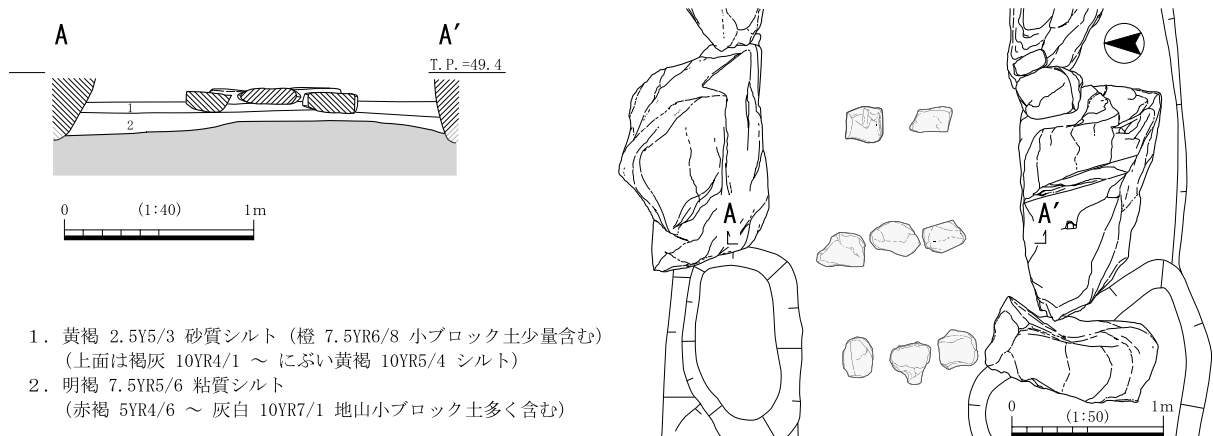


図28 棺台平面・断面図

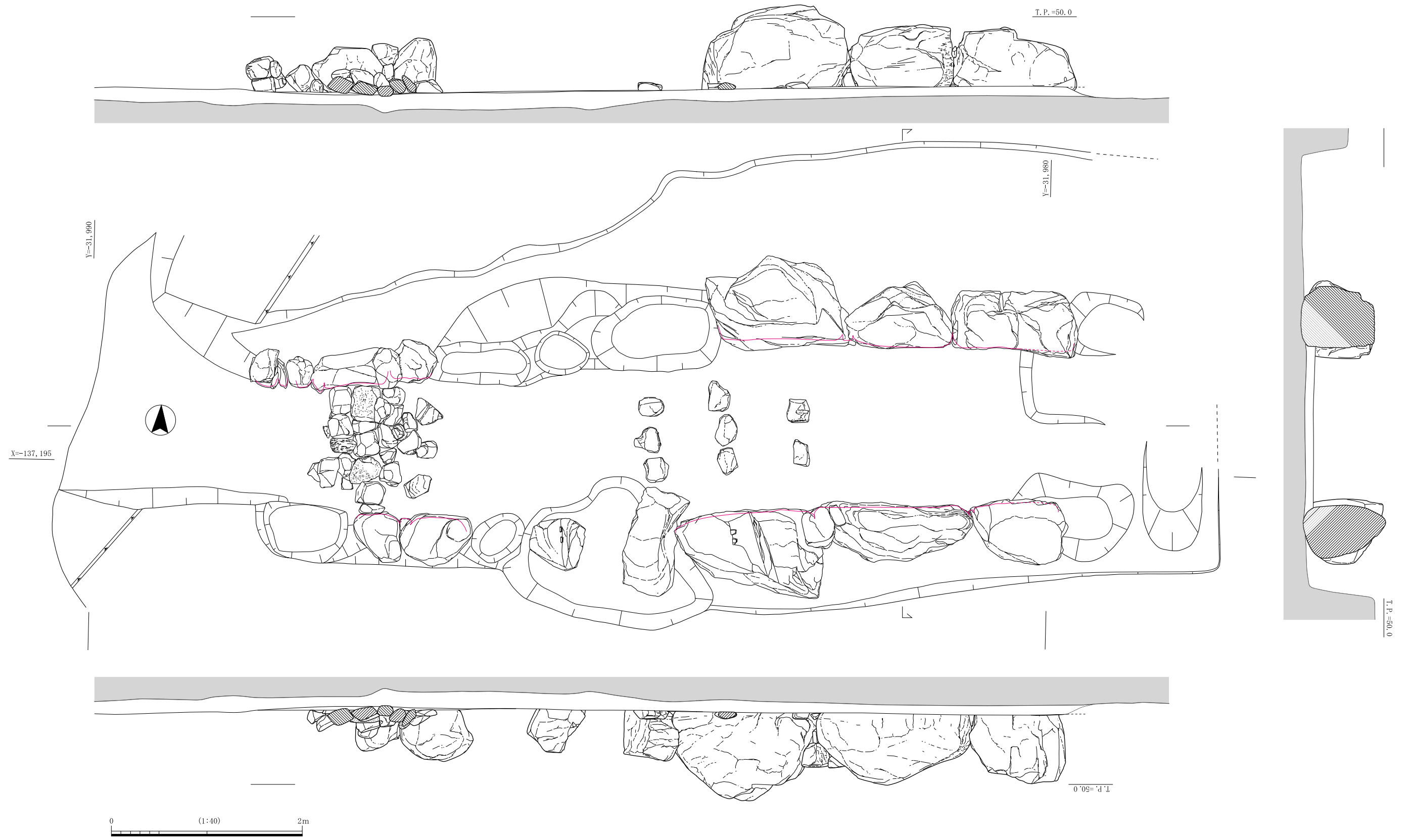


图29 奥山1号墳横穴式石室平面・立面图

安定させる程度の僅かな掘り込みによって据えていたと考えられる。

玄門部分に位置していることから、追葬の際に設置された棺台であったと考えられる。なおこの棺台石材に接するように、6点の耳環が出土している。

閉塞石 石室開口部から奥へ2.5mほど入った箇所に閉塞石が積まれている。その上部はほとんど取り外され、一部は崩れた状態であったが、最下段は構築時の状態が良好に残っていた。原位置を保っていない石材を取り除くと、人頭大の石材が、羨道の両側壁の間に隙間なく、整然と3列に並べられていた（写真図版12-2）。

なおこの最下段の石列の下からは、僅かではあるが土器片が出土している。初葬時の墓前祭祀に用いられた土器であったとも考えられるが、石室床面や周濠内出土の土器と接合することから、閉塞石は追葬の際に積み直されたものであった可能性が高い。

第5節 遺物の出土状況

後世の削平や攪乱等により石室は大きく破壊されていたが、石室の床面や周濠内には多くの遺物が残されていた。以下簡単にその出土状況を記しておく（図30～33）。

石室内 遺物は主に玄室の奥壁周辺、玄門部に設けられた棺台周辺、羨道部から閉塞石周辺の3箇所に分かれて出土している（図30・31）。

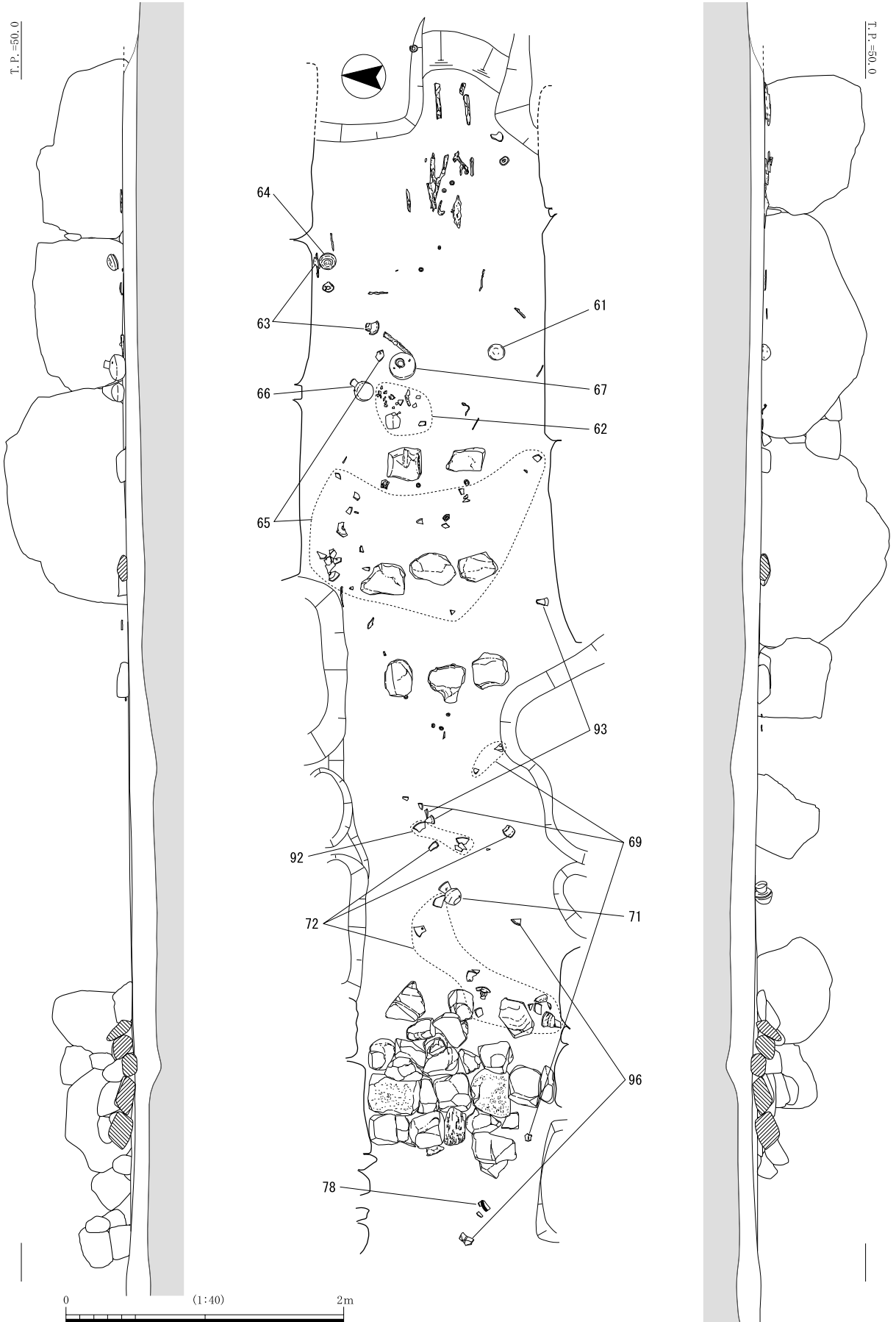
まず玄室の奥壁周辺で特筆するものとして、人骨の出土がある。石室中軸線よりも左側壁側に偏った位置で検出されたもので、一見すると、棺の中に頭を羨道側に向けてきちんと納められているような状態であった。しかし大阪市立大学医学部の安部みき子先生に現地にて観察していただいた結果、①大腿骨、あるいは脛骨が少なくとも2体分はある。②骨の位置関係が乱れており、自然に骨化した状態ではない。おそらく片付けられたものであろう。とのことであった。どうも追葬の際に次の棺を安置するためのスペースを確保しようと、邪魔になった人骨、あるいは棺を片側に寄せ集めたもののようなものである。まとめられた骨のうち、1体分については原位置を保っている可能性があるが、それ以外の骨については確実に原位置を動いていることになる。なお、人骨は風化が著しく、性別・年齢等を鑑定できるような状態ではなく、歯も残っていなかった。

この人骨の周りからは、耳環が5点のほか、管玉や武器・馬具が出土している。土器はまったくない。上記のとおり、人骨1体分は原位置のままであったとした場合、耳環のうちの一对についても原位置を保っていたことになるが、それ以外の遺物はほとんど遺骸を移動した際に同時に動いていると理解することができる。

耳環5点のうち15～17の3点は人骨の間から、14・18の2点は人骨のやや西側から見つかっている。このうち14と15、16と17がセット関係になることが、寸法や被覆材の種類から確認できる。17は骨片が上へのった状態で出土していることから、原位置を保っていると考えられる遺骸が身につけていたものであった可能性がある。18についてはセット関係になるものが発見されていない。おそらく奥壁部が破壊された際に失われたと考えられる。また、18の北側約15cmの地点からは管玉（1）が1点出土している。出土した玉類のうち、唯一出土位置が特定できるものである。

馬具は責金具（56）と用途不明の環状金具（59）が、武器は両頭金具と呼ばれる弓の飾り金具（23）と鉄鏃（32）がそれぞれ1点ずつ出土している。責金具（56）は耳環3点の近くから、骨と接するよう

T.P.=50.0



T.P.=50.0

图30 土器出土状况图

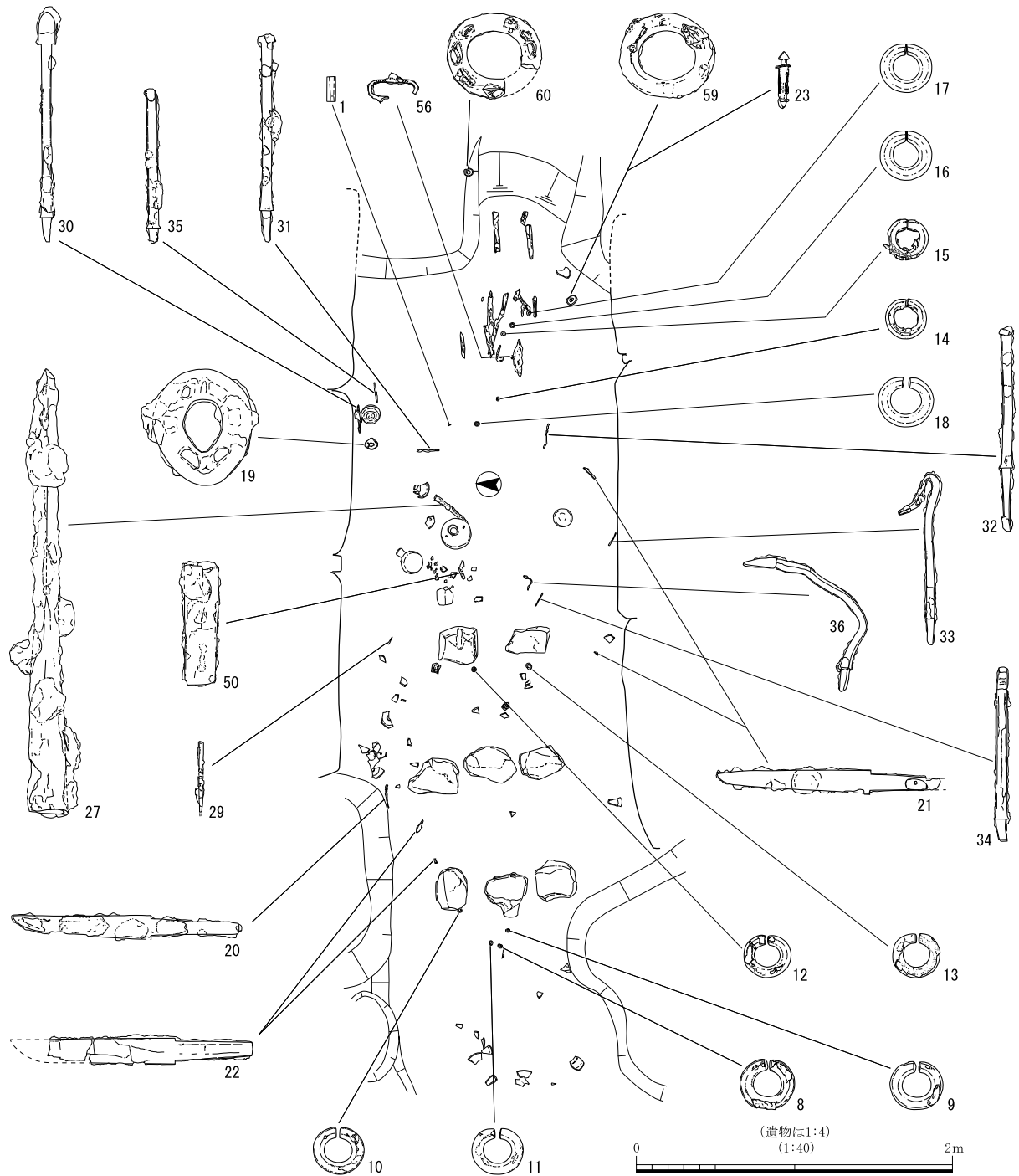


図31 金属製品出土状況図

に発見された。環状の馬具（59）は人骨と左側壁との間にあり、環の内に両頭金具（23）が入り込んだ状態で見つかった。鉄鎌（32）は長頸鎌で、人骨の西側やや隔てた位置で検出された。

奥壁部は、里道設置の際に大きく削平され、石材も抜き取られているが、その抜き取り穴からは馬具や鉄鎌片が多く出土している。爪形金具と呼ばれる革帯金具2点（54・55）・貴金具小片2点（57・58）・素環鏡板1点（53）・用途不明の環状金具1点（60）のほか、長頸鎌の小片が8点（38～45）含まれていた。須恵器碗小片（79）も1点出土しているが、やはり土器類は少ない。

抜き取り穴から出土したこれらの遺物は、本来奥壁際に置かれていたものであったと考えられる。石材を抜き取る際に入り込んだものであろう。

玄門部に設けられた棺台の周辺からも、多くの遺物がまとまって出土している。耳環が6点のほか、武器や工具類、また完形の土器も残されていた。これらの多くは追葬に伴うもので、ほぼ原位置を保っていると考えられる。

耳環6点のうち12・13の2点は、棺台のもっとも玄室寄りに設置された2石の羨道側に接するように残っていた。両者は約35cm隔てて、あたかも耳に装着されたまま遺骸だけが朽ちたような状態で並んでいた。頭部がこの位置にあったことは明らかであり、これによって棺台上には棺が1棺、頭部を奥壁側に向けて安置されていたことが復原できる。これ以外の耳環4点（8～11）は、棺台の手前、羨道側に、棺台と接するようにまとまって残されていた。4点とも床面からはやや浮いている。このうち左側壁側の8と9、右側壁側の10と11がセット関係になることが、それぞれの寸法や重さから確認できた。これらもまた、ここに遺骸の頭部が位置していたことを示すものであり、これによって、棺台手前の羨道部に、棺台と接するように棺が2棺、頭部を奥壁側に向け置かれていたことが復原できる。

刀の刀身は残っていないが、鐔（19）が1点、棺台から奥壁側にやや隔てた右側壁際で見ついている。この地点にまとまるように、長頸の鉄鏃3点（30・31・35）のほか、完形の須恵器の短頸壺（64）と壺蓋片（63）が出土している。この2点の土器はともにやや床面から浮いた状態で、かつ64は逆位であった。これらのまとまりと棺台との中間にあたる棺台の奥やや右側壁寄りには、さらに多くの完形の遺物が集中している。鉄製品には銚（27）と鉄斧（50）が含まれている。銚（27）は先端を左側壁側やや羨道方向に向け転倒した状態で見ついている。柄が付く側を延長すると、ちょうど先述した鐔の方向に向かうが、右側壁との間隔は65cm程しかないので、石室内に立てかけられていたものと思われるが、その位置や状態の復原は難しい。なお石突は見つからない。土器には完形の須恵器提瓶（66）・平瓶（67）のほか、壺蓋（63）・土師器椀（62）がある。壺蓋（63）は完形に近い破片で、先述した右側壁際の破片と接合して完形となる。提瓶（66）は転倒し、平瓶（67）は床面上に正位で据わっていた。土師器椀（62）は粉々に割れていた。このほか、須恵器提瓶（65）の細片が袖部付近に散乱しているが、その一片はやや離れ銚に近接して見ついている。

これらと近接して棺台の後方からは、長頸鏃4点（29・33・34・36）と完形の土師器椀（61）が出土している。椀（61）は床面直上に逆位で見つかった。

刀子は3点（20～22）出土しているが、そのうちの20と22の2点は袖石の抜き取り穴の付近で、21は左側壁際の土師器椀（61）の近くで見ついている。21と22については破片の一部が離れた位置からも発見されている。

なお、床面直上の堆積層を篩いにかけて、遺物の再確認を行なった結果、鉄鏃片3点（46～48）・両頭金具3点（24～26）のほか、ガラス玉（2・3）・白玉（4～7）などの玉類が確認された。玉類は石室床面から合計7点が出土したことになるが、先に記した管玉（1）以外は、その位置を特定できない。

棺台手前の羨道部からは、あまり多くの遺物が出土していない。土器は須恵器長頸壺（71）の完形品が1点あるが、ほかには細片化しており数も少ない。長頸壺（71）は羨道のほぼ中央床面直上に横転していたが、先述したとおり、この位置には棺が置かれていたと推定できるため、本来の位置にあったものではないと判断できる。このほか、この壺の周囲や閉塞石の周辺には、須恵器の高杯蓋（69）・無蓋高杯（92・93）・有蓋高杯（96）・提瓶（70・72・101）などの破片が散乱していた。

また、閉塞石の隙間や下面からも須恵器の杯蓋（68）・高杯蓋（69）・無蓋高杯（92・93）・有蓋高杯（96）・提瓶（101）などの破片が出土している（写真12）。初葬時の墓前祭祀に用いられた土器であった

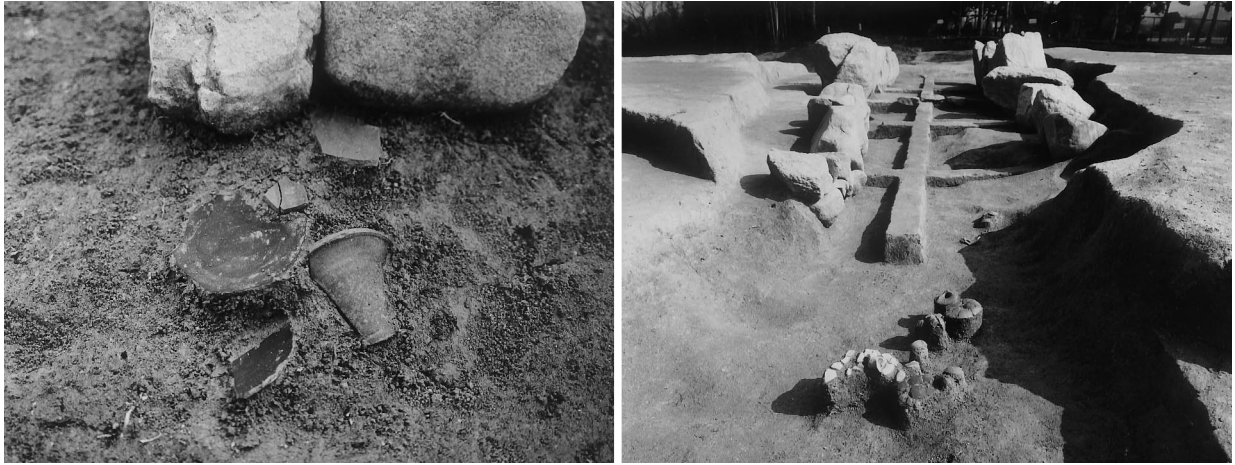


写真12 土器出土状況 (左：閉塞石の下 右：墓道床面下)

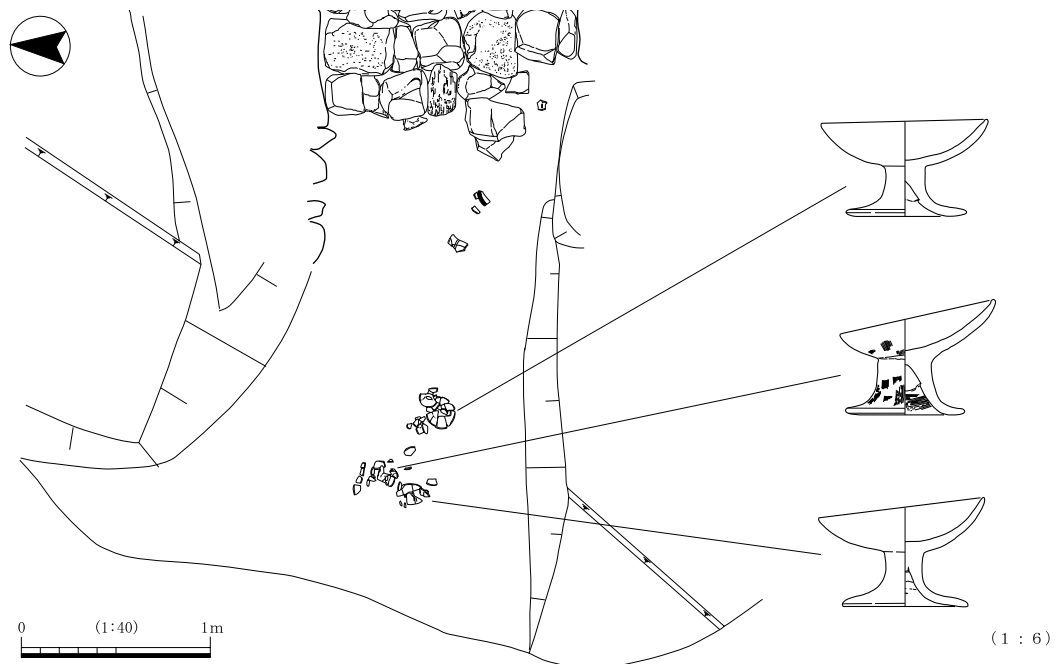


図32 墓道床面下土器出土状況図

可能性もあるが、高杯蓋(69)は羨道部床面出土の破片と、無蓋高杯(92・93)、有蓋高杯(96)は羨道部床面や周濠内出土の破片と、提瓶(101)は周濠や排水溝出土の破片とそれぞれ接合することから、この閉塞石は追葬の際に積み直されたものであったと推測される。崩れた閉塞石の下からは、長頸鏃(37)も1点出土している。

なお、上記有蓋高杯(96)の脚部片のほか、須恵器無蓋高杯片(78)・甕片(77)・土師器高杯3点(73・74・75)が羨門から墓道にかけての床面下から出土している(図32、写真12)。墓道部の床面には細砂混じりののびい褐色砂質シルトが約15cmの厚さで盛られており、土師器高杯3点はその土層の上層につぶれた状態で埋まっていた。須恵器片については、有蓋高杯(96)のように羨道部床面や周濠内出土の破片と接合するものもあることから、石室構築時に意図的に埋められたものではないことがわかる。小片でもあることから、おそらく破碎した際に踏まれるなどして、床面下に埋没してしまったものと考えられる。土師器高杯3点についても、地山の上面に据えられていたものではなく、浮いた状態で出土していたことから、石室構築時に埋納されたものであったのかの判断が難しい。杯蓋(76)は墓道部の

埋土からの出土である。

このほか石室の床面下からサヌカイトの剥片が2点（120・121）と、左側壁の裏込め土中から石鏃1点（116）が出土している。

周濠内 石室が開口する西側を中心に多量の土器が出土している（図33）。北側からも僅かに出土しているが、周濠の南側や東側からはまったく出土していない。

出土した土器の大半は、周濠の底面に溜まった土壌化層である紫黒色粘質シルト（遺物取り上げ名は黒褐色土・周溝最下層など）の中に含まれていた。この紫黒色粘質シルトの下層には、部分的に墳丘盛土が崩落したと考えられる黄褐色粘質土（遺物取り上げ名は黄褐色土など）がみられるが、この土層中からも僅かに出土している。原位置を保っているものはなく、石室内から外へと掻き出されたような状態であった（巻頭図版）。どれも破碎され、細片化している。須恵器が圧倒的に多く、中でも高杯が多い。須恵器高杯（94・95）は、羨道部の石材抜き取り穴出土の破片とも接合した。開口部にもっとも近い箇所には須恵器大甕（106）の破片がまとまっていたが、もう一つの大甕（107）は主に周濠北側の黄褐色土中から出土している。周濠から出土したこれらの土器の中には、開口部で執り行われた墓前の祭祀に使われたものも含まれていると思われるが、石室内に副葬されたものとの判別は難しい。

土器以外の遺物としては、長頸鏃（49）と三角形鏃（28）がそれぞれ黒褐色土中から、鉈2点（51・52）が周濠最下層から出土している。鉈2点は重なった状態であった。このほかサヌカイトの錐（122）や剥片（写真図版24）も出土している。

土器の出土量に比べ、鉄製品は僅か4点と非常に少ない。追葬の際には、高杯などの目立つ土器のみが片付けられた可能性が高い。

排水溝 下層に堆積するにぶい黄褐色粘質シルトの上位から、土師器高杯（113）と完形の須恵器壺蓋（114）、提瓶（101）・甕（115）の小片が出土している。提瓶（101）は閉塞石の下から見つかった破片と、甕（115）は周濠内出土の破片と接合する。壺蓋（114）はおそらく周濠内出土の台付長頸壺（105）とセットになるものと考えられ、これらによって、この排水溝は石室構築時だけのものではなく、石室完成後も機能していたものであったことがわかる。



図33 周濠内土器出土状況

第6節 遺物

石室の床面や周濠内からは多くの遺物が出土しており、その総数は130点以上に及ぶ。内訳は表1のとおりである。

表1 出土遺物一覧表

石室	石・ガラス製品	装身具	管玉（1点）	1
			ガラス玉（2点）	2・3
			白玉（4点）	4～7
	金属製品	装身具	耳環（11点）	8～18
			武器	鐔（1点）
		刀子（3点）		20～22
		銚（1点）		27
		両頭金具（4点）		23～26
		鉄鎌（20点）		29～48
		工具		鉄斧（1点）
		馬具	素環鏡板（1点）	53
			爪形金具（2点）	54・55
			責金具（3点）	56～58
	用途不明環状金具（2点）		59・60	
	土器	土師器	椀（2点）	61・62
			高杯（3点）	73～75
		須恵器	杯蓋（2点）	68・76
			高杯蓋（1点）	69
			無蓋高杯（1点）	78
			椀（1点）	79
壺蓋（1点）			63	
短頸壺（1点）			64	
長頸壺（1点）			71	
提瓶（4点）			65・66・70・72	
平瓶（1点）			67	
甕（1点）			77	
石室床面下			石製品	剥片
石室掘方	石製品	武器	石鎌（1点）	116
墳丘	石製品	剥片	剥片（3点）	117～119
周濠	金属製品	武器	鉄鎌（2点）	28・49
			工具	鉈（2点）
	土器	土師器	高杯（3点）	109～111
			鉢（1点）	108
		須恵器	高杯蓋（5点）	80～84
			有蓋高杯（10点）	85～90・95～98
			無蓋高杯（4点）	91～94
			短頸壺（2点）	103・104
			長頸壺（1点）	99
			台付長頸壺（1点）	105
			提瓶（3点）	100～102
			甕（1点）	115
			甕（2点）	106・107
			石製品	剥片
排水溝	土器	土師器	高杯（1点）	113
		須恵器	壺蓋（1点）	114
その他	土器	須恵器	無蓋高杯（1点）	112
	石製品	剥片	剥片（4点）	

1. 装身具 (図34・35、表2、写真14、写真図版16)

管玉 玄室床面から1の1点のみが出土した。緑色凝灰岩製で、直径5.4mm、長さ15.7mmを測る。両側穿孔により製作されており、孔径は片側が3.0mm、もう片側が2.0mmである。

ガラス玉 2点(2・3)が出土した。2は丸玉で、3は粟玉である。2は青紺色で、直径9.7mm、厚み8.0mm、孔径2.0mmを測る。片側の小口が渦を巻いたような状態で固まっていることから、芯棒に巻きつけて製作されたものであったと推定される。3は赤褐色で、直径3.0mm、厚み1.5mm、孔径1.0mmを測る。横断面の形はきれいな円形ではなく、稜が取れた多角形を呈する。

白玉 4点(4～7)が出土した。いずれも滑石製である。4・6はともに直径6.5mmで、片面が欠損する。5は直径6.8mm、厚み4.9mm、7は直径6.5mm、厚み3.3mmを測る。4点とも側面は研磨されておらず、縦方向の削りの痕跡が明瞭に残る。

耳環 石室床面から11点(8～18)が出土した。寸法や被覆材の種類から8と9、10と11、12と13、14と15、16と17が一对であったと推定できる。いずれも中実の銅芯で、14・15のみ金の薄板を被せている。15は床面と接していた側が腐食し、被覆材が捲れ上がっている。16・17は床面から取り上げた時点では表面に鍍金が厚く付着し、被覆材がまったく確認できなかったが、表面のクリーニングによって、銀色の当時の輝きを取り戻した。この2点は明らかに塗銀である。開き部にはまったく隙間がなく完全に閉じており、装着方法に疑問が残る。8～11は表面塗金であるが、銀色に近くすんだ金色を呈する。12・13は被覆材が完全に腐食し、銅芯のみとなっている。断面形状はいずれもほぼ円形である。それぞれの寸法や重さ、被覆材の種類については表2に示したとおりである。

2. 武器 (図36・37、表3、写真13、写真図版16～18)

鐔 1点(19)が出土した。6箇所に透かし孔をもつ六窓鐔であるが、表面には鍍金の塊が付着しており、透かし孔の一部には完全に埋まっているものもある。倒卵形で、縦7.4cm、横6.2cm、厚さ0.5～0.6cmを測る。内孔は縦3.3cm、横2.4cmである。側面にのみ象嵌を施す耳象嵌鐔で、紋様は二重半円を天地交互にして並べたものである。分析はしていないが、おそらく銀象嵌と思われる。

刀子 本書では武器として分類した。3点(20～22)が出土した。20は完形品である。両関で、身部長8.8cm、茎部長5.6cmを測る。身部最大幅は関部で1.5cm、厚さは0.5cmである。目釘孔はない。茎部には木質が残り、身部鋒側には漆と思われる黒色の皮膜が付着する。21は茎の端部を僅かに欠くが、ほぼ完形品である。両関で、身部長9.7cm、茎部は残存長4.4cmを測る。身部最大幅は関部で1.5cm、厚さは0.5cmである。茎部に目釘状の細い突起があるが、X線写真から目釘でないと判断した。鋒が僅かに折れ曲がる。茎部には木質が残る。22は鋒と茎端を欠くが、身部長約10.5cmに復原できる。茎部の残存長は4.9cmで、身部最大幅は関部で1.7cm、厚さは0.55cmを測り、20・21に比べやや大ぶりである。目釘孔はない。身部は薄い板状に3枚に剥離しており、鋼を挟むようにして造られた鍛造品であったことがよくわかる。表面には草、あるいは漆と思われる皮膜が付着する。

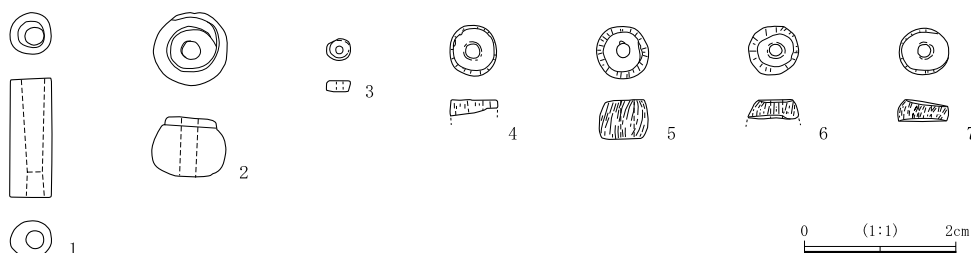


図34 玉類実測図

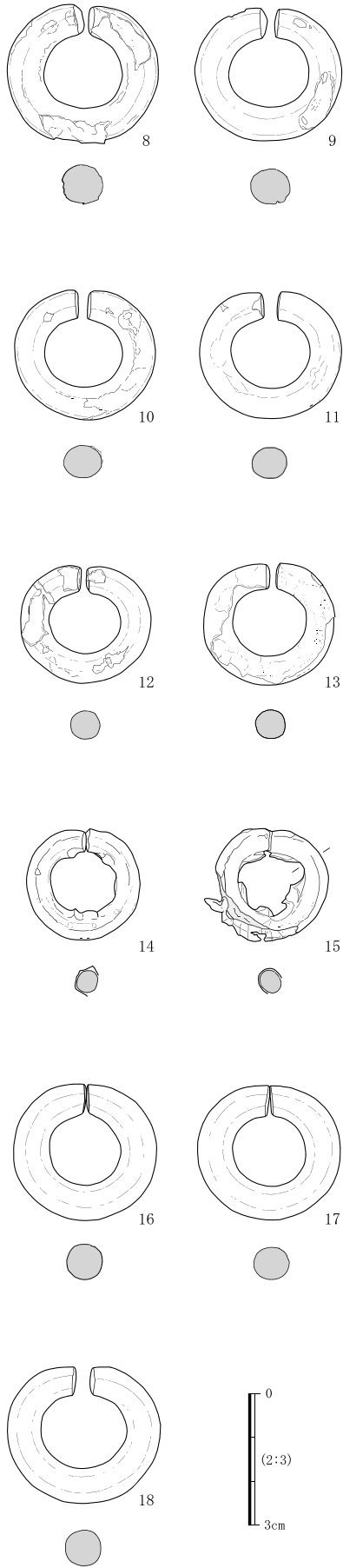
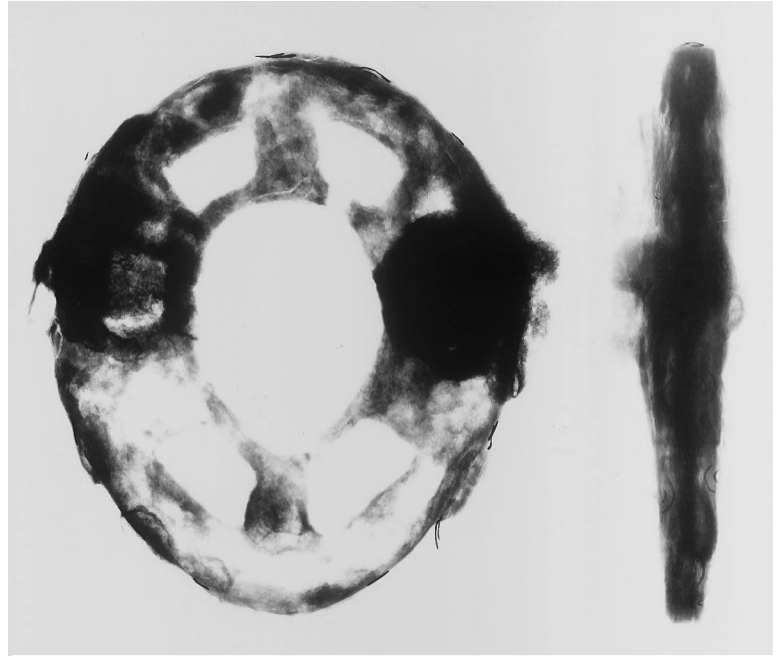


図35 耳環実測図



上：鐸 (19)

下：両頭金具 (24)

写真13 遺物X線写真

鉄銚 1点(27)が出土した。身部の断面形が正三角形を呈する三角穂式の銚である。袋部は円筒袋で、端部は切込みを入れない直基式と呼ばれる形状である。全長28.0cmで、身部長14.6cm、袋部長は13.4cmを測る。身部幅は関部で1.8cm、袋端部の内径は約2.5cmである。袋部下端には目釘が、やや下方に向けて斜めに打ち込まれている。釘の断面形は一辺約0.3cmの方形である。

両頭金具 鉄製の弓の飾り金具である。本来は弭に近い位置に、弓幹を貫通するように埋め込まれていたものと推定される。4点(23~26)が出土しているが、弓の本体が出土していないため、^{ゆはず}末弭・^{うらはず}本弭の両側に2点ずつ付けられていたのか、^{もとはず}末弭側だけに4点付けられていたのかなどについては明らかでない。その構造は、両端が花卉状に開く筒状に巻かれた金具の中に、直径約0.35cmの芯棒を通し、その両端(頭)を三角形に潰したものである。その両頭部は同方向には潰さず、片側を縦に潰した場合は、もう片側は横方向に潰している。また片側の頭部は整った三角形であるが、もう片側はやや形の崩れた三角形となっている。筒状の金具の両端にみられる花卉状の突起(花卉部)は、多くが欠損するが、どれも4弁の表現であったことが復原できる。それぞれの寸法は、23が長さ3.55cm、筒部径0.55cm、頭部の厚さ0.3cm、24は長さ3.5cm、筒部径0.65cm、頭部の厚さ0.3cm、25は長さ3.4cm、筒部径0.55cm、頭部の厚さ0.3cm、26は

表2 耳環計測表

挿図 番号	出土地点	材 質	径	断 面	開き部 (cm)	重さ (g)	状 態	備考
			(縦×横cm)	(幅×厚cm)				
9	羨道部 棺台手前	銅芯・鍍金	3.0×3.35	0.75×0.8	0.2	23.02	くすんだ金色を呈する。被覆材が一部はがれ、銅芯が緑青を吹く。片面は残り良好。	8と対
8	羨道部 棺台手前	銅芯・鍍金	3.1×3.45	0.8×0.9	0.15	23.34	くすんだ金色を呈する。風化が著しく、被覆材が一部はがれる。銅芯が緑青を吹く。	9と対
11	羨道部 棺台手前	銅芯・鍍金	2.85×3.2	0.7×0.75	0.25	15.96	くすんだ金色を呈する。風化が著しく、被覆材が一部はがれる。銅芯が緑青を吹く。	10と対
10	羨道部 棺台手前	銅芯・鍍金	2.9×3.2	0.7×0.75	0.25	18.4	くすんだ金色を呈する。被覆材が一部はがれ、銅芯は緑青を吹く	11と対
13	羨道部 棺台奥	銅芯	2.6×2.9	0.65×0.7	0.2	9.23	全体的に風化が著しい。被覆材は不明。	12と対
12	羨道部 棺台奥	銅芯	2.75×3.0	0.65×0.65	0.2	13.86	全体的に風化が著しい。被覆材は不明。	13と対
18	玄室 人骨周辺	銅芯・鍍金	3.1×3.5	0.8×0.85	0.3	28.77	良好に残存。くすんだ金色を呈し、表面は全体的に黒ずむ。	
14	玄室 人骨周辺	銅芯・金被せ	2.45×2.55	0.5×0.55*	0	6.04	片面は金箔が良好に残存。他の一面は金箔がはがれ、緑青が吹いた銅芯現れる。	15と対
15	玄室 人骨周辺	銅芯・金被せ	2.45×2.6	0.5×0.5*	0	5.05	片面は金箔が残るが裂けてめくり上がる。他の一面は金箔がはがれ、緑青が吹いた銅芯現れる。	14と対
16	玄室 人骨周辺	銅芯・鍍銀	3.0×3.3	0.8×0.8	0	28.04	良好に残存。	17と対
17	玄室 人骨周辺	銅芯・鍍銀	3.0×3.25	0.8×0.8	0	28.14	良好に残存。	16と対

*は残存厚を示す

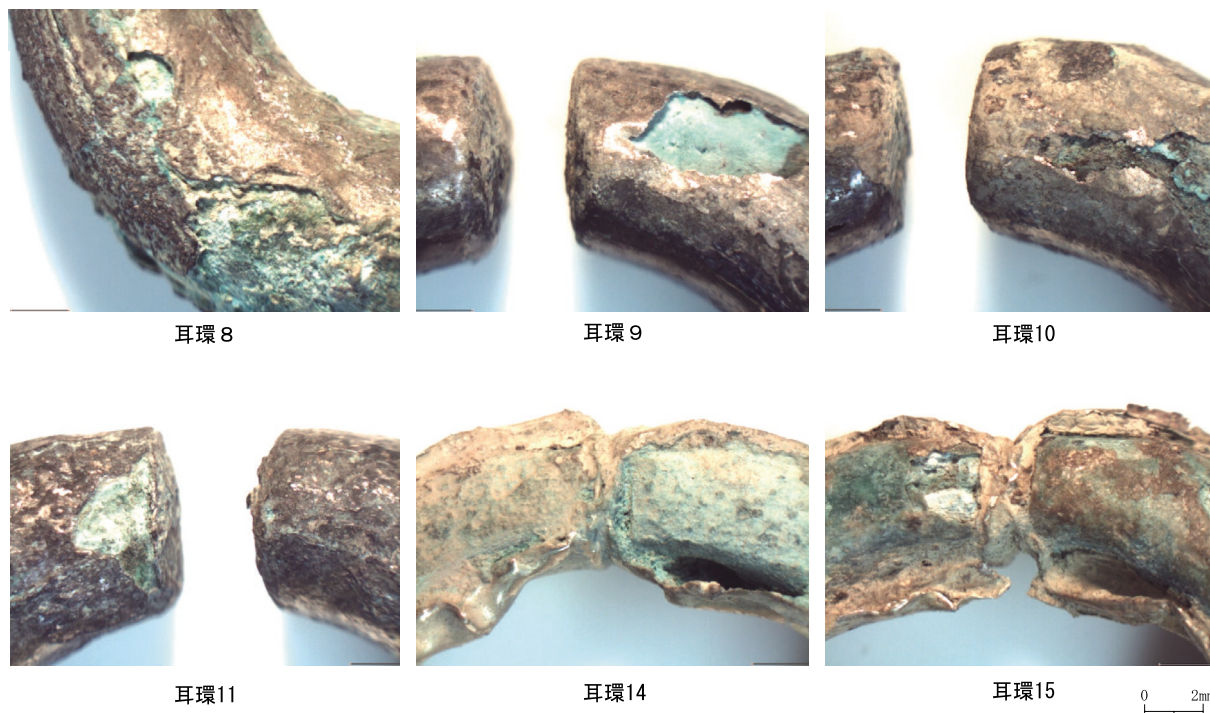


写真14 耳環拡大写真

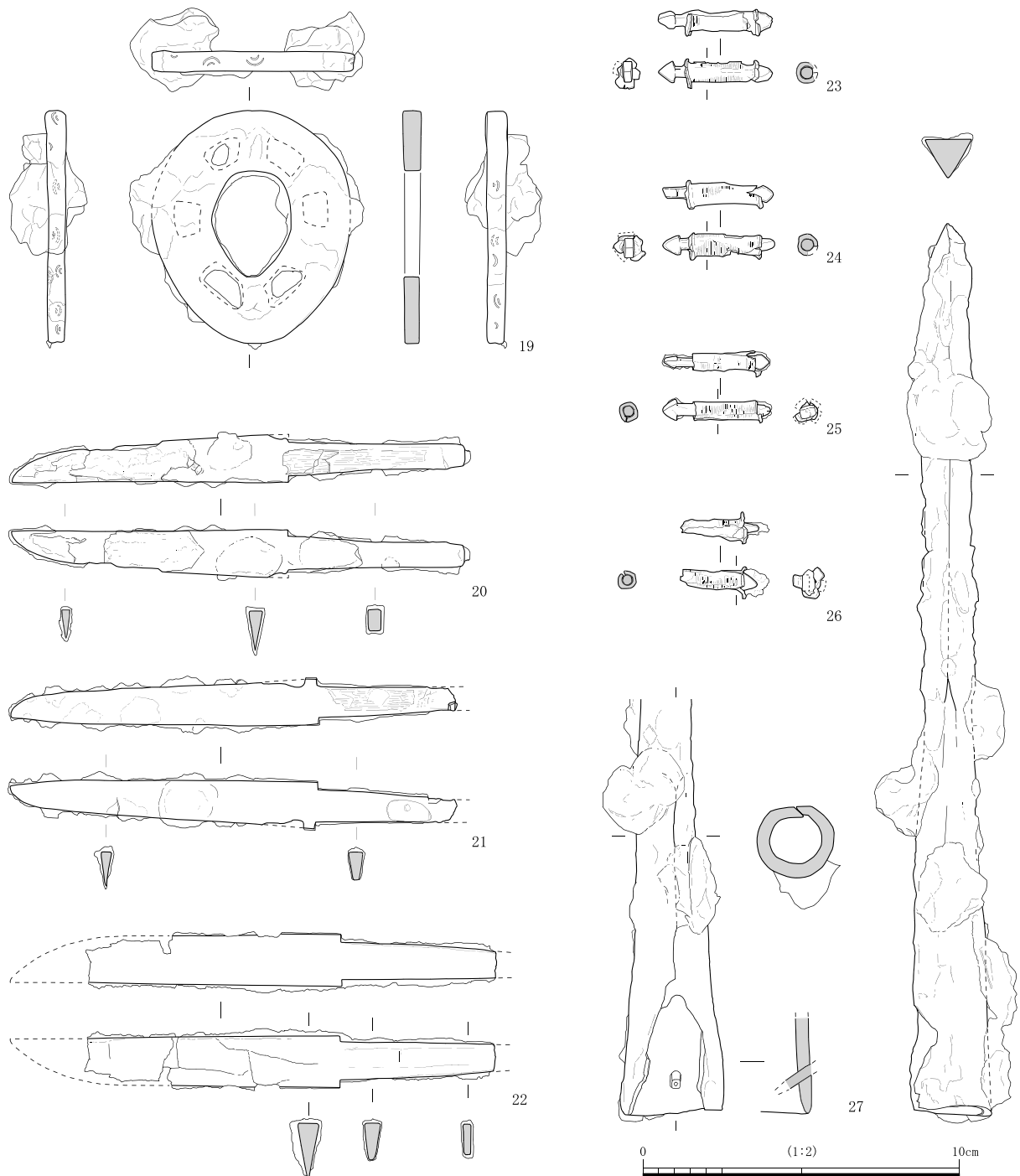


図36 武器類実測図

片側の頭部が欠損するが、残存長2.5cm、筒部径0.6cm、頭部の厚さ0.3cmである。4点ともに、筒部の外面には木質が僅かに残っている。なお、4点のいずれも花卉部間が2.0cmであり、これによって当古墳に副葬されていた弓の幹幅は約2.0cmであったことが復原できる。

鉄鏃 総数22点 (28～49) が出土した。このうち28のみ平根式の三角形鏃である。鏃身の長さ4.0cm、幅2.8cm、厚さ0.3cmを測る。鋒は鋭くなく、やや丸みをもつ。28以外はすべて細根式の長頸鏃である。このうち鏃身部が残るものは30・31・33・36・37・38・41・43・48・49の10点で、うち鏃身の形状をよくとどめているものは30・38・41・43・49の5点である。それらはいずれも片丸造で、鏃身関部を角関とする長三角形を呈する。鏃身長は2.0～2.1cmで、幅は1.1～1.15cmである。篋被(頸)部については30・31・

表3 鉄鏃計測表

挿図番号	形式	全長 (cm)	残存部位	鏃身長 (cm)	鏃身幅 (cm)	鏃被長 (cm)	鏃被幅 (cm)	茎長 (cm)	出土地点	特徴
28	平根・三角形	(4.5)	鏃身～鏃被	4.0	2.8	(0.5)	0.7	-	周濠黒褐色土	
29	細根・長頸	(5.3)	茎	-	-	-	-	(5.3)	玄室床面	2片に分かれる
30	細根・長頸	(14.45)	鏃身～茎	2.0	1.15	10.95	0.6	(1.5)	玄室床面	
31	細根・長頸	[12.9]	鏃身～茎	(0.3)	1.0	[10.6]	0.6	(2.0)	玄室床面	鏃被部が緩やかに曲がる
32	細根・長頸	[14.45]	鏃被～茎	-	-	[9.85]	0.6	[4.6]	玄室床面	鏃被・茎部が折れ曲がる
33	細根・長頸	[13.9]	鏃身～茎	[1.8]	1.2	[10.4]	0.7	(1.7)	玄室床面	鏃被部が折れ曲がる
34	細根・長頸	[11.5]	鏃被～茎	-	-	[10.0]	0.7	[1.5]	玄室床面	鏃被・茎部が折れ曲がる
35	細根・長頸	(9.8)	鏃被～茎	-	-	(8.85)	0.6	(0.95)	玄室床面	
36	細根・長頸	[13.35]	鏃身～茎	2.1	0.9	[9.75]	0.6	(1.5)	玄室床面	全体がねじ曲がる
37	細根・長頸	[15.2]	鏃身～茎	(1.7)	1.0	[11.1]	0.6	[2.4]	閉塞石の下	鏃被部が折れ曲がる
38	細根・長頸	(4.4)	鏃身～鏃被	2.0	1.1	(2.4)	0.6	-	奥壁部抜取穴	
39	細根・長頸	(2.3)	鏃被	-	-	(2.3)	0.7	-	奥壁部抜取穴	
40	細根・長頸	(1.6)	茎	-	-	-	-	(1.6)	奥壁部抜取穴	
41	細根・長頸	(3.85)	鏃身～鏃被	2.1	1.1	(1.75)	0.65	-	奥壁部抜取穴	
42	細根・長頸	(4.6)	鏃被～茎	-	-	(0.7)	0.65	(3.9)	奥壁部抜取穴	茎部やや太い
43	細根・長頸	(8.4)	鏃身～鏃被	2.1	1.1	(6.3)	0.6	-	奥壁部抜取穴	
44	細根・長頸	(2.25)	鏃被	-	-	(2.25)	0.6	-	奥壁部抜取穴	
45	細根・長頸	(14.25)	鏃被～茎	-	-	(10.85)	0.6	(3.4)	奥壁部抜取穴	
46	細根・長頸	(1.5)	茎	-	-	-	-	(1.5)	石室床面直上	
47	細根・長頸	(2.85)	茎	-	-	-	-	(2.85)	石室床面直上	
48	細根・長頸	(4.9)	鏃身～鏃被	(0.45)	(0.95)	(4.45)	0.7	-	石室床面直上	
49	細根・長頸	[10.1]	鏃身～鏃被	2.0	1.15	[8.1]	0.6	-	周濠黒褐色土	鏃被部が直角に折れ曲がる

() は残存長、[] は形状復原後の残存長を示す

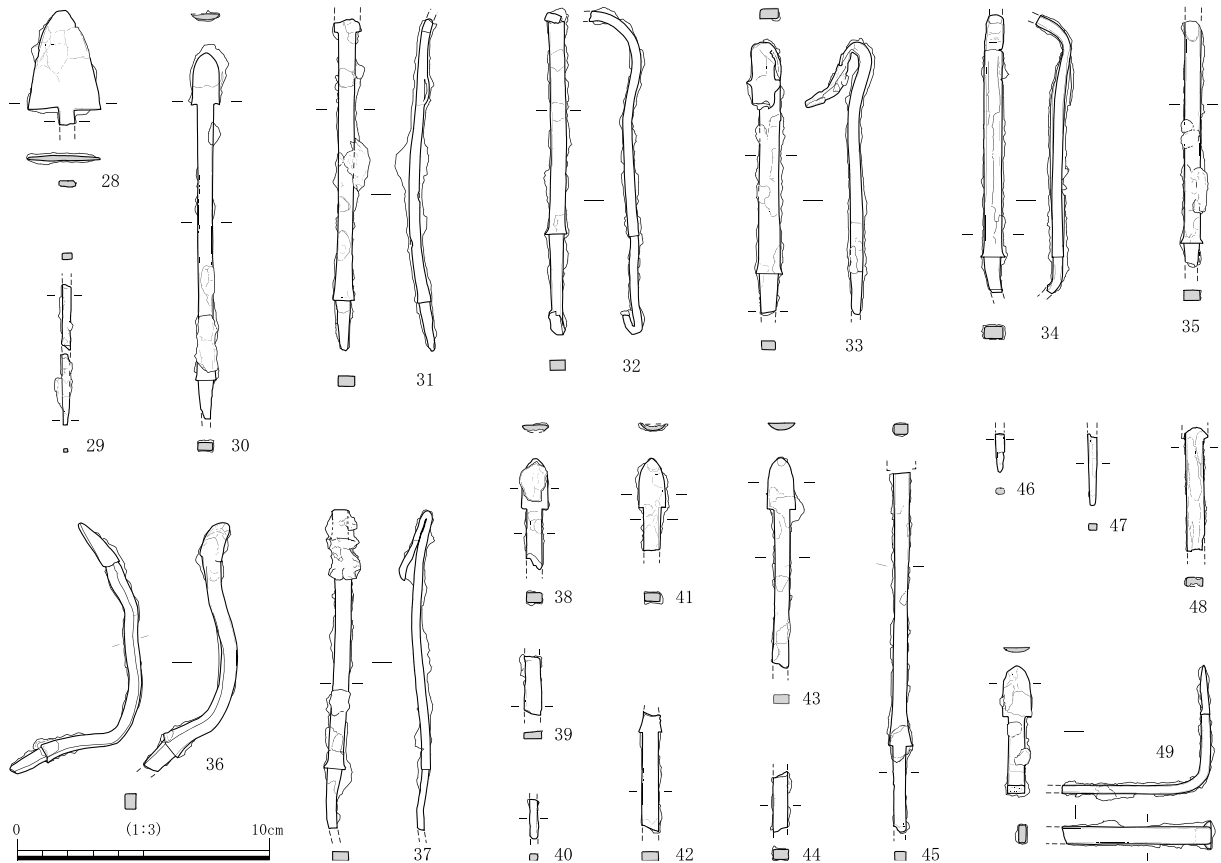


図37 鉄鏃実測図

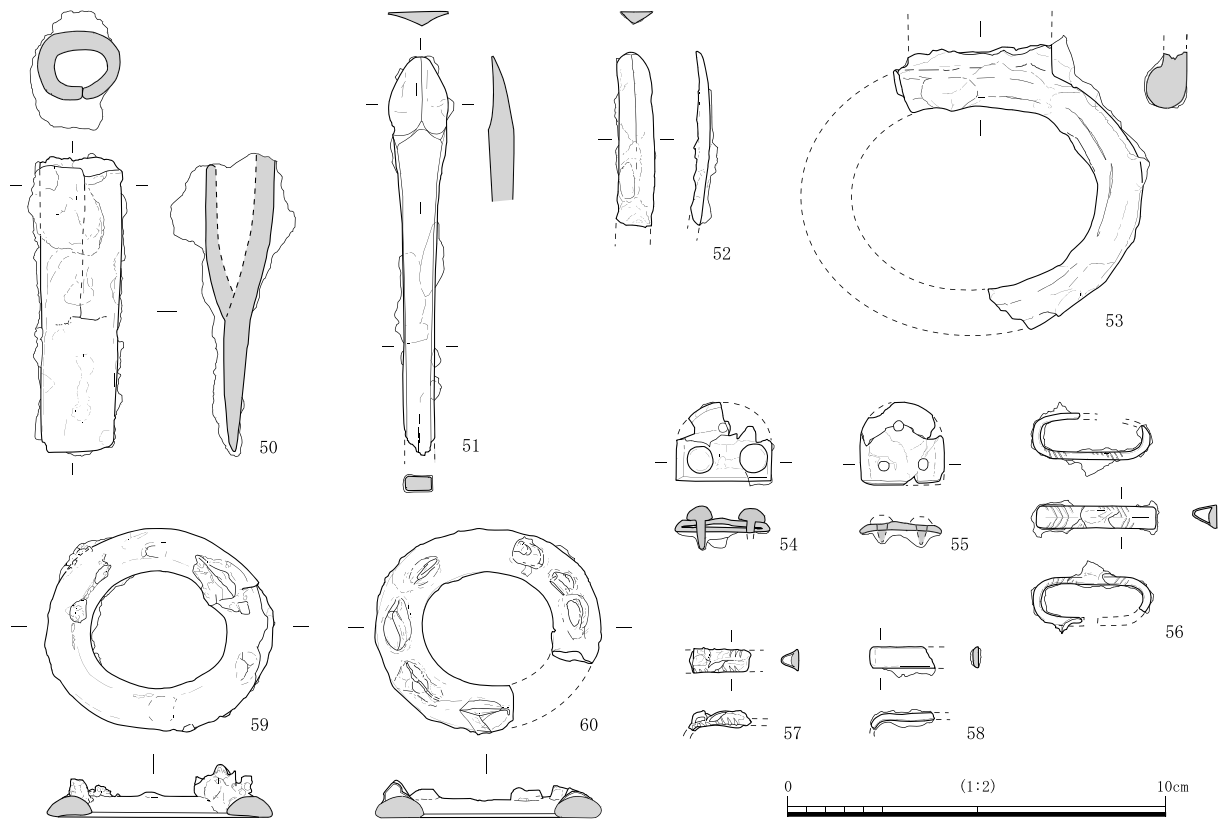


図38 工具類・馬具類実測図

37・45から、長さ10.6～11.1cmであったことがわかる。断面はどれも幅0.6～0.7cm、厚さ0.3～0.35cmの長方形である。関部が残っているものは30～37・42・45の10点で、うち30・31・42・45は台形関、32～37棘状関に近い台形関である。42は篋被から茎部にかけての破片と思われるが、茎部の幅が0.6cmのままで窄まらない。29・40・46・47は茎部の破片で、29・46・47の3点はその端部である。29は2片に分かれる。接合しないことから、2個体分の破片であった可能性もある。個々の詳細な寸法については表3に示している。

なお、長頸鎌21点の中には32・33・34・35・37・49のように、篋被部や茎部が意図的に曲げられたと考えられるものが含まれている。

3. 工具 (図38、写真図版17・18)

鉄斧 1点(50)が出土した。有袋の鉄斧である。全長7.8cmで、うち刃部の長さは約3.3cmを測る。袋部幅2.2cm、刃部幅1.9cmと、袋部から刃部までの幅がほとんど変わらず、また肩部の張り出しもない。刃部の厚さはもっとも袋部寄りで0.7cmである。両刃と思われるが、錆のため明瞭でない。細身で肩部もないことから、鑿としての機能が考えられる。

鉈 2点(51・52)が出土した。両者ともに刃部が片面中央に鑄が通る片鑄造で、鋒に向かって反っていることから鉈と判断した。51は鋤形の刃部とそれよりも細い茎部をもつタイプである。刃部はやや短く、長さ2.2cm、幅は1.6cmを測る。関部は段を成さず刃部からなだらかに細くなる。茎端を欠くが残存長8.3cm、幅は関部がもっとも広く1.4cm、端部側で0.8cmを測る。厚さは関部がもっとも厚く0.7cmである。52は刃部のみの破片である。51とは異なり、刃部の長いタイプである。刃部長5.6cm、幅1.2cm、厚さ0.4cmを測る。鋒に向かって左側にもやや曲がっている。鋒は尖らず丸みをもつ。

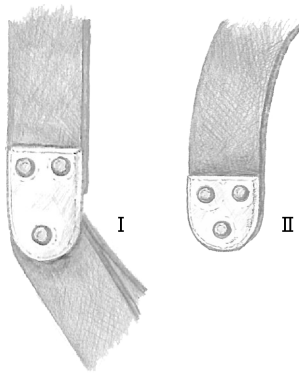


図39 爪形金具用途復原図

4. 馬具 (図38、写真図版18)

素環鏡板 1点(53)が出土した。鉄製である。銜・引手などは伴っていない。環部の約半分と立聞の一部を欠損する。環部は横長の楕円形で、立聞を除く縦は約7cm、横は約9cmに復原できる。環の断面は直径0.9cmの円形である。立聞は幅3.8cm、厚さ0.5cmの板状で、環の内側の面に沿うように片側に偏って造り出されている。

爪形金具 2点(54・55)が出土した。鉄地金銅張の薄い金具で、当古墳から出土したこの2点については図39-IIのような革帯先端の飾り金具と考えられる。しかし爪形金具と呼ばれているものの中にはやや長め

のタイプもあり、それらは図39-Iのような用途も考えられる。したがって帯先金具、あるいは帯端金具という名称は使わなかった。両者ともに爪形を呈し、3箇所が鉤が留められている。上面の周囲には面取りを施す。54は縦2.1cm、横2.6cm、厚さ0.45cmを測る。鉤は3箇所のうち、先端側の1つの頭部を欠損する。鉤の頭部は直0.8cmの半球状で、高さは0.3cmを測る。鉤芯は直径0.25cmである。鉤の表面は錆びており、銀が施されていたのかは確認できない。55は縦2.1cm、横2.25cm、厚さ0.3cmを測る。鉤は3箇所ともに頭部を欠損するが、爪形部には鉤頭が当たっていた箇所が窪みとして明瞭に残っている。そのくぼみの中にも金張りが残っており、鉤を留める前に金張りが施されていたことがわかる。鉤芯は直径0.25cmである。両者ともに、裏面には革と思われる付着物が残存する。なおこの2点の寸法から、革帯には幅2.25cmと2.6cmの2種類が使われていたことが復原できる。

責金具 3点(56~58)が出土した。金具と革帯、あるいは革帯と革帯とを締めて固定するための金具である。雲珠や辻金具等の脚金具に付属する場合が多いが、革帯先端の連結部など革帯が二重になった箇所を束ねる際にも用いられる。出土した3点がどの部分で使われていたのかは明らかでない。形状は潰れた「C」字形を呈すると考えられる。断面形は扁平なかまぼこ状である。56は端部を欠くがほぼ全体を復原し得る。鉄地銀張で、上面中央部には0.4cmほどに盛り上がる装飾を施す。また両縁に沿って斜めの刻み目が施されており、上から見ると綾杉状の紋様となっている。装飾部まで含めると縦1.8cm、横3.0cmで、断面の幅は0.6cm、厚さは0.2cmを測る。57・58はともに小片である。57は56と同じく鉄地銀張で、表面を隆起させた装飾を施す。また両縁に沿って斜めの刻み目も施されている。幅は0.65cmで、厚さは装飾部まで含めると0.45cmである。58は全体が錆びており、表面の装飾などは確認できない。幅は0.6cmで、厚さは0.2cmを測る。

用途不明環状金具 2点(59・60)が出土した。鉄地金銅張の環状金具である。両者ともに縦5.3cm、横5.9cmの楕円形で、断面は幅1.15cm、厚さ0.5cmのかまぼこ状を呈する。上面には数箇所に表面を盛り上げた装飾が施されている。59は装飾が1箇所で、高さ1.0cmの鶏冠状を呈する。60は約5分の1を欠損するが、8箇所に装飾が施されていたことが復原できる。ただしその配置に規則性はない。その装飾は豆粒大のふくらみで、低いもので0.2cm、高いもので0.5cm以上盛り上がる。この金具は片面が平坦であることが特徴で、その平坦な面を馬体側に向けて使われていたと推測できる。環状辻金具であった可能性が考えられるが、この場合、表面の装飾が問題となる。あるいは両者の規格がまったく同じであることから、本来は平坦な側で接合していた一体の金具であったという可能性も考えられるが、これについては錆びのため検証できない。

5. 土器 (図40～45、写真図版19～24)

総数55点が出土した。土師器が10点、須恵器が45点である。以下では、石室出土と周濠出土のものを分け、特記すべき点についてのみ簡単に記す。それぞれの法量等については表4にまとめた。

石室内出土の土器 (図40・41) 石室内からは19点が出土した。土師器が5点、須恵器が14点である。土師器は椀2点、高杯3点、須恵器は杯蓋2点、高杯蓋1点、無蓋高杯1点、椀1点、壺蓋1点、短頸壺1点、長頸壺1点、提瓶4点、平瓶1点、甕1点である。完形品、あるいは接合によって完形になるものが多い。第4節で詳述したとおり、羨道部の閉塞石周辺から出土した破片には、周濠内出土の破片と接合するものもあり、それらについては周濠出土として数えた。

a. 土師器

椀 (61・62) 61は完形品であるが、62は表面が磨滅した細片であったため、完形には復原できなかった。61は尖りぎみの丸底で、口縁端部はやや内湾する。内面には板ナデの痕跡が認められる。62の内面には指頭圧痕が認められ、僅かに赤色顔料が残る。

高杯 (73～75) 3点ともに短く平たい脚部に、浅い杯部が付く。杯部口縁は水平ではなく、意図的に斜めにつくられている。73・74はそれが特に顕著である。74の脚柱部はやや太く、底面から脚部外面および杯部外面にハケ目調整が認められる。73は口縁外面と脚短部の一部に、74は口縁外面の一部に黒斑がみられる。

b. 須恵器

杯蓋 (68・76) 68は接合によってほぼ完形に復原できた。外面の稜の痕跡が完全に消え、体部と天井部との境は丸くなだらかである。端部は段を成さず丸く仕上げる。天井部外面は回転ヘラ削り。胎土には直径3mm程の砂粒を含み、青灰色を呈する。76は端部が僅かに残る破片で、外面にはヨコナデによる凹凸が明瞭に残る。天井部外面は回転ヘラ削りで、内面には仕上げのナデが施される。

高杯蓋 (69) 接合によってほぼ完形に復原できた。灰白色を呈し、やや軟質。天井部には上面が大きく窪むつまみを付す。天井部外面は回転ヘラ削りで、天井部と体部との境には凹線がめぐる。

無蓋高杯 (78) 杯部の破片で、口径11.7cmを測る。杯部のみの高さは5.0cmとやや深めである。外面は2条の稜によって紋様帯が画され、その中に櫛描列点文を施す。

椀 (79) 体部は口縁に向かってほぼ垂直に立ち上がり、外面には二条の凹線をもつ。底部外側はヘラ削り後にナデ調整が施される。脚部を付すためのナデであろうか。

壺蓋 (63) 周濠出土の短頸壺 (103) とセットのなると考えられる蓋である。接合によってほぼ完形に復原できる。天井部外面は回転ヘラ削りで、つまみは付かない。端部は面をなし、内面には仕上げナデを施す。口縁部内径は9.5cmを測る。

短頸壺 (64) 完形品である。底部外面は雑な回転ヘラ削りで、内面には一段深い窪みをつくる。体部は肩が張り、頸部は短く外反する。口縁端部には平らな面をもつ。杯蓋 (68) と胎土・色調がよく似る。

長頸壺 (71) 完形品である。体部はやや肩が張り、頸部は直線的に立ち上がる。肩部には2条の凹線を施す。凹線のすぐ下方と頸部にはカキ目を施し、底部外面は回転ヘラ削りとする。胎土には直径5mmを超える砂粒を含む。頸部には「=」のヘラ記号が斜めに刻されている。

提瓶 (65・66・70・72) 66は完形品、65・72は接合によってほぼ完形となる。65は体部の前・背面ともに丸みをもつため、形状だけでは円盤状の粘土で塞がれた側がどちらなのかわかりにくい。背面側は成形時の回転ヘラ削りはきれいにナデ消される。肩部の鉤状の把手は完全に退化し突起状となる。頸部は

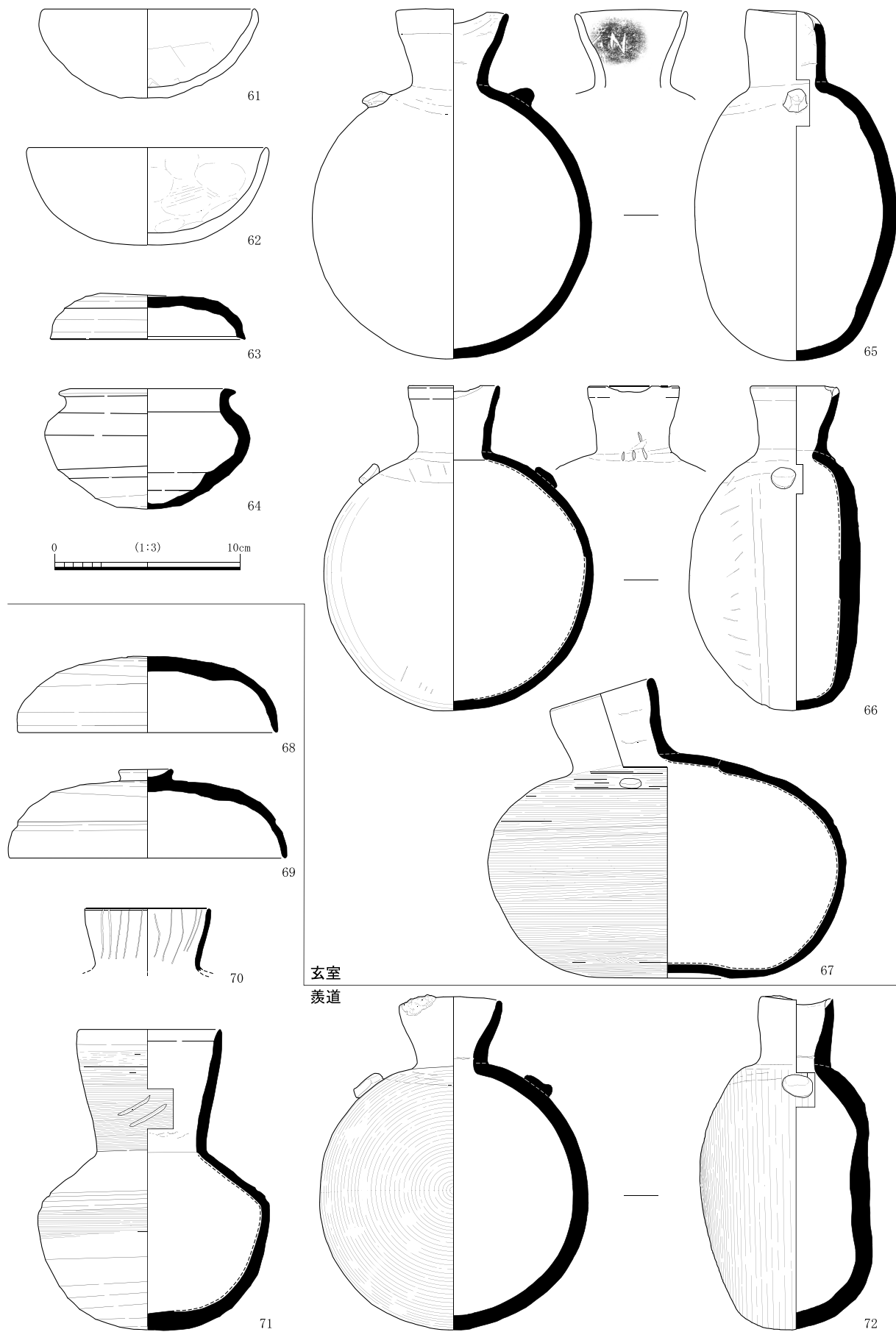


图40 石室出土土器实测图

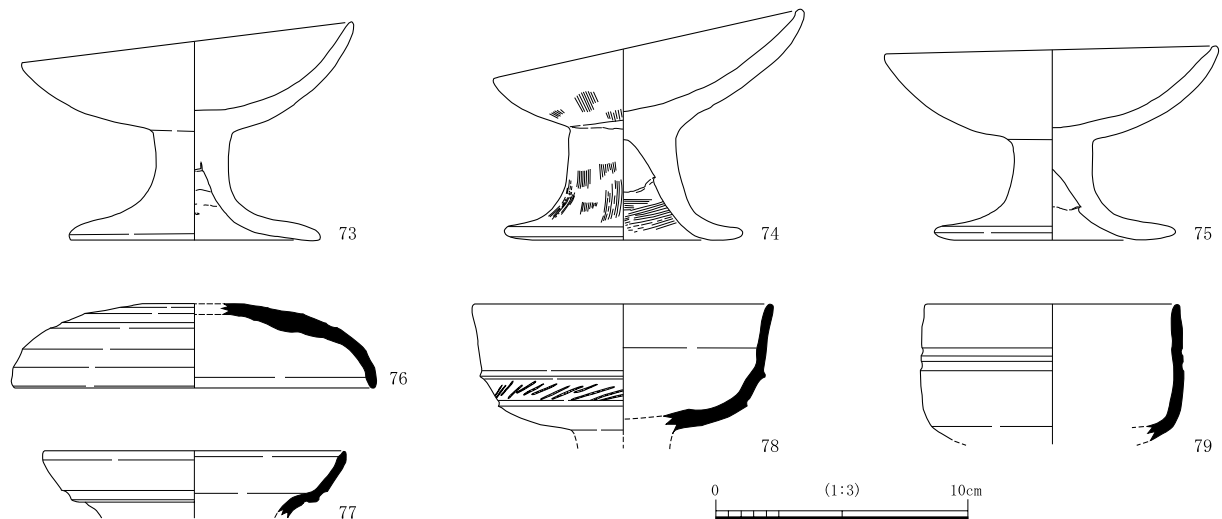


図41 石室出土土器実測図

やや内湾ぎみにのび、端部は丸くおさめる。口縁部背面側は焼成前に内側に潰されており、焼成後には端部外側の表面が削られている。意図的に行なわれたものと考えられる。内面には「N」のヘラ記号が刻まれている。片面全体に自然釉が被ることから、横位で焼成されたことがわかる。66は体部前面が丸くふくれ、背面が平坦となる。正面には一周する刺突文を施すが、非常に弱く押されているため、明瞭でない。背面には回転ヘラ削りが残り、肩部にはボタン状の把手が付く。背面側の頸部接合部には「川」のヘラ記号が刻まれている。背面側の口縁端部内側が65と同様に削られている。70は器壁の厚さ2.5mm程の非常に薄い頸部片である。内外面の一部には縦方向に筋状にのびるヘラ記号を刻む。72は器壁が厚く重い。体部は背面が平坦で、前面は丸みをもつが66ほどは膨らまない。背面の回転ヘラ削りは中央部には及ばず、成形時の指押さえが残る。背面の平坦面以外には粗いカキ目が施され、肩部には上面をへこませたやや大きめのボタン状の把手を付す。口縁部は焼成前に前・背両面から内側に潰されており、かつ背面側の端部内側は焼成後に削られている。

平瓶 (67) 完形品である。体部はつぶれた球体で、提瓶と同形態の頸部を中心からずらして接合する。体部径は19.4cmを測る。肩部には張りがなく、凹線状の浅い凹みが認められる。体部には上面から底部までカキ目を施し、頸部両脇には提瓶 (66) によく似たボタン状の粘土を付す。

甕 (77) 口縁部の小片である。端部は丸くおさめる。

周濠・排水溝出土の土器 (図42～45)

排水溝も含めた周濠内からは35点が出土した。土師器が5点、須恵器が30点である。土師器は高杯4点、鉢1点で、須恵器は高杯蓋5点、有蓋高杯10点、無蓋高杯4点、壺蓋1点、短頸壺2点、長頸壺1点、台付長頸壺1点、提瓶3点、甕1点、甕2点である。どれも破碎され、細片化している。

a. 土師器

高杯 (109～111・113) 113のみ排水溝から出土。109・110・113は中実の脚柱部であるが、中実部の長さはまちまちである。111は73～75のような器形になると考えられる。

鉢 (108) 底部は平底で、口縁部は器壁がやや厚くなり内湾する。

b. 須恵器

高杯蓋 (80～84) いずれも天井部を回転ヘラ削りとし、中央に扁平なつまみを付す。天井部と体部との

境の表現によって大きくA・Bの2類に分類できる。A類は境に細い凹線をめぐらすもの、B類は境の稜をナデによってつくり出すもので、A類には80・83が、B類には81・82・84が属す。

A類はつまみがB類に比べやや大型で、上面を極端に窪ませる。外面の凹線は本来の天井部と体部との境よりもやや上にめぐる。80は端部内側に凹線状の段をもつ。

B類のうち、82は稜の下方を強くヨコナデして凹線状に窪ますことによって天井部と体部との境を表現するが、81・84は82よりもヨコナデが弱く、境の上下を僅かに窪ませることで、稜の痕跡を表現する。したがって稜は丸みをもち82に比べ不明瞭である。3点ともに口縁端部は丸くおさめ、81・82は天井部内面に仕上げのナデを施す。

口縁径や胎土・色調・焼成具合などから、80と89、82と96がセットをなすものと考えられる。81と88もピタリと重なるが、胎土・色調・焼成具合は若干異なる。

有蓋高杯（85～90・95～98） いずれも長脚で、長方形の透かしを2段3方にあげ、上段と下段の透かしの間に2条の凹線を施す。脚端部は下方、あるいは上下につまみ出し、側面に面をもつが、87のみ反りぎみに丸くおさめる。脚径や脚端部の形態によって大きくA～Cの3類に分類できる。A類は脚径が16cm以上のもの、B類は14cm前後のもの、C類は15cm前後で、端部を丸くおさめるものである。A類には86・95・96・98が、B類には85・88～90・97が、C類には87が属す。85は脚部を欠損するが、杯部口径からB類に属すると判断した。

A類のうち、96は杯部内面に当て具痕跡と、仕上げのナデが認められ、脚部の上半にのみカキ目が認められるが、非常に薄く鮮明でない。杯部は斜めに接合され、脚部は焼け歪む。96以外は外面のカキ目は認められない。また下段の透かし下端部にも1条の凹線がめぐる。95は暗赤灰色を呈し、杯部外面に「×」のヘラ記号を刻む。

B類は、下段の透かし下端部に強いヨコナデによる凹線状の窪みがめぐり、それより上に細かいカキ目を施す。カキ目は杯部の回転ヘラ削りが施されていた範囲まで及ぶが、杯部の底は脚部との接合のためナデ消されている。

C類の87は、杯部が斜めに接合されている。外面のカキ目はない。杯部内面には仕上げナデを施す。無蓋高杯（91～94） いずれも細く長い脚部で、長方形の透かしを91～93は2段3方に、94は2段2方にあげ、いずれも上段と下段の透かしの間には2条の凹線を施す。脚端部は下方につまみ出され、側面に面をもつ。93は上方にもつまみ出される。91は灰白色を呈し、軟質。下段の透かし下端部にも1条の凹線がめぐる。杯部外面にはにぶい稜を2条めぐらし、その下方の稜から口縁部までと、脚部外面をカキ目で仕上げる。杯部口径と脚径は同じ11.9cmである。92は脚裾部が杯部口径よりも広がる器形で、2条の凹線が下段の透かし下端部にもめぐる。透かしは裾部まで及ばず、脚部の上3分の2までに収まる。また上段の透かしは、内面に僅かにとどく程度で、完全にはあけられていない。杯部外面には2条の鋭い稜がめぐり、杯部内面には仕上げのナデが認められる。93は脚径が杯部口径よりも狭い器形で、杯部外面には、稜というよりも太い2条の凹線をめぐらせて紋様帯を画し、その中に櫛描列点文を施す。94は脚部のみ破片で、91と同じく灰白色を呈し、軟質である。

壺蓋（114） 排水溝から出土した。台付長頸壺（105）に伴う蓋と考えられる。天井部外面は回転ヘラ削りで、中央に上面が窪んだつまみが付く。内面のかえりは長く、折込み手法によって成形されている。

短頸壺（103・104） 103は垂直に立ち上がる短い頸部で、端部は丸くおさめる。体部はやや肩が張る。底部外面は回転ヘラ削りで、底部内面は数回に及ぶ仕上げのナデが施される。蓋を被せたまま焼成した

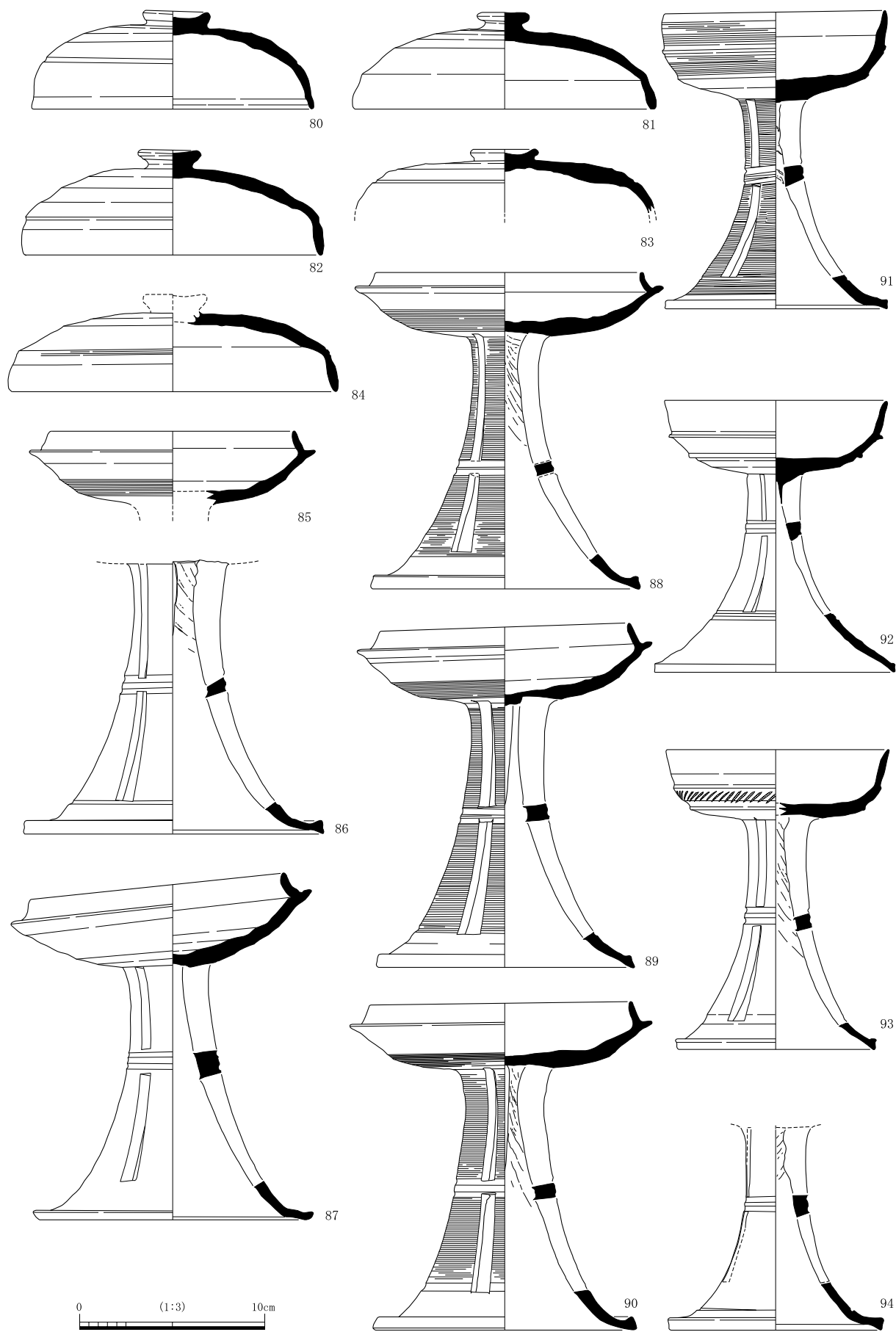


图42 周濠出土土器实测图

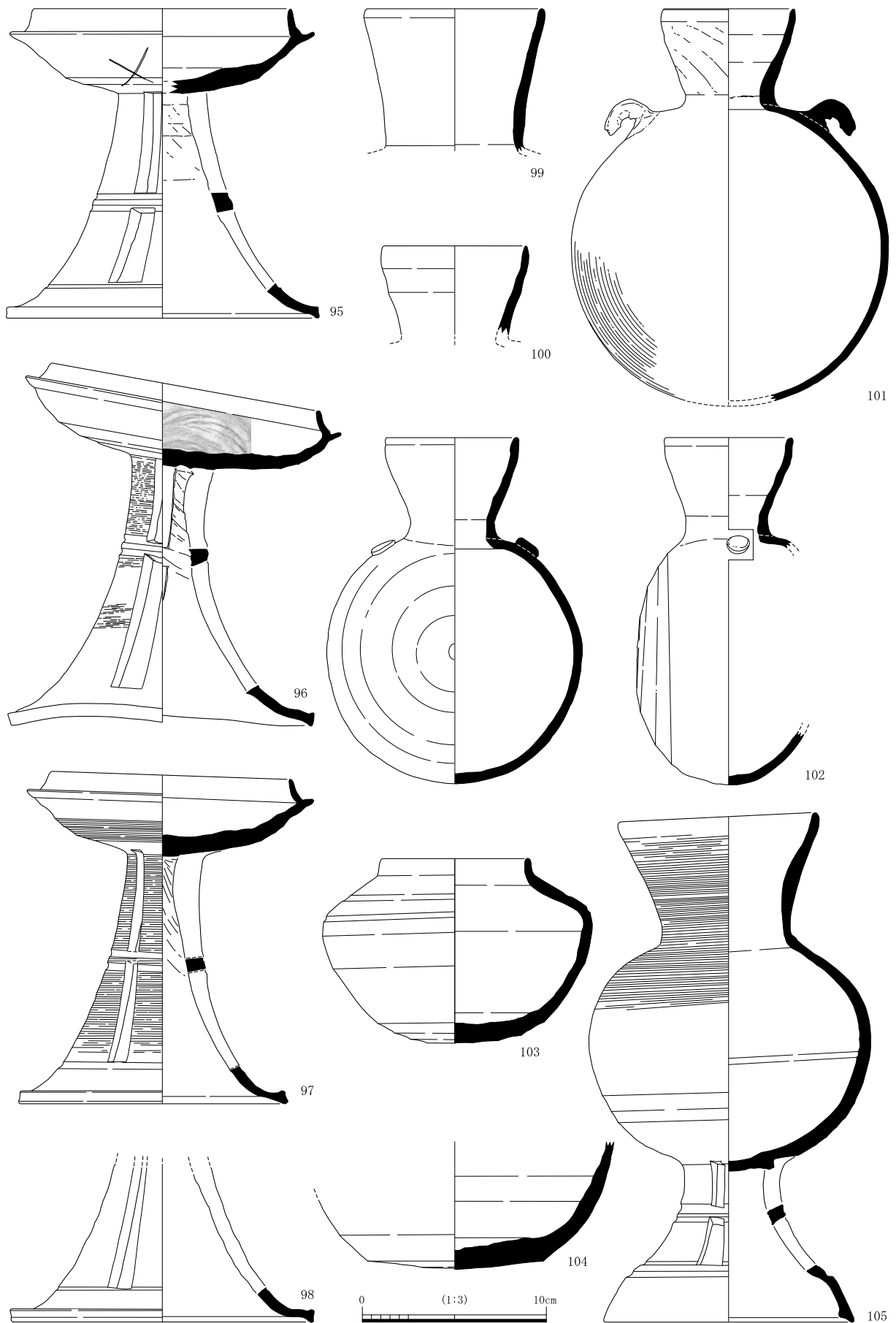
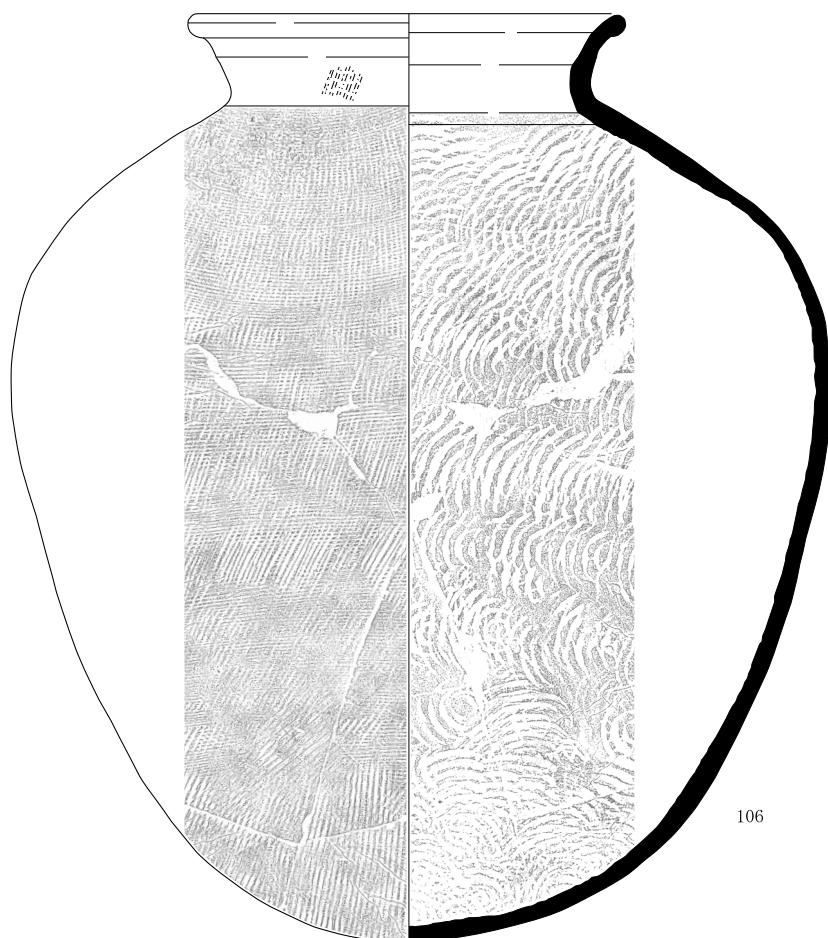
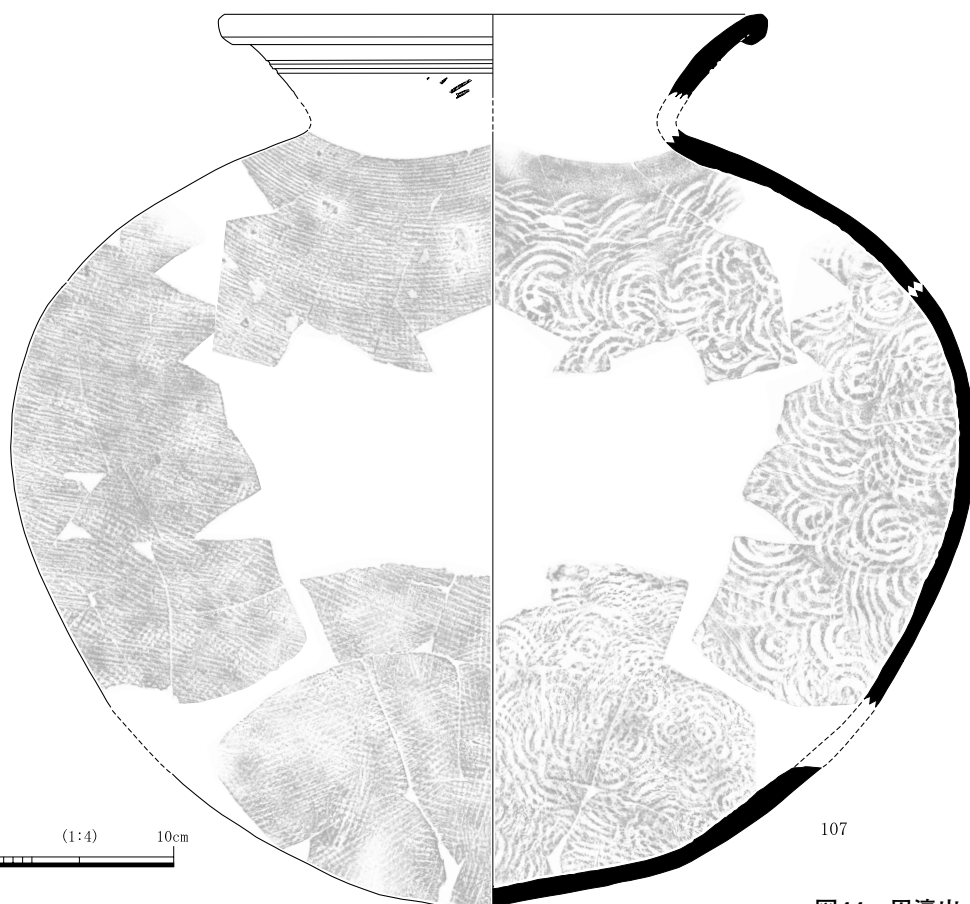


图43 周濠出土土器实测图



106



0 (1:4) 10cm

107

图44 周濠出土土器实测图

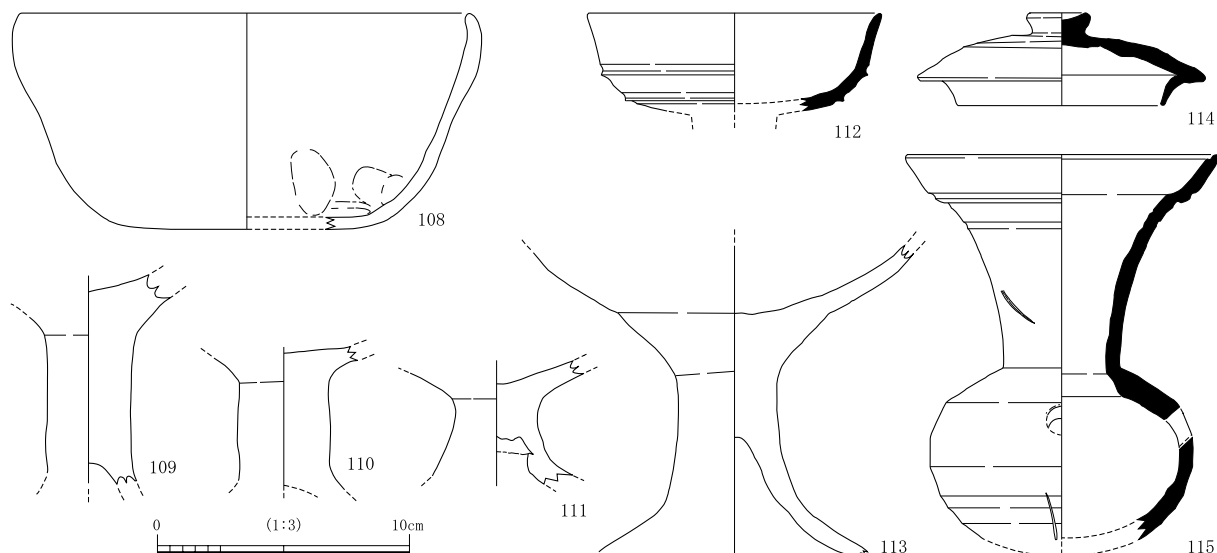


図45 周濠・排水溝・その他出土土器実測図

痕跡が残る。その蓋は63であったと考えている。104は壺の底部と考えられる破片である。底部外面から体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されるが、底部と体部との境はシャープに削り出し、底部を平底風にする。

長頸壺 (99) 頸部の小片である。台付長頸壺 (105) の口縁形態によく似て、端部が内弯する。

台付長頸壺 (105) 体部は肩の張りをまったくもたない球形で、外反する頸部が付く。口縁端部はやや内弯し、丸くおさめる。体部下半は回転ヘラ削りであるが、脚部接合の際のヨコナデが広範囲に及ぶ。体部上半から頸部にかけてはカキ目を施す。脚部は甕を反転した形態で、長方形透かしを2段3方にあける。壺蓋 (114) が伴うと考えられる。

提瓶 (100~102) 101・102は丸みをもった体部に、やや内弯ぎみの頸部が付く。101は65・66・72・102に比べやや大型の体部で、肩部には鉤状の把手が付く。頸部外面には絞りの痕跡が認められる。102は背面に回転ヘラ削りが残り、肩部にはボタン状の把手を付す。なお前面が大きく欠けているため、図面は背面側を正面に向けて表現している。100は101・102と同形態の頸部小片である。

甕 (115) にぶい褐色を呈する。体部は肩が張らない球体で、大きく外反する口縁をもつ。底部外面は回転ヘラ削りで、体部から頸部にかけては紋様がなくシンプルである。頸部と底部にヘラ記号があるが、破片であることから、全体像は不明。

甕 (106・107) 両者とも体部はやや肩が張る球形で、外反する頸部に丸い玉縁状の口縁をもつ。106は器高よりも体部最大径が短い器形で、体部外面は左下がりのタタキの後、横方向のカキ目、頸部はタタキ・カキ目の後、強いヨコナデを施す。107は細片化していたため、各部位を図面上で合成して復原した。口縁部も小片である。器高よりも体部最大径が長い器形で、体部外面には右下がりのタタキの後、横方向のカキ目を施す。底部外面には、窯詰めの際のつめ具の痕跡が4箇所に残る。その痕跡は直径約13.5cmの円形であることから、須恵器の杯がつめ具として用いられたと推定される。頸部は上半に2条の凹線を施し、その下に櫛描列点文を押す。

このほか、墳丘東側の筍畑の盛土中から須恵器無蓋高杯 (112) が1点出土している。杯部のみの小片で、断面がセピア色で、外面は暗灰色を呈する。口径11.5cmで、外面には2条の鋭い稜をもつ。

以上、石室出土と周濠出土のものを分け、個々の特徴について報告したが、ここでこれらの時期に

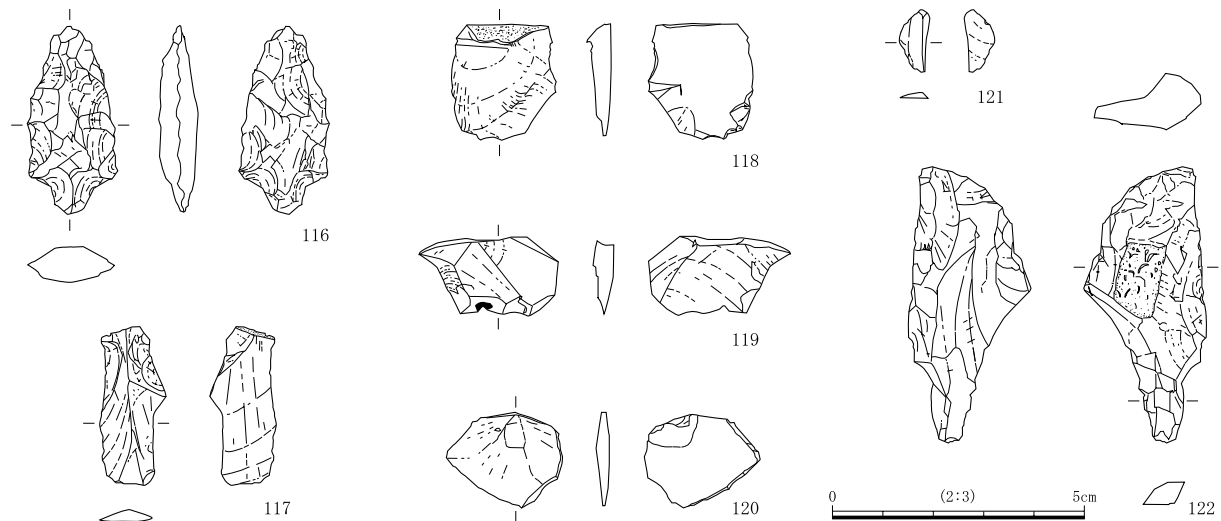


図46 石器実測図

ついて簡単に触れておきたい。

まず周濠出土のものを細かく見てみると、高杯蓋は天井部と体部との境の表現によってA・Bの2類に、有蓋高杯は脚径や脚端部の形態によってA～Bの3類に分類することができた。また無蓋高杯はそれぞれ形態が異なりバラエティーに富むことがわかった。有蓋高杯については、脚径が大きいA類がB類よりも古相を示していると考えられるが、口径や器高はまちまちで、タイプごとの変化は認め難い。また杯部の立ち上がりはいずれのタイプも細くて長く、明確な形態上の変化を認めることができない。蓋については、高杯A類には蓋B類が、高杯B類には蓋A類が伴うことから、B類よりもA類が後出すると考えられるが、これも時期的に大きく隔たるとは言い難く、全体的にみてどれも田辺編年（田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店）でいうTK43型式に属するものと考えられる。

高杯以外でも、提瓶（101）は把手がまだ鉤状で、また台付長頸壺（105）は肩部に張りがなく球形であり、TK43型式の特徴を示している。一部には提瓶（102）のように把手が完全に退化し、TK209型式に属すると考えられるものも含まれているが、周濠出土の土器は総じて6世紀後葉のTK43型式の範疇におさまるものと考えられる。

これに対して、石室内に残された追葬に伴うと考えられる土器は、器種構成も、高杯に代わって提瓶や平瓶などの瓶類となるなど、周濠出土のものよりも一見して新しい様相を示していることがわかる。提瓶は周濠出土のものよりもやや小型になり、把手は退化が進んだボタン状となっている。平瓶の把手もまったく同じボタン状であり、TK43型式の一段階後のTK209型式に属すると考えられる。石室内には壺蓋（63）や短頸壺（64）のように、出土状況から提瓶や平瓶よりも一時期前のものであることがわかるものも残されているが、多くは周濠出土のものよりも後出する7世紀初頭に位置づけられるものといえよう。

6. 石器（図46、写真図版24）

総数16点が出土したが、石室や墳丘に伴う7点のみを図化した。いずれも弥生時代のサヌカイト製の石器である。116は左側壁の裏込め土中から、117～119は墳丘南西側に認められた墳丘の輪郭を修正した盛土の中から、120・121は床面下から、122は周濠の紫黒色粘質シルト層中から出土した。残りの9点は周濠の紫黒色粘質シルト層や墳丘よりも上層から出土している。116は鏃、122は錐で、他は剥片である。

表4 土器計測表

挿図 番号	種類	器種	法量 (cm)	残存率 (%)	色調	特徴	出土地点
61	土師器	椀	口径 器高 11.3 4.8	100	橙	内面板ナデ	玄室床面
62	土師器	椀	口径 器高 (12.8) (5.3)	30	橙	細片 内面に赤色顔料	玄室床面
63	須恵器	壺蓋	口径 器高 10.4 2.5	98	青灰	内面仕上げナデ 103とセットか	玄室床面
64	須恵器	短頸壺	口径 器高 体部径 8.4 6.5 11.0	100	青灰	内面が一段窪む	玄室床面
65	須恵器	埴瓶	口径 器高 体部径 5.9 18.8 15.0	95	黄灰	背面側口縁部潰れ・切り欠き 頸部内面「N」ヘラ記号 突起状把手	玄室床面
66	須恵器	埴瓶	口径 器高 体部径 4.8 17.5 14.6	100	灰	頸部接合部「川」ヘラ記号 前面に刺突文、ボタン状把手 口縁部内面の切り欠き	玄室床面
67	須恵器	平瓶	口径 器高 体部径 5.7 14.5~16.2 19.4	100	灰	体部カキ目 ボタン状把手	玄室床面
68	須恵器	杯蓋	口径 器高 (14.0) 4.1	95	青灰	外面の稜なし	閉塞石下
69	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (14.8) 4.8	95	灰白	外面に凹線	閉塞石下 羨道床面
70	須恵器	埴瓶	口径 器高 (6.6) (3.4)	10	暗灰黄	頸部内外面「川」ヘラ記号	羨道床面
71	須恵器	長頸壺	口径 器高 体部径 (7.6) (16.2) (12.5)	100	暗青灰	頸部外面「=」ヘラ記号 体部・頸部カキ目 粗い砂粒含む	羨道床面
72	須恵器	埴瓶	口径 器高 体部径 5.5 18.0 14.5	98	黄灰	口縁部潰れ・切り欠き 頸部~体部正面1/3自然釉 器壁厚く重い	羨道床面
73	土師器	高杯	口径 器高 底径 (13.1) 7.0~8.7 (9.8)	80	橙	杯部斜めに接合 外面に黒斑	墓道床面下
74	土師器	高杯	口径 器高 底径 (12.4) 6.4~9.1 (7.1)	90	黄橙	杯部斜めに接合 外面・脚内面にハケ目 外面に黒斑	墓道床面下
75	土師器	高杯	口径 器高 底径 (13.1) 7.4~7.7 (9.0)	95	橙	杯部斜めに接合	墓道床面下
76	須恵器	杯蓋	口径 器高 (14.2) (3.4)	25	灰	内面仕上げナデ	墓道埋土
77	須恵器	甕	口径 器高 (11.9) (2.7)	5	灰	口縁部のみ	羨門床面下
78	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 (11.7) (5.1)	20	灰	杯部のみ 紋様帯に櫛描列点文 杯部深い	羨門床面下
79	須恵器	椀	口径 器高 (9.9) (5.4)	27	灰	脚が付くかは不明 外面に2条の凹線	奥壁部抜取穴
80	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (14.9) 5.3	95	青灰	天井部と体部の境やや上に細い凹線 端部内面に凹線状の段 89とセットか	周濠最下層 周濠黒褐色土
81	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (16.2) 5.2	65	灰	外面の稜をヨコナデで表現 内面仕上げナデ	周濠黒褐色土
82	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (15.9) 5.7	50	灰	外面の稜を強いヨコナデで表現 内面仕上げナデ 96とセットか	周濠最下層 周濠黒褐色土
83	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (14.4) (3.2)	50	灰	天井部と体部の境やや上に凹線	周濠黒褐色土 周濠黄褐色土
84	須恵器	高杯蓋	口径 器高 (17.6) (4.3)	80	灰白	外面の稜をヨコナデで表現	周濠最下層 周濠黒褐色土
85	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 (13.1) (4.0) (15.4)	20	灰	杯部のみ。 外面にカキ目	周濠黒褐色土
86	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 底径 - (14.8) (16.1)	50	灰		周濠黒褐色土
87	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径 13.7 17.3~18.7 16.3 15.1	90	灰	脚端部丸く収める 杯部斜めに接合 杯部内面に仕上げナデ	周濠黒褐色土 周濠最下層
88	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径 (14.4) (17.1) (16.7) 14.4	80	灰	脚部~杯部カキ目	周濠黒褐色土

89	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径	13.4 18.1~18.6 15.9 13.8	95	青灰	脚部~杯部カキ目 80とセットか	周濠黒褐色土
90	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径	(14.1) 17.5~17.7 16.3 (14.0)	70	灰	脚部~杯部カキ目	周濠黒褐色土
91	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 底径	11.9 15.9~16.1 11.9	80	灰白	杯部外面に太い凹線 脚部~杯部カキ目	周濠黒褐色土
92	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 底径	(12.0) 14.7 13.0	60	黄灰	杯部径よりも脚径が大きい 上段側の透かし完全でない 杯部外面に稜、内面仕上げナデ	周濠黒褐色土 羨道床面 閉塞石下
93	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 底径	(12.0) 16.2 10.6	50	灰	杯部紋様帯に櫛描列点文 紋様帯は太い凹線で画す 杯部内面仕上げナデ	周濠黒褐色土 羨道床面 閉塞石下
94	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 底径	- 10.9 11.3	15	灰白	脚部のみ 透かし2段2方	周濠黄褐色土 周濠黒褐色土 羨道側壁抜取穴
95	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径	13.9 16.8 16.5 16.9	40	暗赤灰	杯部外面「×」ヘラ記号	周濠最下層 周濠黒褐色土 羨道側壁抜取穴 排水溝最上層
96	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径	14.7 17.1~19.7 (17.4) 16.2	95	灰	杯部内面に当て具痕・仕上げナデ 脚部外面のカキ目不明瞭 脚部焼け歪む、杯部斜めに接合 82とセットか	周濠最下層 羨道床面 閉塞石下
97	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 受部径 底径	(12.9) 17.6~18.1 15.6 14.4	80	灰	脚部~杯部カキ目	周濠黒褐色土
98	須恵器	有蓋高杯	口径 器高 底径	- (8.6) 16.2	20	灰	脚部のみ	周濠最下層 周濠黄褐色土
99	須恵器	長頸壺	口径 器高	(9.5) 7.6	5	赤灰	頸部のみ	周濠底面
100	須恵器	堤瓶	口径 器高	(7.7) (4.9)	5	青灰	頸部のみ	周濠最下層
101	須恵器	堤瓶	口径 器高 体部径	7.0 (21.4) (17.2)	25	灰	頸部外面に絞り痕跡 鉤状把手	周濠黒褐色土 閉塞石下 排水溝下層
102	須恵器	堤瓶	口径 器高 体部径	7.0 18.8 13.9	65	暗灰	ボタン状把手	周濠黒褐色土
103	須恵器	短頸壺	口径 器高 体部径	7.9 10.0 14.6	85	青灰	63とセットか、蓋をしたまま焼成か、 体部やや肩が張る 内面に仕上げナデ数回	周濠黒褐色土
104	須恵器	短頸壺	口径 器高 底径	- (6.9) 9.6	30	紫灰	底部のみ 底部と体部の境シャープ	周濠黒褐色土
105	須恵器	台付 長頸壺	口径 器高 体部径 底径	10.6 27.1~27.6 15.3 13.5	90	灰	114とセットか 体部丸い、体部上半~頸部カキ目 脚部透かし2段3方	周濠黒褐色土
106	須恵器	甕	口径 器高 体部径	22.3 49.1 43.3	90	灰	玉縁状の口縁 体部左下がりタタキの後カキ目 頸部タタキ・カキ目後ヨコナデ	周濠黒褐色土
107	須恵器	甕	口径 器高 体部径	(28.4) (47.1) (51.0)	40	灰	頸部2条の凹線と櫛描列点文 体部右下がりタタキの後カキ目 底部外面につめ具痕 器高より体部径大	周濠黄褐色土 周濠黒褐色土
108	土師器	鉢	口径 器高 体部径	(17.7) (8.6) (18.6)	20	橙	口縁部付近器壁厚い	周濠黄褐色土
109	土師器	高杯	口径 器高 底径	- (8.3) -	20	橙	中実の脚柱部片	周濠黒褐色土
110	土師器	高杯	口径 器高 底径	- (5.7) -	25	橙	中実の脚柱部片	周濠黒褐色土
111	土師器	高杯	口径 器高 底径	- (4.9) -	30	赤橙	脚柱部片	周濠黒褐色土
112	須恵器	無蓋高杯	口径 器高 底径	(11.5) (3.9) -	10	暗灰	杯部のみ 外面鋭い稜	墳丘東方盛土
113	土師器	高杯	口径 器高 底径	- (12.3) -	70	赤褐	杯部~裾部(端部を欠く)	排水溝下層
114	須恵器	壺蓋	口径 器高 かえり径	11.4 3.7 8.1	100	灰	105とセットか 長いかえり(折り込み手法)	排水溝下層
115	須恵器	甕	口径 器高 体部径	12.5 (15.3) 10.6	50	にぶい褐	肩張らない球形 頸部・底部にヘラ記号	周濠黒褐色土 周濠黄褐色土 排水溝下層

第7節 遺構・遺物の検討

1. 石室の石材

I. はじめに

奥山1号墳の石室は、天井部や奥壁部が完全に破壊されているため、基底の石組みと、閉塞石、棺台が僅かに残るのみである。それらにどのような石材が使われているのか、またどこで産出される石材なのかを、ごく簡単に報告する。

本報告にあたっては、財団法人 大阪市文化財協会の小倉徹也氏に現地にて石材の鑑定をしていただいた。また京都教育大学名誉教授の井本伸廣先生には、花崗岩以外の石材を実見していただき、産出地等のご教示をいただいた。なお両者ともに、石材の観察は肉眼によるものであることを断っておきたい。

II. 石材

石室に使用されている石材のうち、玄室の巨石についてはすべて粗粒黒雲母花崗岩であるが、やや小振りの石材を使う羨道部については斑れい岩が多く用いられている。また玄室の巨石同士の隙間を詰める石材には、大きさが合うように破碎された斑れい岩が使われている。

閉塞石については、3列に並べられた最下段のものについて調査した。16石のうちの6石が粗粒黒雲母花崗岩、7石が斑れい岩、残りの3石が流紋岩質凝灰岩である。

棺台については、8石のうち7石が斑れい岩、1石だけが流紋岩質凝灰岩である。

III. 採取地

寝屋川市の東方、ちょうど石宝殿古墳あたりを走る交野断層の東側一帯は花崗岩地帯である。奥山1号墳に使われた花崗岩は、2トン前後の巨石であり、おそらくもっとも近いこのあたりから運び出されたものと考えている。

斑れい岩については、寝屋川市近辺では生駒山頂付近に産することがひろく知られている。しかし奥山1号墳に使用されている斑れい岩のうち、玄室側壁の隙間に詰め込まれたもの以外は、どれも角の取れた河原石であり、直接生駒山頂から切り出されたものではないことがわかる。おそらく、生駒山から西麓の東大阪方面へと流れ出る河川の河原から採取されたものと考えている。

流紋岩質凝灰岩は、寝屋川近辺では産出しない。やや離れた地域ではこの岩石が産出される場所がいくつかあるが、奥山1号墳に使用されている流紋岩質凝灰岩を実見していただいた井本先生からは、大阪府南部の和泉山脈北麓付近で産出される泉南流紋岩ではないか、とのご教示を頂いた。

IV. まとめ

奥山1号墳には粗粒黒雲母花崗岩以外に、周辺では産出されない斑れい岩、流紋岩質凝灰岩が使われていることが判明した。また玄室の側壁のような大きなものには花崗岩が使われ、羨道部などの小振りなものには斑れい岩や流紋岩質凝灰岩が、また玄室の側壁の隙間には破碎された斑れい岩が用いられるなど、ある程度石材の使い分けが行なわれていることも明らかとなった。

【石室】	
No.	岩石種
1	粗粒黒雲母花崗岩
2	斑れい岩
3	斑れい岩
4	斑れい岩
5	斑れい岩
6	斑れい岩
7	斑れい岩
8	斑れい岩
9	斑れい岩
10	粗粒黒雲母花崗岩
11	粗粒黒雲母花崗岩
12	粗粒黒雲母花崗岩
13	斑れい岩
14	斑れい岩

15	斑れい岩
16	斑れい岩
17	斑れい岩
18	粗粒黒雲母花崗岩
19	粗粒黒雲母花崗岩
20	粗粒黒雲母花崗岩
21	粗粒黒雲母花崗岩
22	粗粒黒雲母花崗岩
23	粗粒黒雲母花崗岩
24	斑れい岩
25	斑れい岩
26	斑れい岩
27	斑れい岩
28	粗粒黒雲母花崗岩
29	斑れい岩
30	粗粒黒雲母花崗岩

【閉塞石】	
No.	岩石種
1	斑れい岩
2	流紋岩質凝灰岩
3	斑れい岩
4	粗粒黒雲母花崗岩
5	粗粒黒雲母花崗岩
6	斑れい岩
7	粗粒黒雲母花崗岩
8	斑れい岩
9	斑れい岩
10	粗粒黒雲母花崗岩
11	斑れい岩
12	斑れい岩
13	粗粒黒雲母花崗岩
14	流紋岩質凝灰岩

15	粗粒黒雲母花崗岩
16	流紋岩質凝灰岩

【棺台】	
No.	岩石種
1	斑れい岩
2	斑れい岩
3	斑れい岩
4	斑れい岩
5	斑れい岩
6	流紋岩質凝灰岩
7	斑れい岩
8	斑れい岩

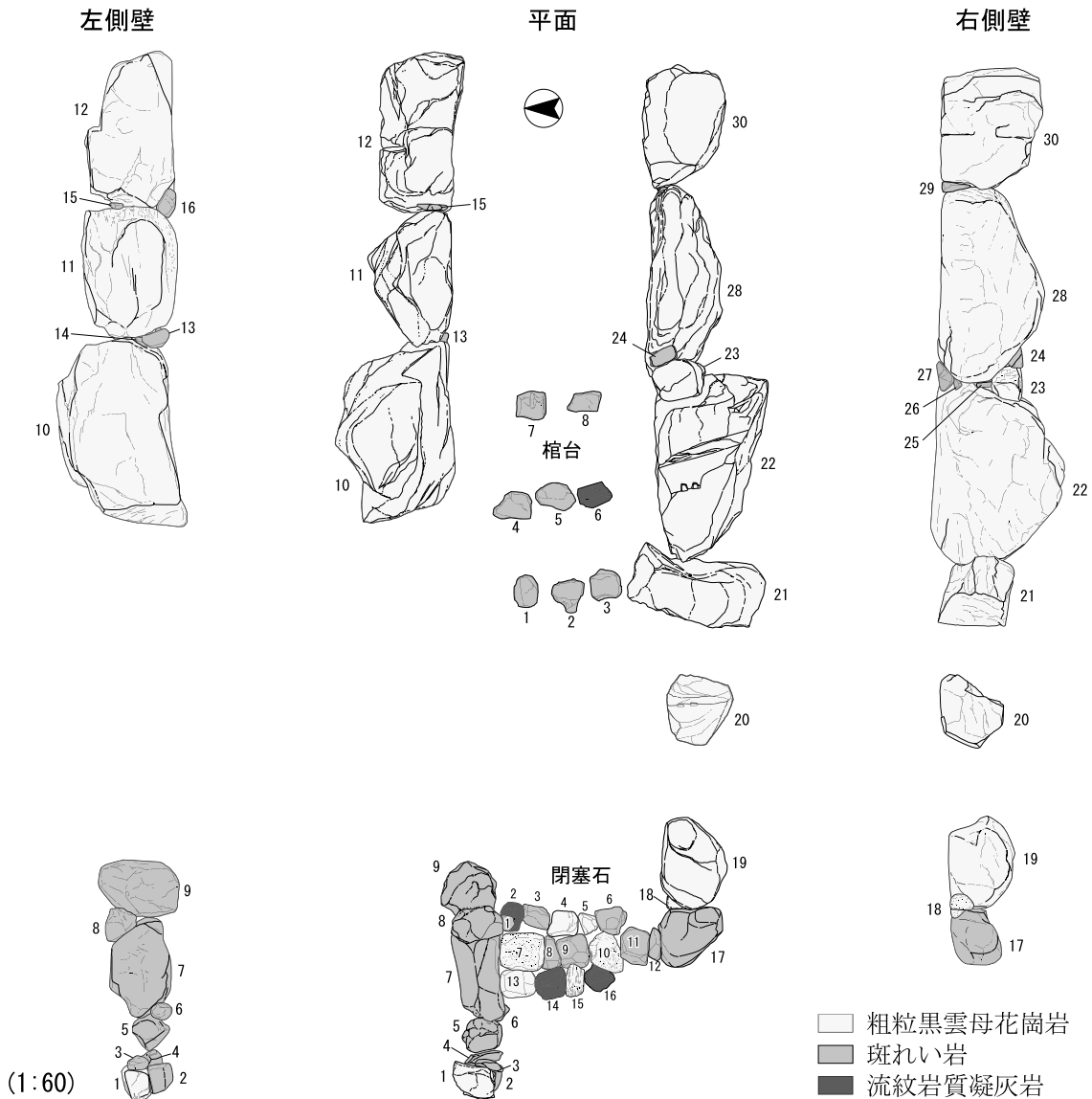
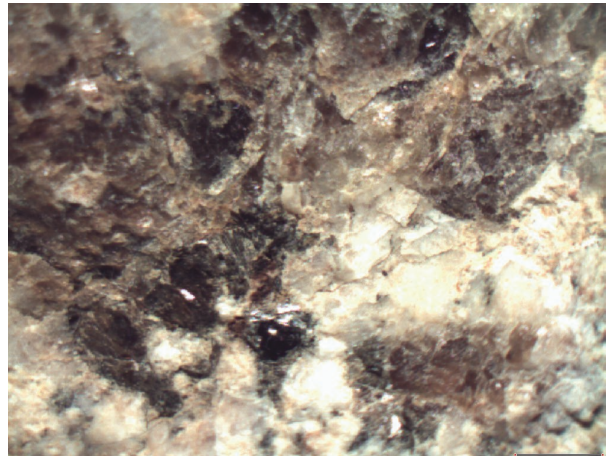
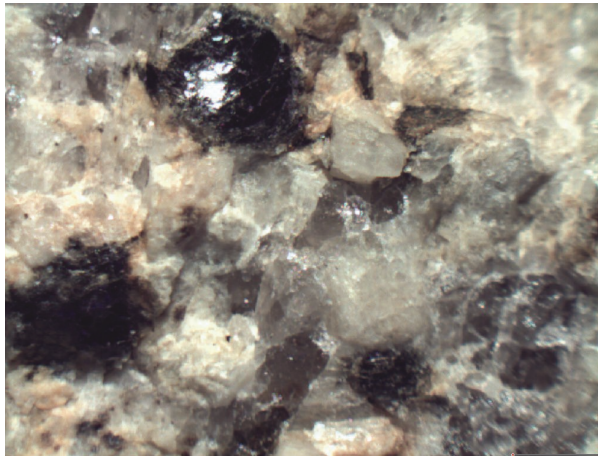
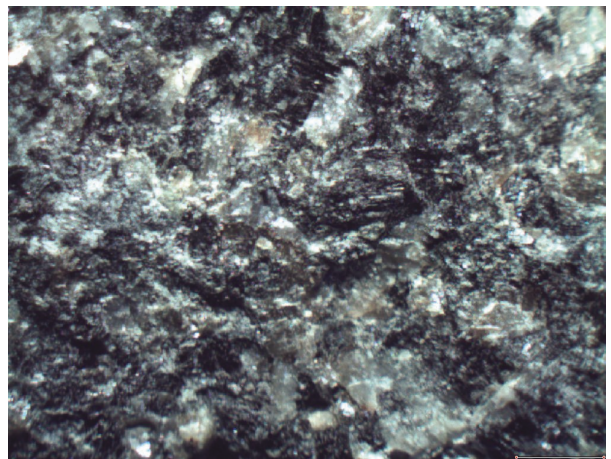
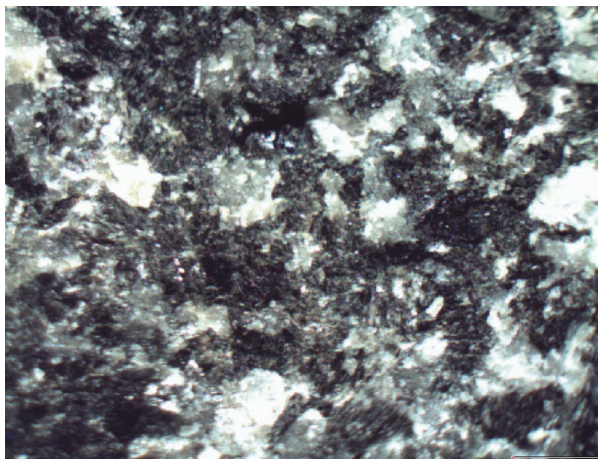


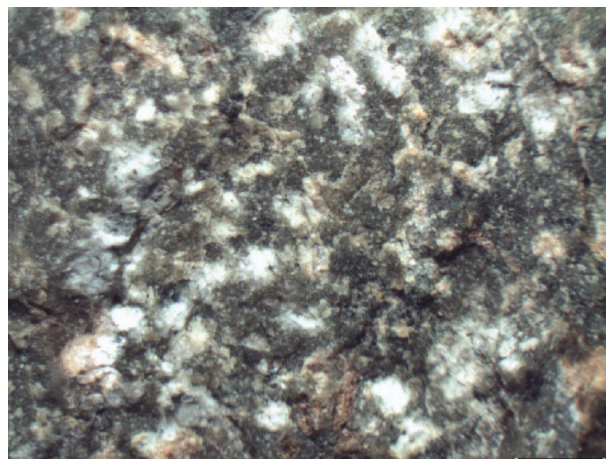
図47 石室の岩石種



粗粒黒雲母花崗岩



斑れい岩



流紋岩質凝灰岩



写真15 各岩石の実体顕微鏡写真

2. 両頭金具について

I. はじめに

両頭金具は弓の飾金具の一種で、古墳や横穴墓からしばしば出土する。現在では両頭金具が弓の付属金具という認識が成立しているが、それ以前は用途が判然とせず、名称についても多種多様なものが用いられている状況であった。両頭金具の研究の端緒となったのが市毛勲氏の論考である。

市毛氏は同種の鉄製金具に対して、「不明鉄製品」「棒状鉄器」「花形付両頭鋌」「刀の目釘状を呈する鉄製品」「鉄製両頭留金具」という様々な名称が存在する点に着目した。その上で、市毛氏は鉄製品の用途と形態的特徴を表した「両頭座金付留金具」という名称を提唱した。また、この用途として馬具説や楯説、目釘説、木棺説等の諸説が論じられていることを紹介したが、用途を特定するには至らず、鉄刀・鉄鏃との共伴が多いことから、武器や武器に関連した工芸品に使用されたものと位置付け、後期古墳副葬品の特色になっているとした¹⁾。

田中新史氏は奈良県メスリ山古墳で出土した銅製弣や、群馬県大川村出土の埴輪弓、栃木県七廻鏡塚古墳の木製弓等に注目し、両頭金具を弓の付属金具とする説を提示した。また、弓への取り付け方について、その方法を述べている。そして両頭金具の全国的な集成を行い、その出現と終焉は6世紀末～7世紀中葉にピークを迎えると分析している²⁾。

その後、福島県小申田北第18号横穴から、弓に装着された状態の両頭金具が出土し、両頭金具が弓の付属金具とする説が裏付けられたのである³⁾。

今回の奥山1号墳の発掘調査では、両頭金具が4点確認された。弓本体は出土していないが、両頭金具のみが副葬されたとは考えにくいので、副葬品の中に両頭金具が装着された弓が含まれていたと推察される。なお、奥山1号墳の両頭金具は頭部の平面形が三角形を呈するという特徴があり、注目される。

ここでは、小申田北第18号横穴の出土事例を参考に、両頭金具の構造や弓への装着方法等にふれた上で、奥山1号墳の両頭金具について考えてみたい。

II. 両頭金具の構造と弓への装着方法

(1) 小申田横穴群北第18号横穴の出土事例⁴⁾

小申田横穴群は福島県いわき市に所在する横穴群で、古墳時代後期から奈良時代後期にかけて造営された。横穴群は北群と東群に分かれており、そのうちの6世紀末頃に構穿された北第18号横穴から飾り弓が出土した。飾り弓は弣部を欠いていたが、末弣部には末弣金具1点、リング状の縁金具2点、両頭金具を4点装着した状態であった。また、末弣部からやや離れた地点で本弣金具1点、リング状の縁金具2点、両頭金具1点が確認された。

弓本体は木製の黒漆塗りで、飾り金具はいずれも金銅製である。末弣部には弓の端から末弣金具、縁金具、両頭金具の順で装着され、4点の両頭金具が約5cm間隔で弓本体に装着されていたことが出土状況から判明した。なお、本弣金具と共に出土した縁金具と両頭金具には弓本体が残存しておらず、両頭

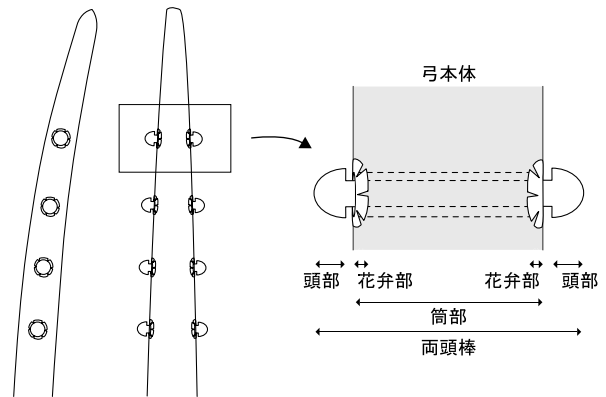


図48 両頭金具の各部名称

金具の装着状況は不明である。

(2) 両頭金具の構造と弓への装着方法

両頭金具は筒の中に、両端に頭部を有する両頭棒が通るという構造であり、小申田北第18号横穴の報告では、弓本体への装着方法が復元されている。簡単にまとめると以下ようになる。

①薄い鉄板と、一方は半球形でもう一方は不整半球形の両頭棒を製作する。②鉄板を丸め、筒状にする。③弓の側面から弓幹を貫くように穿孔を施す。④弓に穿った孔に②の筒を挿し込み、弓からはみ出した部分に数箇所刻みを入れる。⑤弓側面に付くように筒部の刻みを入れた部分を押し広げ、筒部を弓本体に固定する。⑥筒の中に両頭棒を挿し込む。⑦不整半球形の頭部を打ち敲き、孔の径よりも大きくする。以上で両頭金具の装着が完了する。

筒部の両端に見られる花卉部は⑤段階で形成されるが、この花卉部については、市毛氏や田中氏、井鍋譽之氏等が形態による分類を行っている。市毛氏は花卉部の形状から、方形花卉、丸みを持たせ花卉を強調したもの、花卉中央に切り目をいれたものの3形態に分類した。最も多く見られるのが方形花卉で、後者の2形態については装飾的意味を有しているとした⁵⁾。田中氏は花卉部が角張った形態から丸みを帯びた形態へ、その丸みを帯びた花卉の先端中央に切り込みを入れ、装飾性を高めた形態へと変化する⁶⁾という3段階の変遷を見出した。井鍋氏は花卉の形状とその数により、更に細かい6形態に分類した⁷⁾。

Ⅲ. 奥山1号墳出土の両頭金具

両頭金具はいずれも鉄製で、金銀等による装飾は施されていない。最大の特徴はその頭部形状にあり、頭部平面形が三角形、その断面形が長方形を呈している点である。一般的に多く見られる両頭金具は、頭部平面形が半球形、その断面形が円形であり、奥山1号墳のような三角形の頭部を持つ両頭金具は非常に珍しい。奥山1号墳の両頭金具を観察すると、一方の頭部はきれいに整形された三角形であるのに対し、もう一方の頭部はやや不整形で、三角形というよりは菱形に近い形状を呈している。この形状の違いは、整った三角形の頭部が弓への装着以前に成形されたのに対し、不整形な菱形の頭部が弓への装着後に成形されたことによる違いと推察される。

奥山1号墳の両頭金具の全長は概ね3.5cm前後（片方の頭部を欠損している26は残存長で2.6cm）、筒部の長さは2cm前後、筒部径は0.6cm程である。筒部には横方向の木質がわずかに遺存していることから、両頭金具が弓に装着されていたことは確実と言える。両頭金具が装着されていた部分の弓幅は約2cm、弓本体に穿たれた孔は直径0.6cm前後であることが両頭金具から読み取れる。また、両頭棒の直径は約0.35cmと筒部径よりもひとまわり小さく、両頭棒は筒の中で動ける状態であったことが分かる。花卉部については残りがよくないが、概ね4箇所に刻みが入れられていたようである。

Ⅳ. 大阪府内で出土した両頭金具

大阪府内で両頭金具が確認されている古墳は、奥山1号墳を除いて4例を数える⁸⁾。図49は奥山1号墳から出土した両頭金具と、大阪府内で出土した両頭金具を掲載したものである。以下、それらの古墳の概要と出土した両頭金具について述べていく。

① 峯ヶ塚古墳（羽曳野市所在）⁹⁾

全長96mの前方後円墳で、古市古墳群の中でも南西部に位置する。古墳復元整備に伴う発掘調査において、土器や埴輪をはじめ、青銅鏡や装身具、武器・武具、馬具、工具等総数3,500点を越える遺物が出

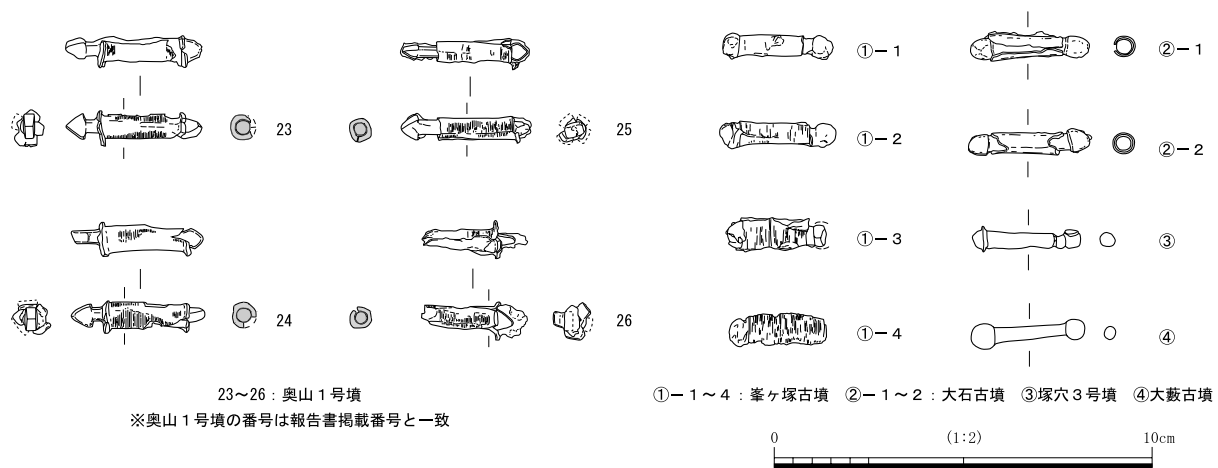


図49 大阪府内出土の両頭金具

土した。特筆すべきは鉄鏃や両頭金具の他に、盛矢具と思われる部材が出土している点である。部材には鉄地金銅張と鉄製があることから、金銅製と鉄製の2種類の盛矢具が弓と共に副葬されたと推測される。同古墳は5世紀末葉から6世紀初葉に位置付けられる。

両頭金具は盗掘埋戻し土中から4点確認された。全長2.5~3.1cm、筒部長は1.7~2.0cm、筒部径は1・2が0.55cm、3・4はやや大きく0.8cmを測る。いずれの筒部にも横方向の木質が遺存している。報告書本文では、頭部は「直径約6mmの球形」とあり、半球形の頭部と考えられる。また頭部には「黒色の膜状のものが認められ、本体と共に黒漆などで装飾された可能性が考えられる。」とされている。

②大石古墳¹⁰⁾ (八尾市所在)

大石古墳は高安古墳群の1基で、無袖式の横穴式石室を主体部とする。出土遺物には須恵器や土師器の他に装飾器台、武器、馬具や装身具がある。同古墳からは銀象嵌を施した刀装具が出土しており、高安古墳群の中では2例目となる。古墳の時期は6世紀後半~7世紀初頭に比定される。

報告書では不明鉄製品として扱われ、馬具の留金具等の用途が想定されているが、その構造や形状、大きさ等から両頭金具と考えて差し支えないだろう。出土した両頭金具は2点で、全長約3.1cm、筒部長は1.8~1.9cm、筒部径は0.5~0.7cmを測る。実測図からは、半球形の頭部であることがうかがえる。筒部の木質の有無については記載されていないため、不明である。

③塚穴3号墳¹¹⁾ (高槻市所在)

塚穴古墳群のうちの1基で、直径約22mの円墳である。主体部である片袖式の横穴式石室からは、須恵器や土師器、装身具、武器等が出土している。同古墳では6世紀後半に初葬が行われ、その後7世紀初頭まで追葬が行われたと考えられる。

出土した両頭金具は1点で、全長2.8cm、筒部長2.0cm、筒部径は0.4cmを測る。両頭金具の詳細について述べられていないが、実測図からは丸みのある頭部であることがうかがえる。

④大藪古墳¹²⁾ (東大阪市所在)

11体の人骨が検出されたことで知られる後期古墳で、右片袖式の横穴式石室を主体部とする。

両頭金具と考えられる鉄製品は8点出土しているが、報告書では留金具とされている。実測図では両頭金具の筒部がなく、両頭棒のみに思える。この留金具についての詳細な記述がないため定かではないが、弓本体の腐朽により筒部まで欠損した可能性が考えられる。全長は概ね3cmを測る。

これらの両頭金具のいずれも全長3cm前後、筒部長2cm前後、筒部径にはややばらつきがあるものの

概ね0.4～0.6cmであり、大きさについては奥山1号墳のものと大差はない。しかし、その頭部を見ると形状の違いは明白である。①～④の両頭金具の頭部はいずれも半球形もしくはそれに近い形状と考えられ、三角形の頭部はどの両頭金具にも見られない。また、①～③の両頭金具については明確な花卉部が確認できない。欠損したような痕跡は図中では確認できず、当初から花卉部が作られなかった可能性も考えられる。

V. まとめ

奥山1号墳出土の両頭金具と大阪府内で出土した①～③とを比較しても、大きさや構造に大きな差は見られない(④については筒部が消滅し両頭棒のみ遺存したものと推測される)。しかし、頭部形状には三角形と半球形という明らかな違いが認められる。大阪府内に所在する古墳で、三角形の頭部を持つ両頭金具が出土しているのは現状では奥山1号墳だけであり、その特異性が際立っている。

また、両頭金具には金銅装のものと鉄製のものの二者があり、鉄製の両頭金具の出現は、峯ヶ塚古墳の例から5世紀末葉から6世紀初頭まではさかのぼることが判明した。現状では鉄製のものに比べ、金銅装の両頭金具の出土量が極端に少なく、材質の違いが時期差に結び付くとは断定できない。今後の資料の増加を待って検討を行なう必要がある。(小西絵美)

註

- 1) 市毛 勲 1978「古墳出土の鉄製留金形小品について－その名称と用途をめぐって－」『古代学研究』87
- 2) 田中新史 1979「古墳出土の飾弓－鋌飾りの弓の出現と展開－」『伊知波良』1
- 3) 福島県いわき市文化教育事業団 1988『小申田横穴群』いわき市埋蔵文化財調査報告書第20冊
- 4) 前掲註3)
- 5) 前掲註1)
- 6) 前掲註2)
- 7) 井鍋誉之 2003「静岡県内の飾り弓について」『研究紀要』第10号(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 8) 両頭金具は小さい部品のため見落とされている場合もあり、掲載した4基の古墳以外にも、両頭金具が出土している古墳がある可能性は十分考えられる。
- 9) 羽曳野市教育委員会 2002『史跡古市古墳群 峯ヶ塚古墳後円部発掘調査報告書』羽曳野市埋蔵文化財調査報告書第48号
- 10) 財団法人 八尾市文化財調査研究会 1995『高安古墳群 大石古墳』(財)八尾市文化財調査研究会報告44
- 11) 高槻市教育委員会 1993『塚穴古墳群』高槻市文化財調査報告書第16冊
- 12) 大阪府教育委員会 1953『金山古墳および大藪古墳の調査』大阪府文化財調査報告第2輯

第5章 まとめ

第3・4章では、寝屋南遺跡・奥山遺跡の調査で確認された遺構・遺物についての詳細を報告した。一部重複する箇所もあるが、本章ではあらためて調査で判明した事柄について列記し、またそれらについて若干の考察を加え、まとめとしたい。

第1節 寝屋南遺跡

集落の構成と時期 寝屋南遺跡は、これまで土器やサヌカイト片などの遺物が採集されてはいたが、本格的な発掘調査が行われておらず、その実態は不明であった。今回の調査によってはじめて古代の集落遺跡であることが明らかとなった。

その集落は、東西にのびる尾根の頂部に営まれており、竪穴住居2棟と掘立柱建物5棟によって構成されている。建物の軸は東西南北の方位に揃え、それぞれが計画的に整然と配置されている。

集落が営まれた時期は、掘立柱建物の柱穴や竪穴住居の壁溝出土の土器によって、7世紀中葉であることが判明した。大尾遺跡や太秦遺跡、寝屋東遺跡など周辺の遺跡で見つかっている集落は、建て替えを繰り返しながら8世紀まで存続することが出土遺物からも確認されているが、当遺跡からは8世紀はもちろん、7世紀後葉の遺物も発見されていない。また、建物跡等の遺構には建て替えが行なわれた様子も認められない。このことから、当遺跡の集落は7世紀中葉のごく限られた一時期、かつ短期間の集落であったことがうかがえる。

竪穴住居と掘立柱建物とが併存することについては、やや特異にも感じるが、同様の例は、平成15年度に実施した隣の太秦遺跡でもみられ、ここでは掘立柱建物10棟と竪穴住居5棟が確認されている。この時期、この地域では、ひとつの集落の中に竪穴住居と掘立柱建物とが並び建つという姿が、ごく一般的な集落の姿であったようである。

平成13・14年度に調査した高宮遺跡の報告の中で、この地域の古代集落について「枚方丘陵縁辺部の小尾根上には5・6棟ほどからなる屋敷地が点在していたことになる。それらはやはり東西南北方向軸に沿う傾向をもっていた¹⁾」と総括されている。今回確認された寝屋南遺跡の集落は、まさにその指摘どおりの集落といえよう。

近接する高宮遺跡や大尾遺跡・太秦遺跡などから発見されている古代の集落については、その存続時期や建物の向きなどから、近接する白鳳期創建の高宮廃寺との関係が少なからず指摘されている²⁾。今回発見された寝屋南遺跡の集落も、建物は上記の3遺跡と同じく東西南北の方位を意識して建てられているが、その時期は高宮廃寺の造営が始まる直前の7世紀中葉、それもごく短期間であったことがわかっている。また、高宮遺跡から太秦遺跡までが、高宮廃寺を望める同じ丘陵上に立地しているのに対して、寝屋南遺跡は打上川によって大きく分断された北東側の別の丘陵上に築かれている。集落が営まれた時期やその立地などから、当遺跡の集落については高宮廃寺との関係は薄いのではないかと考えている。

斜面地の調査 確認調査では、丘陵の西斜面裾から焼土や炭の堆積が確認され、出土した須恵器に溶着したものが含まれていたことなどから、丘陵斜面に窯跡が存在している可能性が指摘されていた³⁾。その成果に基づき、今回周辺斜面の調査を実施したが、灰原も含め、窯跡を示す遺構は確認できなかった。なお、西斜面の裾部からは、須恵器・土師器などが出土しているが、これらについては、おそらく尾根

上の集落から転落したもの、あるいは廃棄されたものと考えられる。

丘陵東側の斜面、および斜面裾の調査区からは中世以降の遺物以外は出土しない。しかしこれは集落の範囲を推定する上で非常に重要な成果といえる。このことから、平坦部のうちの東半部は、後世に削平されたために遺構が稀薄なのではなく、当初から建物等の遺構が築かれていなかったと復原できる。

第2節 奥山遺跡

横穴式石室 今回の調査によって、平成14年度の確認調査で一部を検出していた古墳（奥山1号墳）が横穴式石室を埋葬施設とする円墳であることが確認された。この結果、奥山1号墳は寝屋川市内では寝屋古墳に次いで2例目となる横穴式石室となった。

確認調査の段階では、周辺からさらに多くの古墳が発見される可能性があったことから、奥山1号墳という名称が与えられたが、調査の結果、今回の調査区内からは奥山1号墳以外の古墳は確認されなかった。後期の群集墳によくみられる、尾根の頂部から斜面にまで群を成して築かれるようなものではなく、単独で存在する古墳であることが明らかとなった。ただし第2章でも記したように、寝屋古墳が、同じ尾根上の東へ約400mの地点に、また本格的な調査は実施されていないが、太秦1号墳が同じ尾根の西先端部に位置していることは注意したい。奥山1号墳が発見された打上川右岸の尾根筋には、その頂部に何箇所か開けた場所があることが地図上で確認できる。そういった場所を利用して、奥山1号墳のような古墳がある程度の距離を隔てて点々と築かれていた可能性もある。

墳丘の規模は直径約18mで、周りには周濠がめぐっており、周濠まで含めれば直径約25mとなる。埴輪や葺石は確認されていない。また周濠の西側には尾根の斜面に向かって周濠の排水を目的とする排水溝が設けられている。

埋葬施設は西に開口する横穴式石室で、玄室が墳丘の中央に位置するように築かれている。天井石や奥壁は後世の削平や攪乱によって大きく破壊され残っていない。側壁の石材も多くが抜き取られているが、その抜き取り痕跡から北側に袖が付く右片袖式の石室になると推定でき、玄室の規模は長さ約4.4m、幅は1.65～1.8m、羨道の規模は長さ約4.95m、幅は1.35～1.45mに復原できる。玄室の幅に対して奥行きが長いことがこの石室の特徴で、同じ北河内地域に所在する白雉塚古墳（枚方市）、寺・中山古墳群第3号墳（交野市）、城ヶ谷2号墳（大東市）などの古墳と比較⁴⁾しても、その特徴が顕著である。これは、築造当初から追葬を強く意識した結果と考えることができる。

耳環からみた棺の配置 石室内からは耳環が合計11点出土した。その寸法や被覆材の種類から2つずつのセット関係が判明し、これによって当古墳には少なくとも6人が埋葬されていたことが明らかとなった。その出土位置から棺が置かれていた位置を復原すると、図50のⅠ～Ⅵのようなになる。まず、袖が付く右側壁側のもっとも奥壁寄りに初葬時の棺Ⅰが納められ、つづいてそのすぐ横に接するように棺Ⅱが納置される。左側壁側は副葬品を置くためのスペースであろうか。なおこのⅠとⅡは同時であった可能性も考えられる。棺Ⅰに伴う耳環は14・15で、棺Ⅱに伴う耳環は16・17と考えている。その耳環の位置からこの2体は羨道側に頭を向けていたと推測できる。その後棺Ⅲの納置にあたって、奥壁寄りがいっぱいとなっているため、棺Ⅰを棺Ⅱ側に片付けたと考えられる。左側壁寄りに人骨がまとまっているのはこのためであろう。この際に、棺Ⅱの上に棺Ⅰを重ねたのか、棺Ⅰの中身のみ棺Ⅱの中に入れて、棺は石室外に出されたのか、あるいは腐りかけた棺ごとⅡの中に入れたのか、そのあたりはよくわからない。とにかく棺Ⅰを片付けた後に羨道側にややらずらして棺Ⅲが納置されたと推定できる。この棺Ⅲに

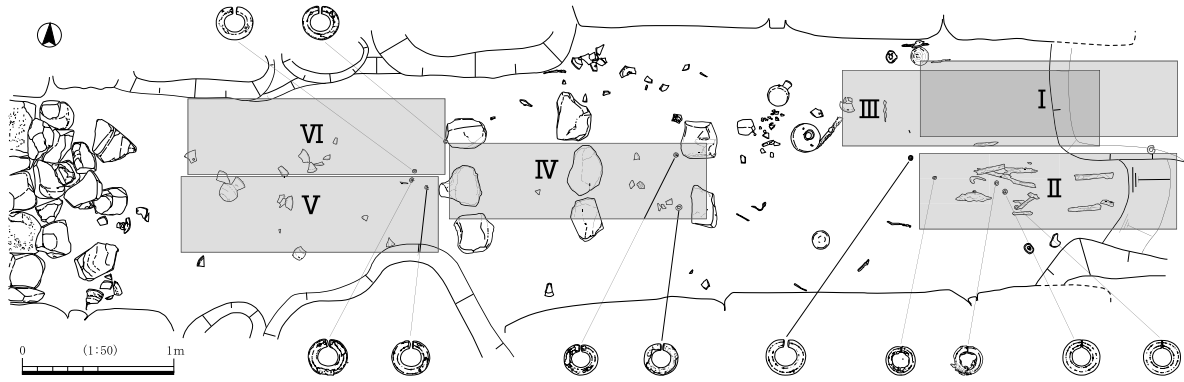


図50 棺の位置復原図

伴う耳環はおそらく18であったと思われるが、対となる1点は失われており、頭部の向きも不明である。つづいて棺Ⅳが納置されるが、この段階では玄室の半分以上が棺で埋まっているため、玄室から羨道へはみ出すような状態で置かざるを得ない。玄門部中央に棺台を設け、それまでの3棺よりも丁寧な方法で棺Ⅳが納置された。これに伴う耳環は12・13であり、棺台の奥側から見つかっていることから、頭部が奥壁側を向いていたことがわかる。最後が棺Ⅴと棺Ⅵであるが、棺Ⅳにより玄門が塞がれているため、両者はそれよりも奥へ入ることができず、棺台手前の羨道部に置くこととなる。耳環が棺台手前に4点まとまっていることから、棺Ⅴ・Ⅵともに頭部が奥壁側を向いていたことについては間違いないと思われるが、棺ⅤとⅥのどちらが先に埋葬されたのかまではわからない。この4点の耳環は8と9、10と11というセット関係になるが、いずれも塗金であり、サイズもよく似ている。近接して検出されていることから、1棺の中に2体が埋葬されていたという可能性も考えておきたい。

以上のように6棺が安置された位置と順番を推定したが、石室や周濠からは棺を留めていた鉄釘は1本も見つかっていない。わざわざ棺台が設けられていることから、棺に入れられていなかったとは考えられない。木製の楔等で柩を留める構造の組合せ式の木棺、あるいは刳抜式の木棺が使われていたのではないかと考えられる。

出土土器 石室内および周濠内からは数多くの土師器・須恵器が出土した。須恵器が圧倒的に多い。

石室内出土の土器は完形品、あるいは接合によって完形になるものが多く、追葬に伴う副葬品であったと考えられる。提瓶・平瓶などの瓶類が主で、ボタン状の突起を付すなど当古墳出土の土器の中ではもっとも新しい7世紀初頭の様相を示している。これに対し周濠出土の土器は、石室が開口する西側にまとまっており、石室内から掻き出されたような状態で出土していた。上記の棺Ⅰ・Ⅱ、あるいは棺Ⅲに伴う土器が追葬の際に石室外に廃棄されたものと考えられる。玄室の奥壁寄りに土器がみられないのはこのためであろう。高杯が多いことが特徴で、若干の時期差が認められるが、大半は6世紀後葉に位置するものである。

このように、出土土器からは奥山1号墳は6世紀後葉に築造され、7世紀初頭まで追葬が繰り返された古墳であったことが明らかとなったが、石室内に残されていた追葬に伴うと考えられる7世紀初頭の土器が、棺Ⅳが置かれた棺台よりも奥で見つかっていることは注意したい。これは当古墳出土の土器の中でもっとも新しい段階の土器が、最終埋葬に伴うものではなく、途中の棺Ⅳに伴うものであることを示している。上記のとおり、最終埋葬である棺Ⅴ・Ⅵは棺台より手前の羨道部に置かれたと考えているが、その羨道部には遺物が少なく、また土器が据え置かれたような状況も観察できなかった。棺Ⅳ後方の土器群よりも新しい段階の土器が検出されていないことから、棺Ⅴ・Ⅵには土器などの副葬品が伴っ

ていなかった可能性が高い。そうした場合、この古墳への最終埋葬の時期は7世紀初頭よりもさらに下ることになる。

金属製品 土器のほかに、金属製品も多数出土している。刀の鐔・両頭金具・刀子・鉄鏃・鉾などの武器類、鉄斧や鉋などの工具類、鏡板・責金具・爪形金具などの馬具類などその種類も多い。このうち武器・馬具類はその出土位置が玄室に集中し、特に馬具は奥壁際に限られることから、古墳築造の契機となった人物、上記でいう棺Ⅰや棺Ⅱのための副葬品であった可能性が高い。

鐔は側面に象嵌が施されていることが確認された。象嵌鐔は大阪府下では出土例が少なく、耳象嵌鐔は当古墳以外に枚方市宇山1号墳⁵⁾、八尾市大石古墳⁶⁾、岸和田市三田古墳⁷⁾などの3点だけである。これらの象嵌紋様を比較すると、当古墳以外の3点は、いずれも波状文と勾玉形文（C字形文）を組み合わせたものであり、当古墳の二重半円文とは紋様構成を明らかに異にする。入手ルート等に違いがあったのであろうか。なお、近畿地方における古墳時代後期の直刀の生産と流通を研究した豊島直博氏によると「象嵌鏢と定型透鏢は畿内で生産され、配布された鏢であると推定した。特に象嵌鏢は特定地域に濃密に分布し、配布の様相に中央政権の政治的な意図が読みとれる。（中略）それらの配布を通じて地方支配を進めていったと考えられる。」⁸⁾としており、奥山1号墳の被葬者像を考える上で参考になろう。

また両頭金具が出土したことから、当古墳には矢だけではなく、弓も副葬されていたことが明らかとなった。またその弓の幹幅は約2.0cmであったことも、両頭金具の花弁状に開いた部位から復原できた。両頭金具の弓幹への装着方法については、金具の構造から①弓幹に孔をあけ、筒状に巻かれた金具をその孔に差込む。②弓幹よりも外側に出た筒の端部に切り込みを入れ、花弁状に開き脱落しないようにする。③さらにその内側に、片側の頭部が完成した芯棒を挿入し、もう片側の端部も潰して脱落しないようにする。④潰した端部を三角形に整える。という工程が復原できる（図51）。ただし頭部の形状については、これまでに報告されているものの多くは、たいていが半球状であり、当古墳のような扁平な三角形ではない。極めて稀な例であり、当古墳出土品の特徴といえる。この両頭金具を伴う飾り弓は、象嵌鐔同様に大阪府内では八尾市大石古墳⁹⁾ほか数例しか知られていない。儀仗用である可能性もあるが、その出土数の少ないことからみて特別な製品であったと考えられる。このことも奥山1号墳の被葬者像を考える上で参考になろう。

21点出土した長頸鏃の中には、篋被部や茎部を意図的に曲げたと考えられるものが6点含まれていた。出土状況からは、その目的をうかがうことはできなかったが、曲げられた6点はすべて棘状関に近い台形関の鏃であり、台形関を呈する3点が曲げられていないことは注意しておきたい。追葬の際に、既に

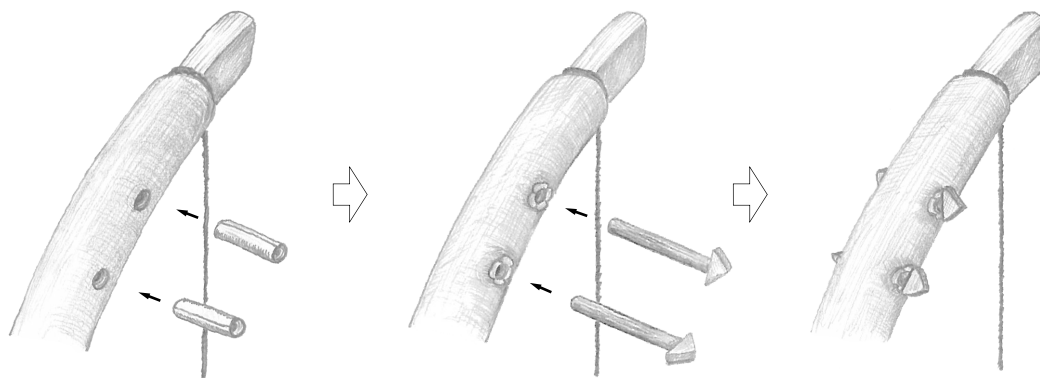


図51 両頭金具装着方法復原図

副葬されていたものを曲げたのかもしれない。すべての古墳をあたったわけではないが、手元にある報告書を見ても、岡山県定西塚古墳¹⁰⁾・兵庫県東山古墳群¹¹⁾・大阪府大石古墳¹²⁾などで同様の例が報告されている。また奈良県牧野古墳ではコの字状に曲げられた鉄刀の報告もある¹²⁾。武器を曲げるという行為がいつの段階で、またなぜ行なわれたのか今後明らかにしていく必要がある。

なお、鉄鏃は一箇所にまとまることなく散在していたが、これは追葬時の土器類を片付ける際に乱されたためと考えている。

古墳の被葬者像 最後に奥山1号墳の被葬者像について若干触れておきたい。ここで注目したいのは、打上川を挟んで奥山遺跡の対岸の丘陵上に位置する太秦遺跡検出の土壙（木棺）墓である。平成15年度の調査で確認されたもので、長さ2m前後、幅1m前後の土壙（木棺）墓がまとまって5基と、そのうちの1基からは木棺の痕跡と須恵器蓋杯、銀環1点、長頸鏃2点が検出されている。その時期は6世紀後半とされており、奥山1号墳が築かれた時期とちょうど重なる。6世紀後半という同じ時期であるにもかかわらず、一方では横穴式石室を埋葬施設とする円墳に葬られ、一方ではマウンドをもたない素掘りの土壙、あるいはその中に木棺を据えただけのものに葬られているのである。この違いは所属する集団の違いによるものと捉えることもできるが、奥山1号墳の石室の石材はわざわざ遠隔地から取り寄せるなどされており、その労力だけをみても、奥山1号墳の被葬者が集団内のかなりの有力者であったことがうかがわれる。また、副葬された品々を比較しても、そこには明らかな階層差を認めることができる。太秦遺跡の土壙墓に葬られた人々は、まったく副葬品をもっておらず、木棺墓に葬られた人物が、身に着けていた耳環1点のほかに、僅かに2点の土器と、2点の鉄鏃が副葬されているにすぎない。これに対し、奥山1号墳では、玉類や耳環などの装身具、象嵌鐔・弓矢・鉾などの武器類、工具類、それに金銅張の馬具など非常に豪華な副葬品が数多く供えられている。象嵌鐔、飾り弓の特殊性については前述のとおりである。これらが一人の被葬者のための副葬品であったかについては検討しなければならないが、いずれにせよ太秦遺跡の土壙（木棺）墓に比べ豪華な品々が供えられたことには変わりない。したがって、奥山1号墳の被葬者、とりわけ古墳築造の契機となった人物は、当地の有力氏族の首長クラスであったと考えられる。追葬された人々はその家族であろうか。

ただし、これほどの古墳であっても、近接する寝屋古墳と比較した場合、その石室の規模の違いは一見して明らかである。寝屋古墳は北河内最大規模の横穴式石室といわれており、一つ一つの石材を比べてもその大きさは奥山1号墳とは比べものにならない。寝屋古墳の被葬者をこの地域の盟主だとすれば、奥山1号墳の被葬者はそれに次ぐ立場の人物といえよう。

なおこの被葬者の居住地については、考古学的な物証がなく明らかでないが、石室が南に開口していないことから、南側の、打上・明和・高宮などの地域に求めるのは難しいと考えている。石室が西を向いていることから、居住地から古墳までのルートは、西の尾根筋上を通過していたと想定でき、当然居住地はその先にあるものと考えられる。現時点で考えられるのは高宮八丁遺跡から長保寺遺跡周辺ということになるのか。

註

- 1) 財団法人 大阪府文化財センター 2004.3 『高宮遺跡－遺構編－』（財）大阪府文化財センター調査報告書第115集
- 2) 財団法人 大阪府文化財センター 2004.3 『高宮遺跡－遺構編－』（財）大阪府文化財センター調査報告書第115集、同 2003.2 『大尾遺跡』（財）大阪府文化財センター調査報告書第92集、同 2005.2 『大尾遺跡Ⅱ』大阪府文化財センター調査報告書第125集、同 2006.3 『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』大阪府文化財センター調査報告書第143集
- 3) 財団法人 大阪府文化財センター 2003.2 『門真西地区、讃良郡条里遺跡西地区、讃良郡条里遺跡、大尾遺跡・太秦遺跡・太秦古墳群、打上遺跡、寝屋南遺跡、寝屋東遺跡、私部南遺跡、東倉治遺跡、津田城遺跡東地区』（財）大阪府文化財センター調査報告書第93集
- 4) 富山直人 2005.3 「横穴式石室の展開と地域性」 「奥山1号墳の発掘調査成果」 『歴史シンポジウム資料 横穴式石室から見た世界－北河内の古墳時代後期を考える－』 寝屋川市・寝屋川市教育委員会に北河内地域の横穴式石室が集成されている。
- 5) 三宅俊隆 1988 「枚方市「宇山一号墳、」 『地域文化誌 まんだ』 No.35号 まんだ編集部、四条畷市立歴史民俗資料館 2002 『第17回特別展 みどりの風と古墳－忍岡古墳 石室覆屋再建を記念して－』
- 6) 財団法人 八尾市文化財調査研究会 1995.3 『高安古墳群 大石古墳』 八尾市文化財調査研究会報告44
- 7) 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会 1993 『上フジ遺跡Ⅲ・三田古墳』（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第80輯
- 8) 豊島直博 2001.9 「古墳時代後期における直刀の生産と流通」 『考古学研究』 第48巻第2号（通巻190号） 考古学研究会
- 9) 前掲註6)
- 10) 新納泉・光本順編・北房町教育委員会発行 2001.3 『定東塚・西塚古墳』
- 11) 中町教育委員会・京都府立大学考古学研究室 1999.3 『東山古墳群Ⅰ』 中町文化財報告20、同 2001.3 『東山古墳群Ⅱ』 中町文化財報告25
- 12) 奈良県立橿原考古学研究所編・広陵町教育委員会発行 1987.11 『史跡 牧野古墳』（広陵町文化財調査報告第一冊）
- 13) 財団法人 大阪府文化財センター 2006.3 『太秦遺跡・太秦古墳群Ⅱ』 大阪府文化財センター調査報告書第143集

写真図版



1948.3.27 米軍撮影の空中写真 (M31-1-66) を使用 (国土地理院所有・財団法人日本地図センター発行)



1. 丘陵上平坦部トレンチ北半全景（北から）



2. 丘陵上平坦部トレンチ南半全景（東から）



1. 丘陵上平坦部トレンチ拡張区全景（北東から）



2. 西斜面北トレンチ全景（南西から）
3. 西斜面北トレンチ全景（南東から）



4. 西斜面南トレンチ全景（北東から）
5. 東斜面裾トレンチ全景（南から）



1. 東斜面1～4トレンチ全景（南から）



2. 東斜面1トレンチ全景（南から）



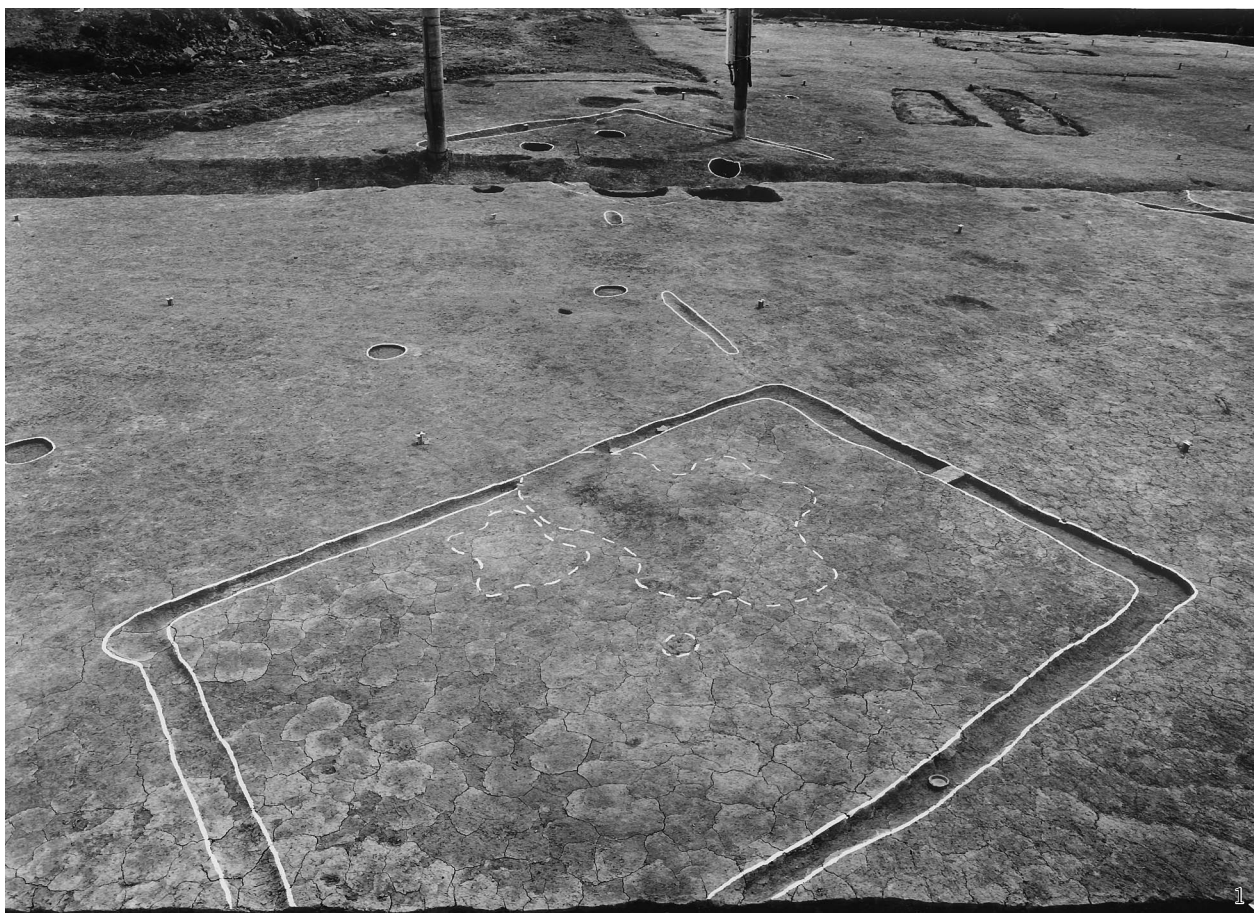
4. 東斜面3トレンチ全景（南から）



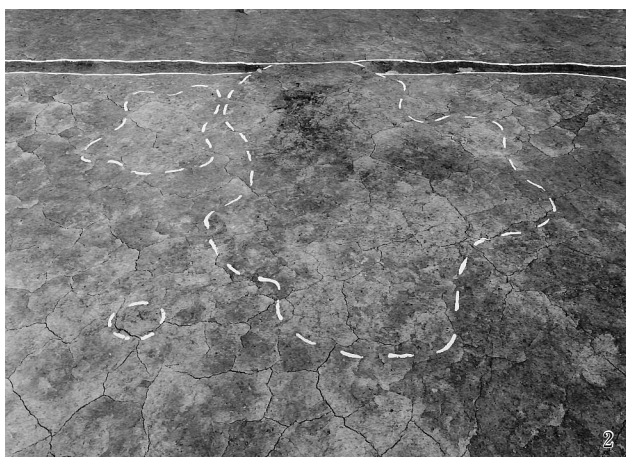
3. 東斜面2トレンチ全景（南から）



5. 東斜面4トレンチ全景（南から）



1. 竪穴住居 2 (奥は竪穴住居 1)



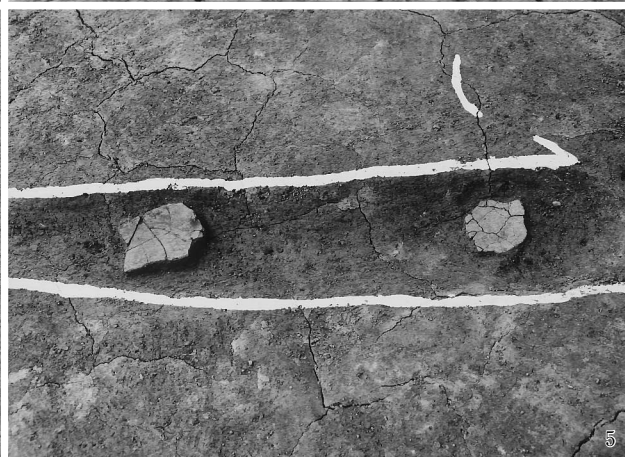
2



4



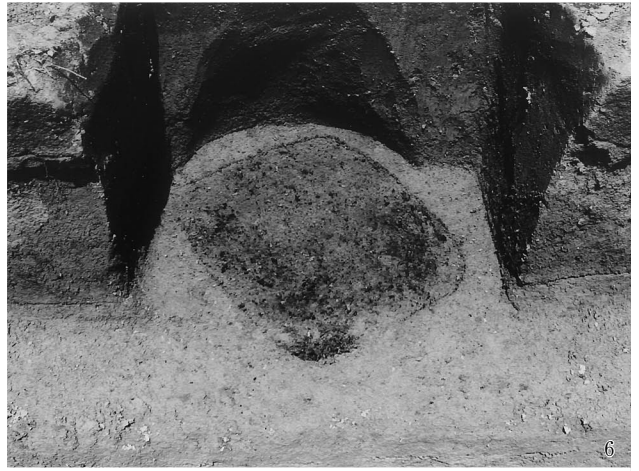
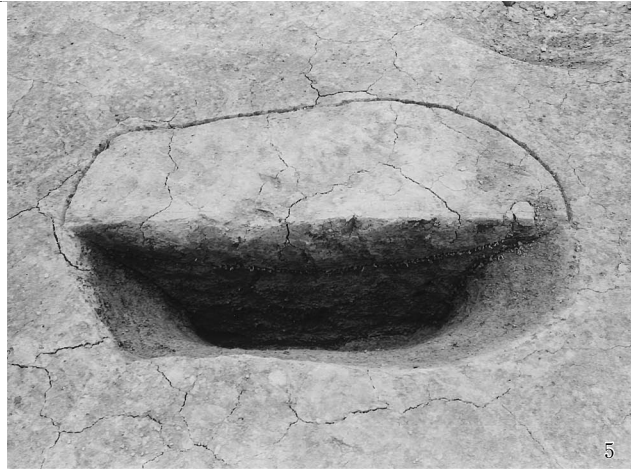
3



5

2. 竪穴住居 2 床面焼土
3. 竪穴住居 2 竈部

4. 竪穴住居 2 西壁溝土器出土状況
5. 竪穴住居 2 東壁溝土器出土状況

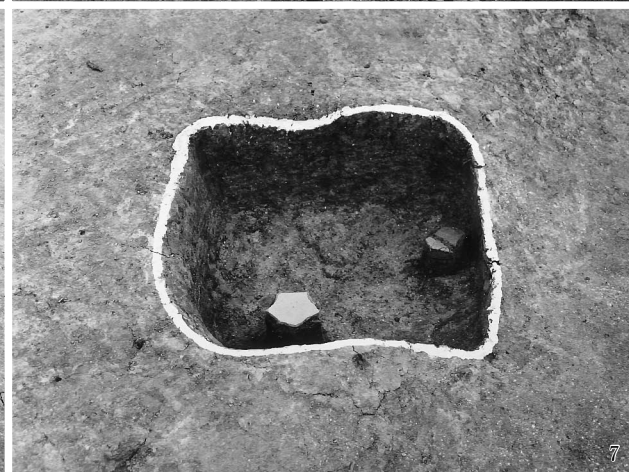


1. 竪穴住居 1
2. 堀 1

3. 41溝
4. 1 落ち込み

5. 4土坑
6. 36土坑

7. 42土坑
8. 掘立柱建物 3

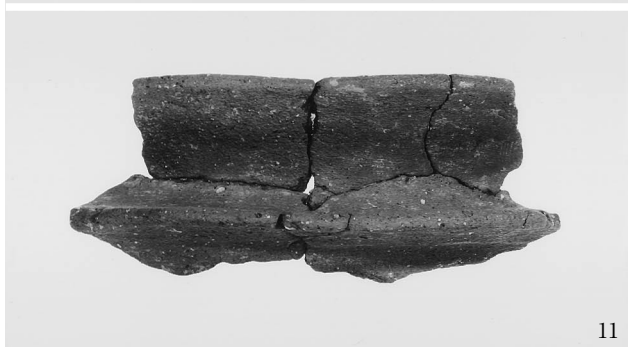


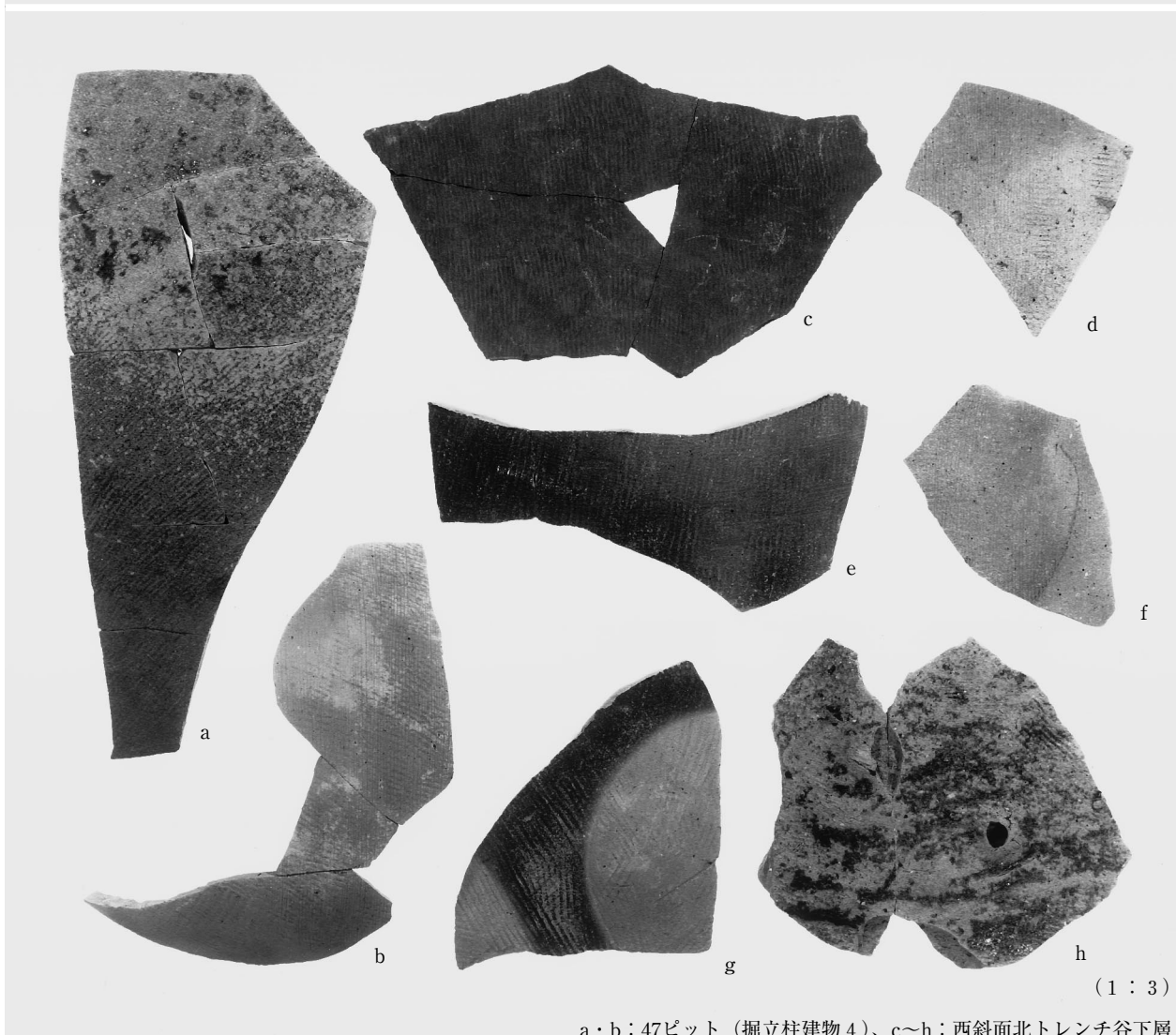
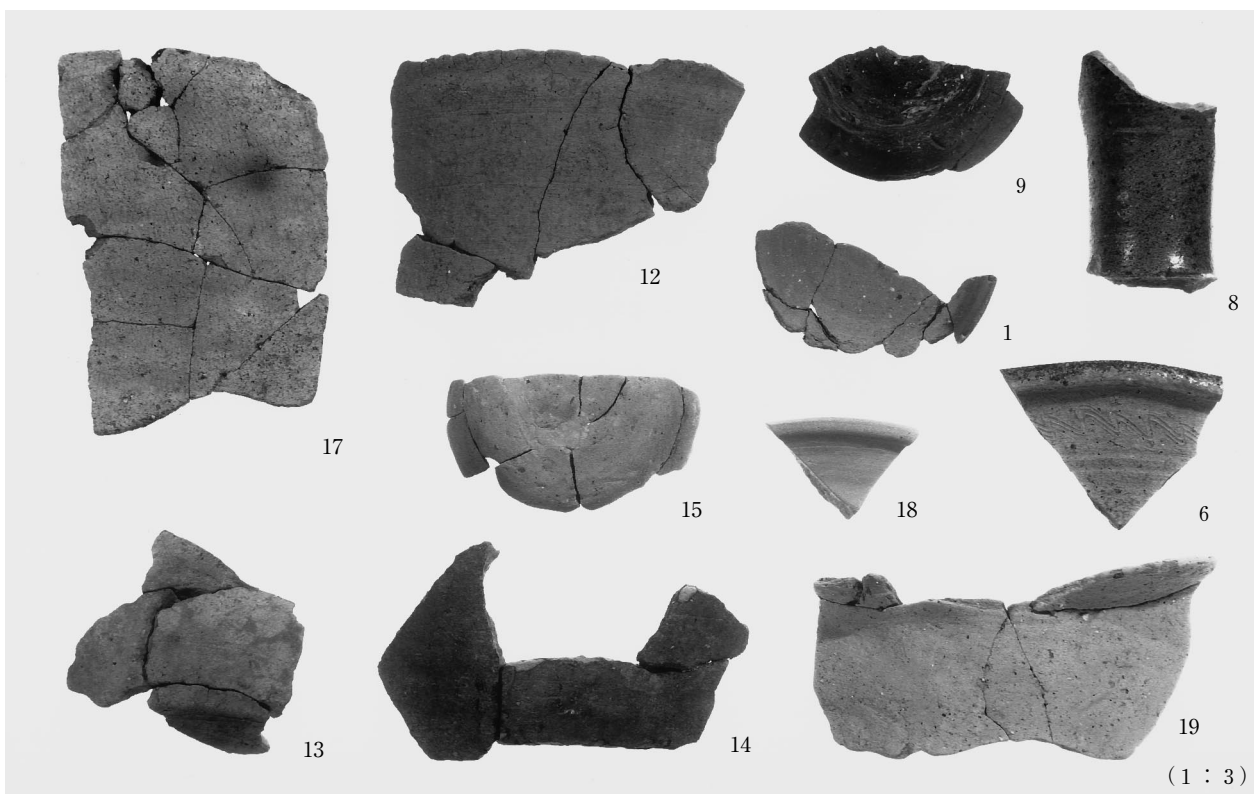
1. 掘立柱建物 4
2. 掘立柱建物 2

3. 18ピット土器出土状況
4. 19ピット土器出土状況

5. 掘立柱建物 1
6. 掘立柱建物 5

7. 45ピット土器出土状況
8. 47ピット土器出土状況





a・b: 47ピット (掘立柱建物4)、c~h: 西斜面北トレンチ谷下層



1. 調査前状況（西から）



2. 奥山1号墳全景（南東から）



1. 奥山1号墳全景（西から）



2. 排水溝



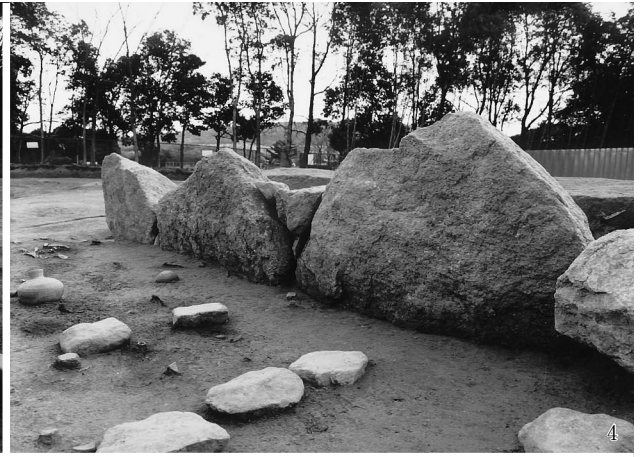
3. 周濠断面（北側）



4. 周濠断面（南西側）（奥は西側断面）



1. 奥山1号墳石室全景（西から）



2. 女室右側壁
3. 羨道右側壁

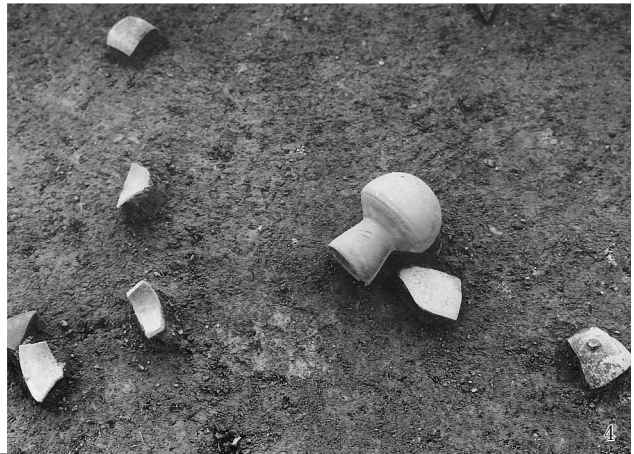
4. 女室左側壁
5. 羨道左側壁



1. 玄室全景 (西から)



2. 閉塞石最下段の石列



1. 周濠内遺物出土状況（開口部付近）

2. 周濠内遺物出土状況（北側）

3. 玄室床面遺物出土状況

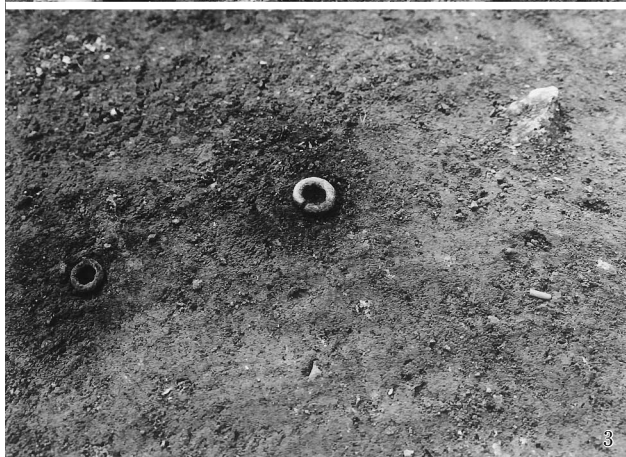
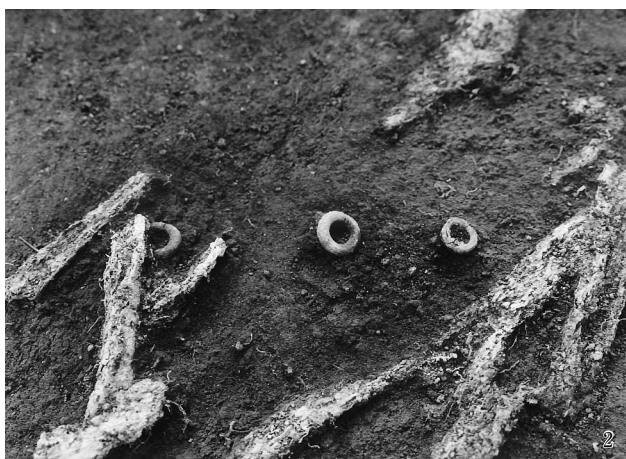
4. 羨道床面遺物出土状況



5. 玄室床面遺物出土状況



1. 玄室内人骨及び遺物出土状況



2. 耳環15・16・17出土状況
3. 耳環14・18と管玉出土状況



4. 耳環12・13出土状況
5. 耳環8～11出土状況



1. 焼土坑検出状況

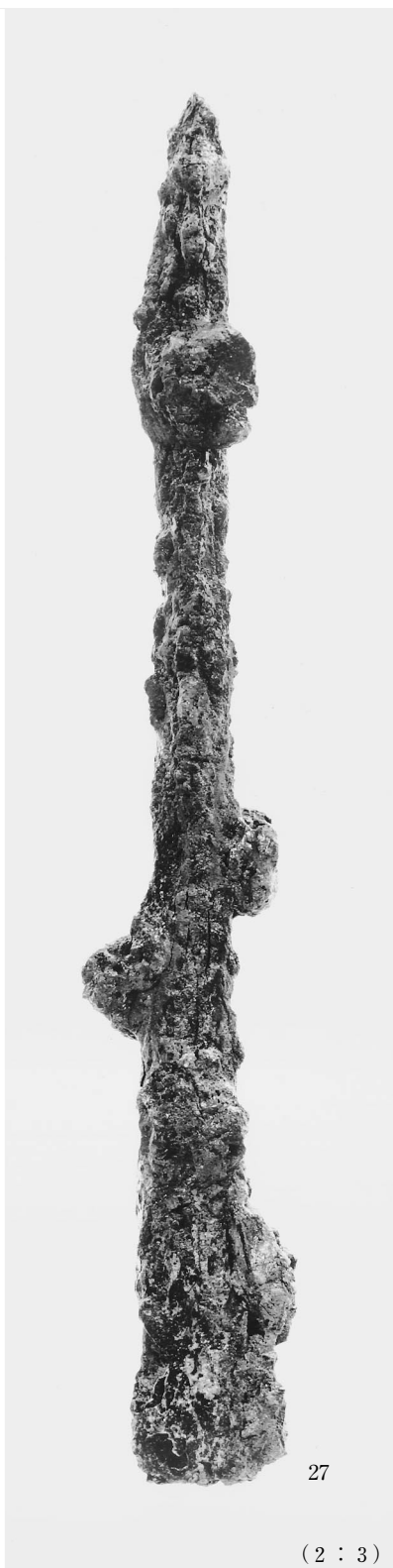
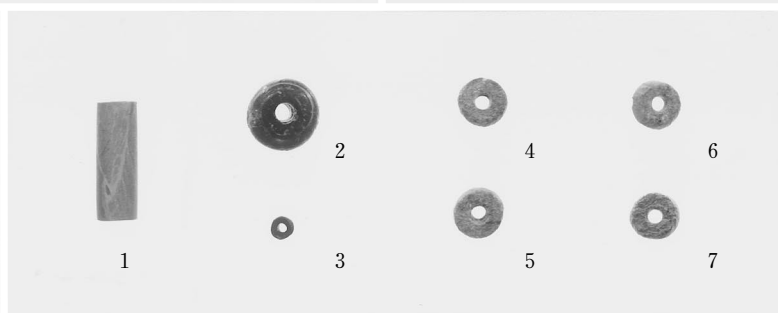
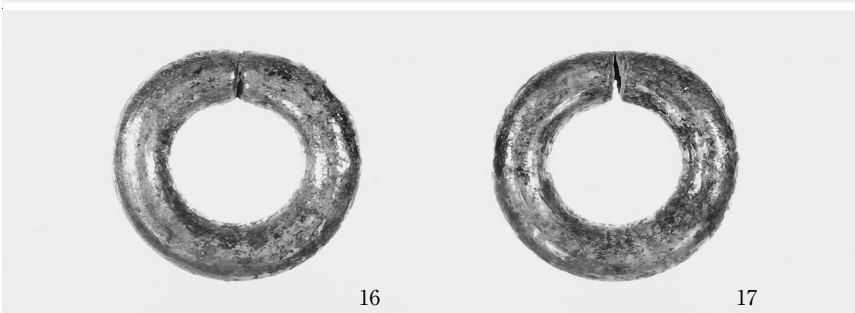
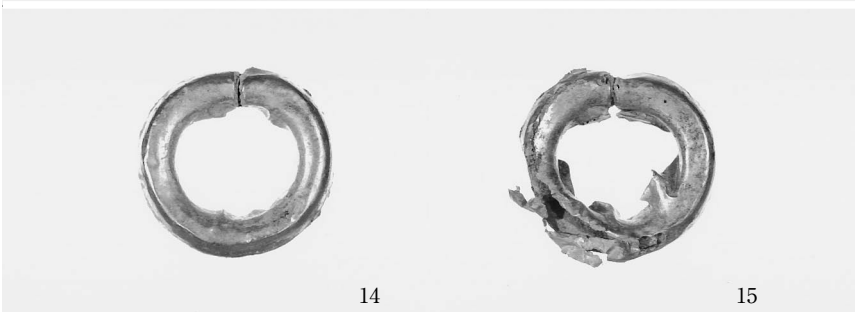
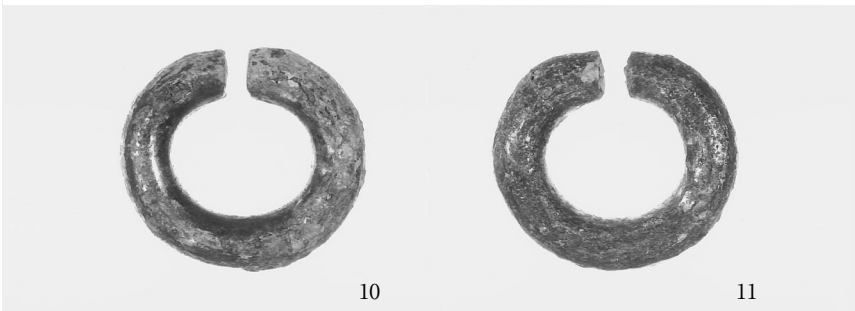
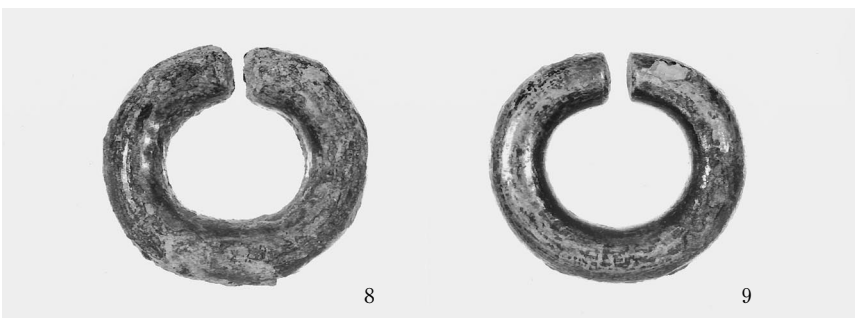


2. 石室石材破碎状況

3. 抜き取り穴への側壁横転状況

4. 側壁石材に残る楔痕跡

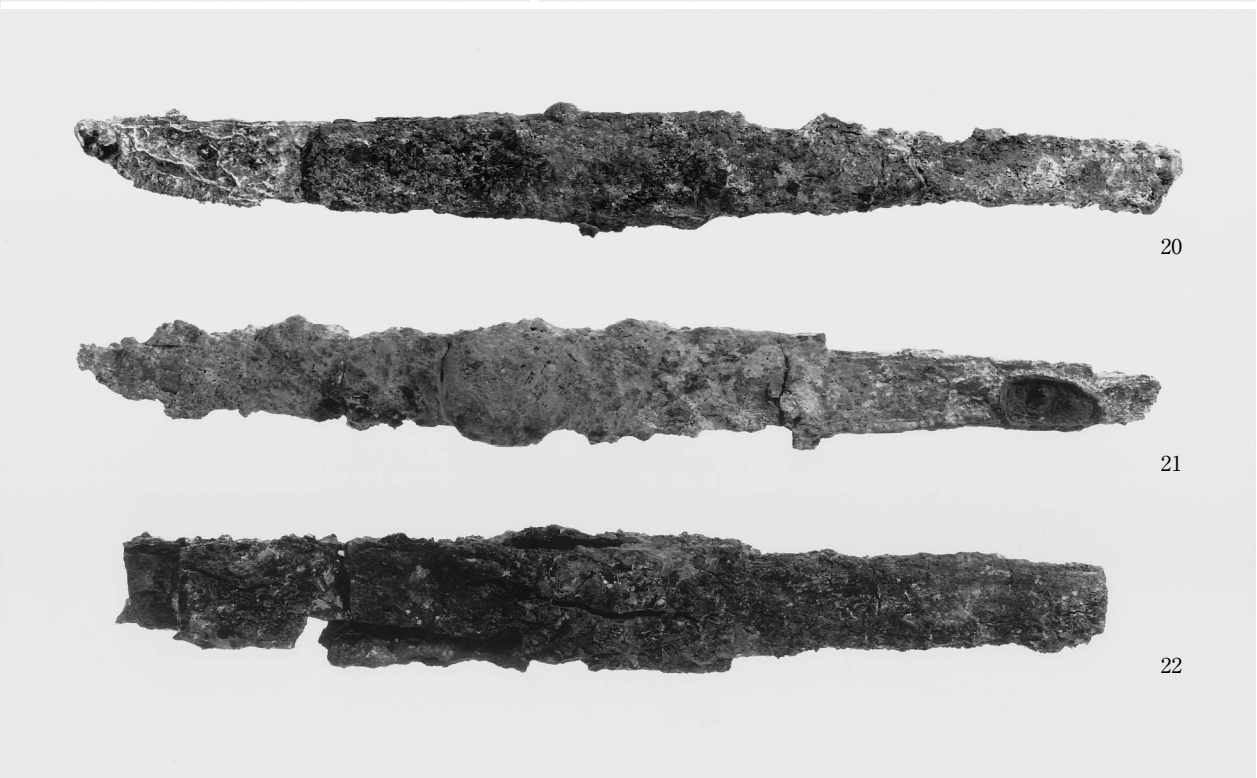
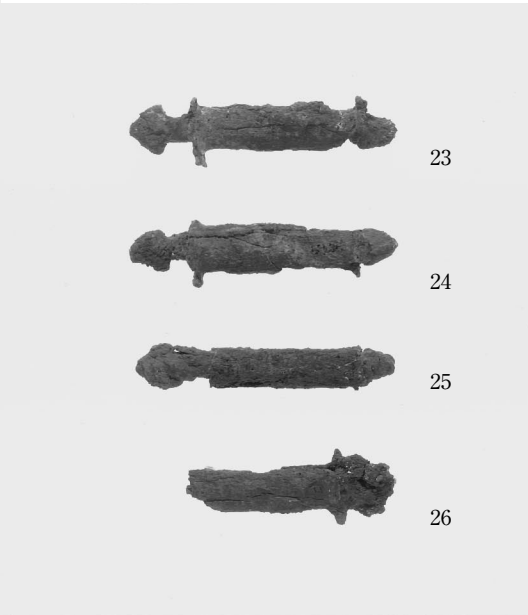
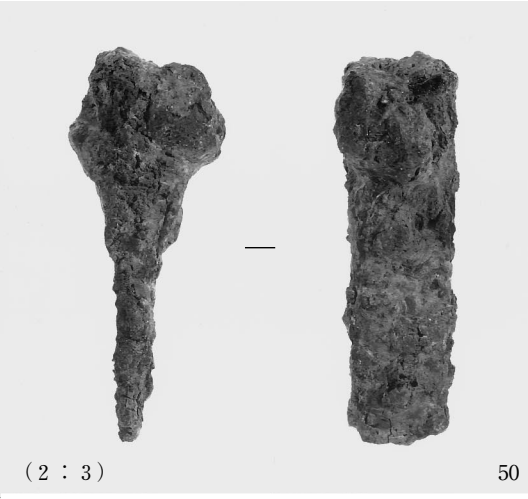
5. 側壁石材に残る楔痕跡

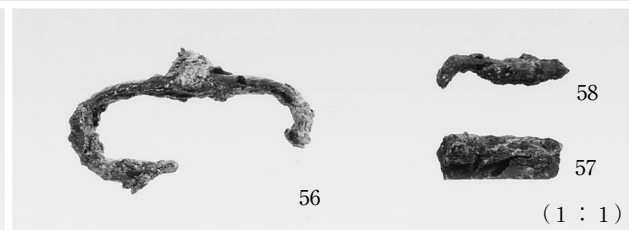
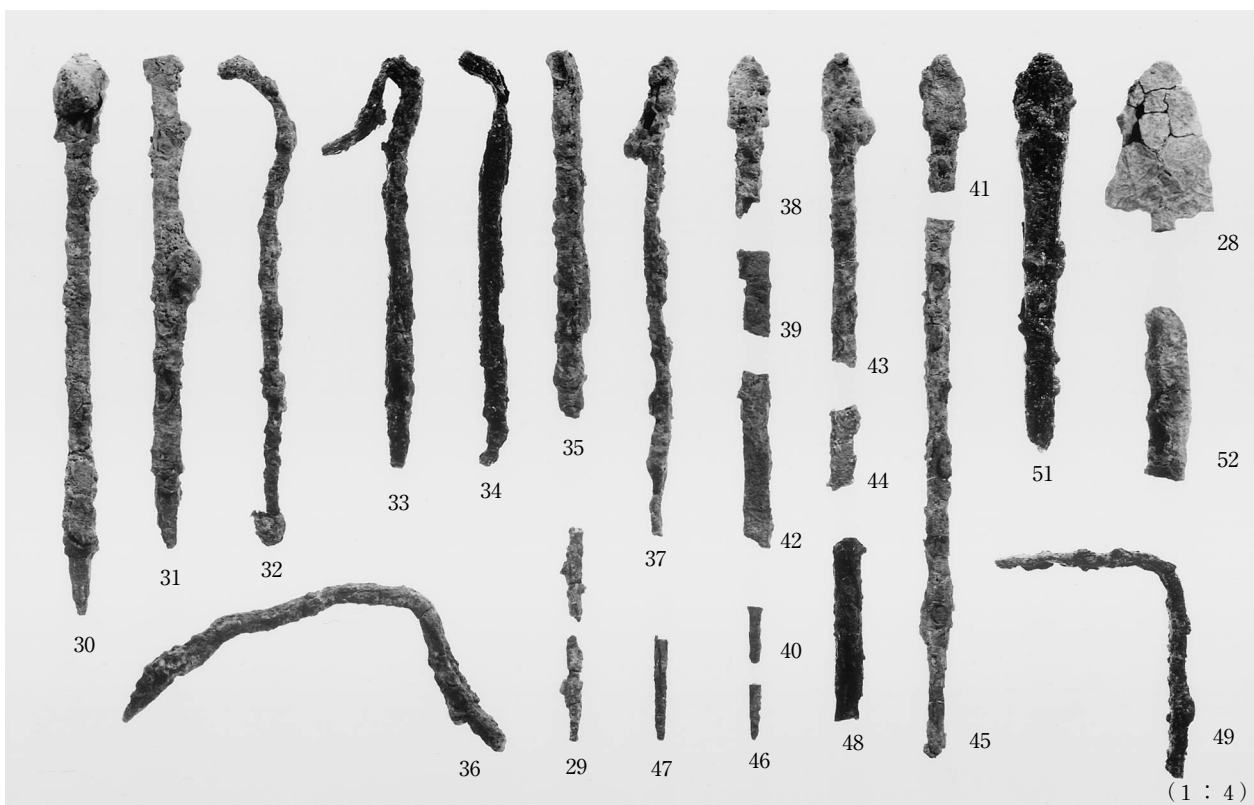


27

(2 : 3)

(27以外は原寸)













63



61



67



65



72



66



102

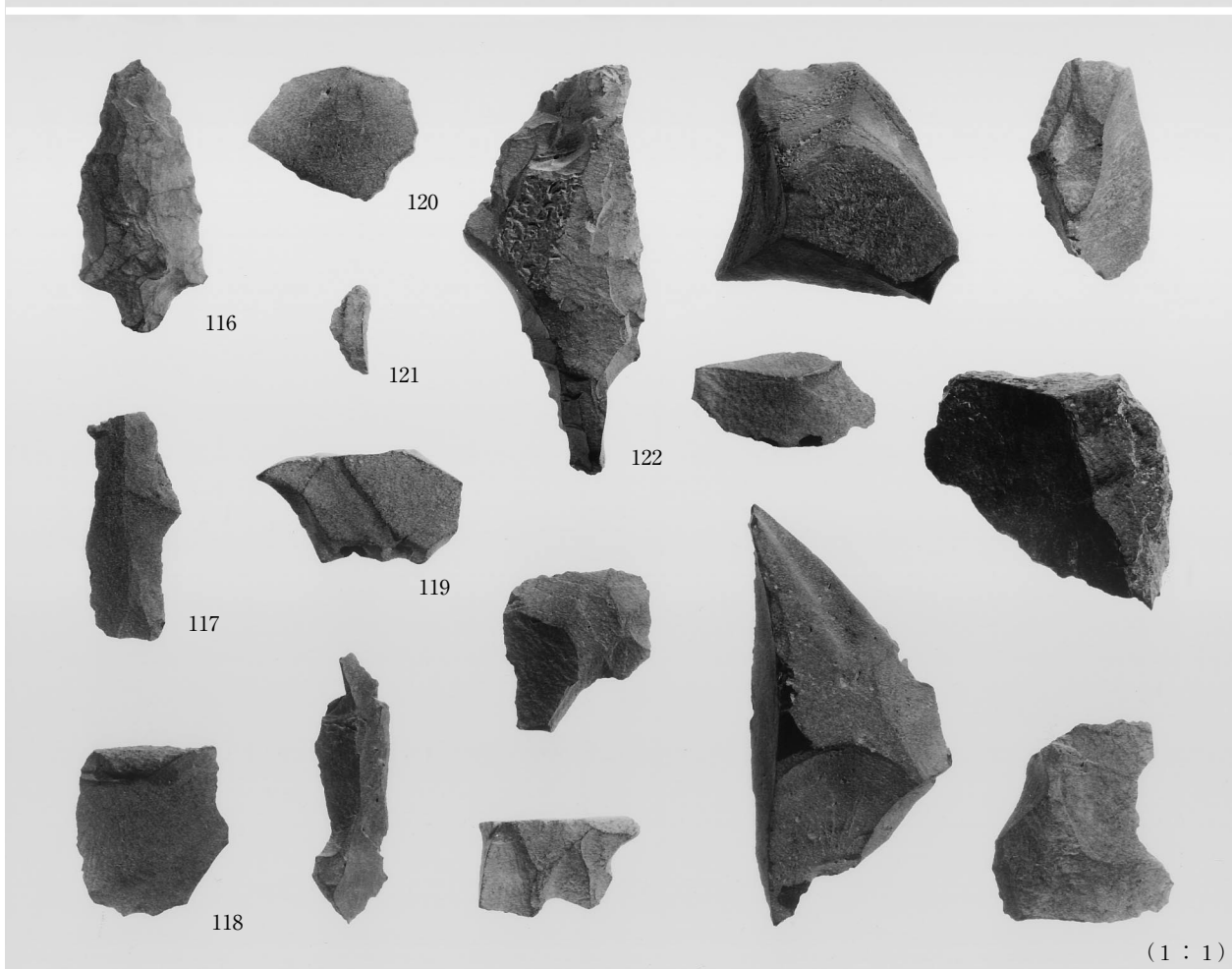
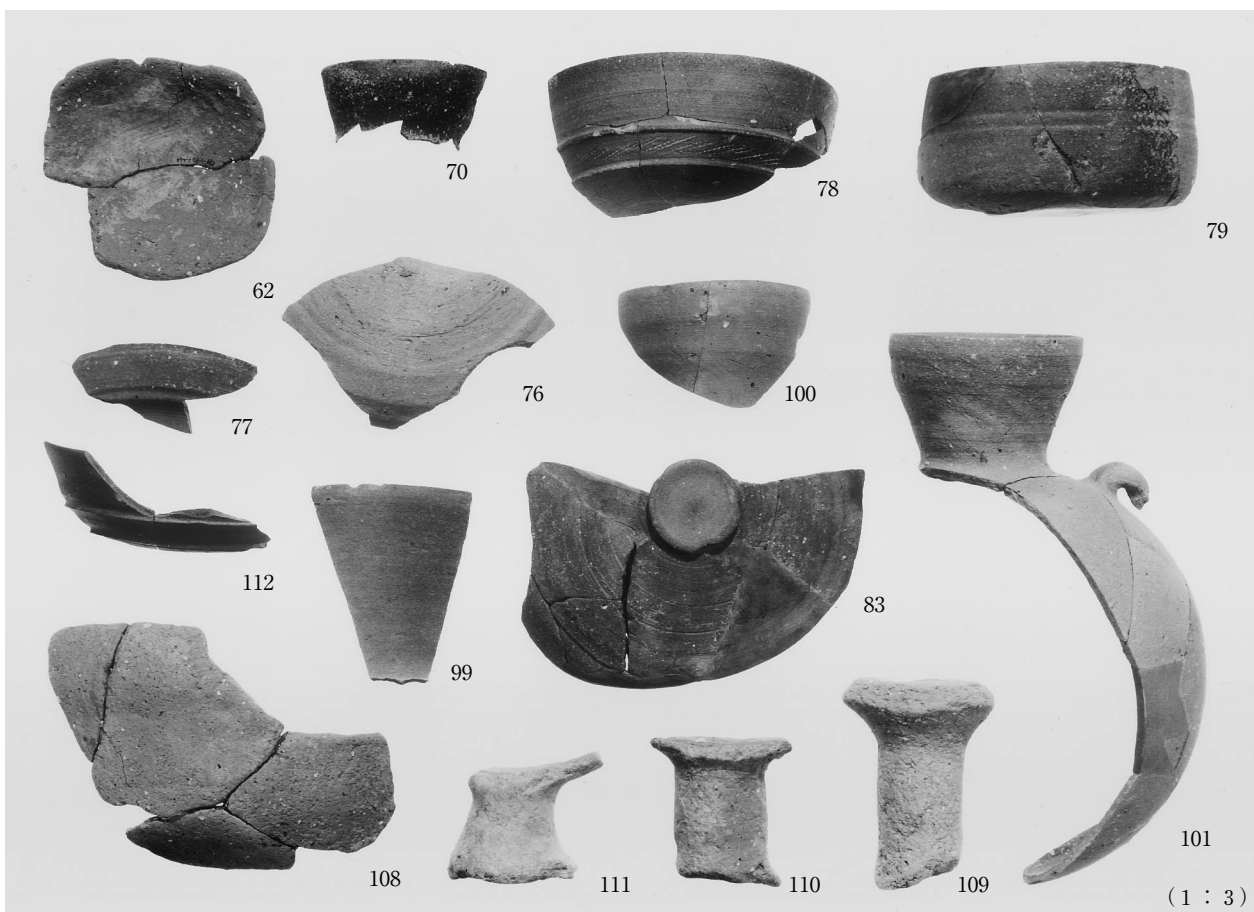


(1:5)

107



106



報告書抄録

ふりがな	ねやみなみいせき・おくやまいせき							
書名	寝屋南遺跡・奥山遺跡							
副書名	一般国道1号バイパス（大阪北道路）・第二京阪道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	(財)大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第159集							
編著者名	伊藤武、小西絵美							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791							
発行年月日	2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ねやみなみいせき 寝屋南遺跡	ねやがわしねやちさき 寝屋川市寝屋地先	27215	25	34° 45′ 45″	135° 39′ 20″	2003.5.12 ～ 2003.10.24	5,830m ²	一般国道1号 バイパス (大阪北道路) ・第二京阪道 路建設
おくやまいせき 奥山遺跡				60	34° 45′ 34″	135° 39′ 10″		
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
寝屋南遺跡	集落	飛鳥	掘立柱建物5棟 竪穴住居2棟 溝・土坑	土師器、須恵器、石鏃		軸を揃え、整然と配置 短期間の集落		
奥山遺跡	古墳	古墳	円墳	土師器、須恵器、玉類、耳環 鐔、刀子、鉾、鉄鏃、両頭金具 鉄斧、鉋、馬具類		単独墳 副葬品多種		
要約	寝屋南遺跡		7世紀中葉の一時期、短期間の集落					
	奥山遺跡		6世紀後葉に築造され、7世紀初頭まで追葬が行われた横穴式石室を内部主体とする円墳。群集せず、単独で存在。副葬品は土器のほか、装身具、武器、工具、馬具などさまざま。耳環の数から6体が埋葬されていたことが判明。					

(財) 大阪府文化財センター調査報告書 第159集

寝屋南遺跡・奥山遺跡

一般国道1号バイパス(大阪北道路)・第二京阪道路建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2007年3月30日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター
大阪府堺市南区竹城台3丁目21番4号

印刷・製本／株式会社明新社
奈良市南京終町3丁目464番地